

福岡市

西新町遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第203集

1989

福岡市教育委員会

福岡市 西新町遺跡



調査番号 8719
遺跡略号 NSJ-4

1989

福岡市教育委員会

序

福岡市では今年3月、アジア・太平洋博覧会をシーサイドももちで開催することに決定しました。地下鉄西新駅から南ゲートへの道路・都市計画道路西新通り線の拡幅を計画しました。今回の調査は西新町通り線の拡幅工事に伴うもので昭和62年6月に発掘調査を実施した西新町遺跡の調査報告書です。

西新町遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての有名な遺跡であります。地下鉄の調査でも多くの遺構、遺物が検出され、大規模な砂丘遺跡であることが判明しました。朝鮮系の細型銅剣や南方産のゴホウラの貝輪が出土するなど大陸や南方との交流をうかがうことができます。

今回の調査では陶質土器や朝鮮系土器が出土し、彼地との交流が頻繁であることを知るとともに、西新町遺跡がさらに東側に拡大することが判明しました。

本書はこれらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が市民をはじめ多くの方々の文化財に対する御理解を深め、さらに学術研究に活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査、整理報告まで多くの方々の御理解と御協力に対し、心から感謝を表する次第であります。

平成元年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 佐藤 善郎

例　　言

1. 本書は福岡市早良区西新町における都市計画道路西新通り線の拡幅にともない、福岡市教育委員会が土木局の令達を受け、昭和62年度に実施した西新町遺跡4次調査の報告書である。
2. 本書に使用した遺構図は担当者の他に田崎博之、池田光男、山口満があたり、製図は他に濱石正子があたった。
3. 遺物実測、製図は中野純江、濱石正子、池田光男、入江のり子があたった。
4. 本文中に使用する略号は住居址-SC、土壌-SK、溝-SDとした。
5. 本書に使用した写真は遺構、遺物とも松村が行なった。
6. 本書で用いる遺構図の方位は磁北である。
7. 本報告に係わる遺物、記録類はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、管理されるので活用されたい。
8. 本書の執筆、編集は松村が行なった。

本文目次

第1章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査の組織.....	1
第2章 遺跡の立地と環境.....	3
第3章 発掘調査の記録.....	5
1. 調査経過と概要.....	5
1) 調査経過.....	5
2) 調査概要.....	5
2. I 区の調査.....	7
土壤の調査.....	7
3. II 区の調査.....	16
住居址の調査.....	16
土壤の調査.....	34
4. III・IV 区の調査.....	49
住居址の調査.....	51
溝の調査.....	57
土壤の調査.....	61
ピット出土の土器.....	68

挿図目次

Fig. 1	西新町遺跡位置図	4
Fig. 2	調査区地形図（縮尺：1/2500）	6
Fig. 3	SK-01・02実測図（縮尺：1/30）	7
Fig. 4	SK-01出土遺物実測図	8
Fig. 5	SK-03実測図（縮尺：1/30）	9
Fig. 6	SK-03出土遺物実測図(1)	10
Fig. 7	SK-03出土遺物実測図(2)	11
Fig. 8	SK-04実測図（縮尺：1/30）	11
Fig. 9	SK-04出土遺物実測図(1)	12
Fig. 10	SK-04出土遺物実測図(2)	13
Fig. 11	SK-05実測図（縮尺：1/30）	14
Fig. 12	SK-05出土遺物実測図	15
Fig. 13	SC-13実測図（縮尺：1/60）	16
Fig. 14	SC-13出土遺物実測図(1)	17
Fig. 15	SC-13出土遺物実測図(2)	18
Fig. 16	SC-13出土遺物実測図(3)	19
Fig. 17	SC-16実測図（縮尺：1/60）	21
Fig. 18	SC-16出土遺物実測図(1)	23
Fig. 19	SC-16出土遺物実測図(2)	24
Fig. 20	SC-16出土遺物実測図(3)	25
Fig. 21	SC-16出土遺物実測図(4)	26
Fig. 22	SC-18実測図（縮尺：1/60）	27
Fig. 23	SC-28実測図（縮尺：1/60）	27
Fig. 24	SC-18・28・32出土遺物実測図	28
Fig. 25	SC-31実測図（縮尺：1/60）	29
Fig. 26	SC-31出土遺物実測図(1)	30
Fig. 27	SC-31出土遺物実測図(2)	32
Fig. 28	SC-31出土遺物実測図(3)	33
Fig. 29	SC-31出土遺物実測図(4)	34
Fig. 30	SK-06～08・15実測図（縮尺：1/30）	35

Fig. 31	各土壙出土遺物実測図	37
Fig. 32	SD-09・SK-14・19実測図（縮尺：1/30）	38
Fig. 33	SK-20・21・23実測図（縮尺：1/30）	39
Fig. 34	SK-20・21出土遺物実測図	41
Fig. 35	SK-23出土遺物実測図	42
Fig. 36	SK-24実測図（縮尺：1/20）	43
Fig. 37	SK-24出土遺物実測図(1)	44
Fig. 38	SK-24出土遺物実測図(2)	45
Fig. 39	SK-24出土遺物実測図(3)	46
Fig. 40	SK-25～27実測図（縮尺：1/30）	47
Fig. 41	SK-25～27出土遺物実測図	48
Fig. 42	SK-29出土遺物実測図	50
Fig. 43	SK-34実測図（縮尺：1/20）	51
Fig. 44	SC-39実測図（縮尺：1/60）	52
Fig. 45	SC-39出土遺物実測図(1)	53
Fig. 46	SC-39出土遺物実測図(2)	54
Fig. 47	SC-39出土遺物実測図(3)	55
Fig. 48	SC-39出土遺物実測図(4)	56
Fig. 49	SC-40実測図（縮尺：1/60）	57
Fig. 50	SC-40出土遺物実測図(1)	58
Fig. 51	SC-40出土遺物実測図(2)	59
Fig. 52	SD-44出土遺物実測図(1)	60
Fig. 53	SD-44出土遺物実測図(2)	62
Fig. 54	SD-44出土遺物実測図(3)	63
Fig. 55	SD-44出土遺物実測図(4)	64
Fig. 56	SK-45・50実測図（縮尺：1/30）	65
Fig. 57	SK-45・50出土遺物実測図	67
Fig. 58	SK-51・52実測図（縮尺：1/30）	68
Fig. 59	SK-51・52出土遺物実測図	69
Fig. 60	ピット出土遺物実測図	70

図 版 目 次

- PL. 1 I区全景(北より)(1) SK-01(東より)(2)
- PL. 2 II区全景(北より)(1) II区B全景(北より)(2)
- PL. 3 SC-16(北より)(1) SC-16遺物出土状況(2)
- PL. 4 SC-16柱穴検出状況(1) SC-16焼土土層(2)
- PL. 5 SC-16焼土検出状況(1) SC-16遺物出土状況(2)
- PL. 6 SC-18遺物出土状況(1) SC-31全景(東より)(2)
- PL. 7 SC-31遺物出土状況(1) SC-31遺物出土状況(2)
- PL. 8 SC-31遺物出土状況(1) SC-31カマド検出状況(北より)(2)
- PL. 9 SK-06(西より)(1) SD-09(北より)(2)
- PL. 10 SK-20(南より)(1) SK-20甕出土状況(2)
- PL. 11 SK-24遺物出土状況(1) SK-34(西より)(2)
- PL. 12 SK-29(西より)(1) III区全景(北より)(2)
- PL. 13 SC-39全景(東より)(1) SC-39陶質土器出土状況(2)
- PL. 14 SC-40全景(西より)(1) SD-44(東より)(2)
- PL. 15 SD-44ノミ状鉄器出土状況(1) SP-66高壙出土状況(2)
- PL. 16 IV区全景(北より)(1) SK-50(西より)(2)
- PL. 17 SK-01・03・04出土遺物
- PL. 18 SK-04・SC-13・16出土遺物
- PL. 19 SC-16・18・31出土遺物
- PL. 20 SC-31出土遺物
- PL. 21 SK-15・20・24出土遺物
- PL. 22 SK-24・25・29出土遺物
- PL. 23 SC-39出土遺物
- PL. 24 SC-39・40・SD-44出土遺物
- PL. 25 SD-44・SP-13・21・66・SK-50出土遺物
- PL. 26 各遺構出土遺物

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市では平成元年にアジア・太平洋博覧会を開催することになり、その場所としてシーサイドももち（福岡市百道・地行地区埋立地）に決定した。博覧会会場までの道路は藤崎と西新の2本しかない。現状では道路幅が狭く、大学等もあり交通量が多く博覧会関連の工事用大型車輌の乗り入れが危険であること、また博覧会開催時の南ゲートへの出入口の機能を有することから都市計画道路西新通り線を拡幅することになった。昭和61年8月、港湾局臨海開発事務所より事前調査願いが提出された。申請地は元寇防塁（西新地区）の推定線上にあたり、さらには西新町遺跡に隣接していたので試掘調査を実施することにした。昭和61年10月28日、12月9日に試掘調査を実施した結果、申請地の中央部より少し南に寄った地点より古墳時代前半の土器及び溝が確認された。元寇防塁の推定地には遺構、遺物は出土していない。これは、現道の西新通り線の建設時（大正13年）に調査された後破壊されたためであろう。古墳時代の住居址は修猷館高校の図書館改築に伴う調査で検出されているので、西新遺跡の集落がさらにこの地点まで広がるものと考え、本調査を実施することになった。

2. 調査の組織

調査委託	福岡市土木局街路課 福岡市港湾局臨海開発事務所
調査主体	福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課
調査総括	埋蔵文化財課長 柳田純孝
	埋蔵文化財課第一係長 折尾学
庶務担当	松延好文
調査担当	松村道博
	小林義彦 杉山富雄 下村智（試掘担当）
調査補助	田崎博之 池田光男 山口満
整理補助	濱石正子 中野純江
発掘作業	山崎光一 柴田松藏 大津圭祐 田中真二 池田浩一 黒木静子 桑野正子 江越初代 関加代子 井手口美代子 曾根崎昭子 村崎祐子 野口ミヨ 衛藤富子 村田敬子 門司弘子 近藤澄江 演地フサエ 福悦子
整理作業	平川理恵子 酒井もと子 林由紀子 原田夏子 中牟田有美子 西村京子 瀬戸満寿江 生垣綾子 村田喜代美

このほかにも臨海開発事務所の井上、下村氏をはじめ地元の多くの方々のご理解、ご協力を頂いた。記して感謝の意を表します。

第2章 遺跡の立地と環境

西新町遺跡は福岡市早良区西新、百道、高取に位置する。今回の調査地点は修猷館高校の東側を南北に走る西新通り線の東側拡幅部分で、国道202号線の祖原交差点より北側へ約200mの位置にあたる。福岡市遺跡分布地図西部Ⅰでは遺跡の範囲に含まれていなかったが、試掘調査の結果、遺跡が拡大することが想定された。

遺跡は博多湾の左転回流によって形成される弓状砂丘の一つ百道原の東端に位置する。早良平野と福岡平野接点にあたり、両平野を分割する低丘陵が南北に延び、その先端である。低丘陵の西側には龜原山、栄山の第三紀層の独立丘陵が控えている。北側には元寇防塁が東西に築かれ、その先数百mで海岸線であったが、埋め立てにより砂丘遺跡の外観を失している。東側は植井川、西側は室見川によって限られている。

西新町遺跡は弥生時代～古墳時代の遺跡として著名であり、弥生時代終末期の標準遺跡であった。しかし昭和51～53年の都市高速鉄道（地下鉄）開通に伴う発掘調査（2次）によってその実態が初めて明らかになった。弥生時代中～後期の甕棺30基、古墳時代前期堅穴住居址57軒が検出され、修猷館高校を中心として東西400m、南北200mの広大な範囲に亘る砂丘上の遺跡であることが判明した。さらに修猷館高校図書館改築に伴う調査（3次）でも古墳時代前期の堅穴住居址が7軒検出され、朝鮮半島系上器が数多く出土し、彼地との交流をうかがわせる。他に修猷館高校の南側で民間ビル建設に伴う調査（1次）では弥生時代中期の甕棺が数基確認されている。

西新町遺跡と同一砂丘上に位置する藤崎遺跡でも弥生時代の甕棺墓群と古墳時代前期の方形周溝墓が確認されている。6号方形周溝墓からは三角縁神獣鏡が出土し注目された。被葬者は特定個人ではなく特定集団の共同墓地の可能性が強く、背景に海洋交易による富の蓄積が指摘されている。西新町遺跡3次調査でも朝鮮半島との交流を示す資料があり、両遺跡が同一砂丘上に営まれており、相互に深い関係をもつものであろう。

早良平野の前期古墳に五島山古墳がある。早良平野の先端の第3紀層の独立丘陵に立地する円墳群で頂部に位置する1基の箱式石棺から船載の二神二獸鏡2面、銅鏡、鐵剣、玉類が出土している。十郎川の西岸には宮ノ前遺跡がある。円墳の裾部に数基の主体部、中央部に1基の主体部があり、集団墓から特定個人墓への萌芽が認められる。

集落址では洪積台地に位置する有田、小田部遺跡がある。绳文時代～中・近世に至る遺構があり、古墳時代前期の住居址も多く検出されている。叶岳の裾部に立地する野方中原、柳原遺跡では堅穴住居址が群集し、大集落を形成している。

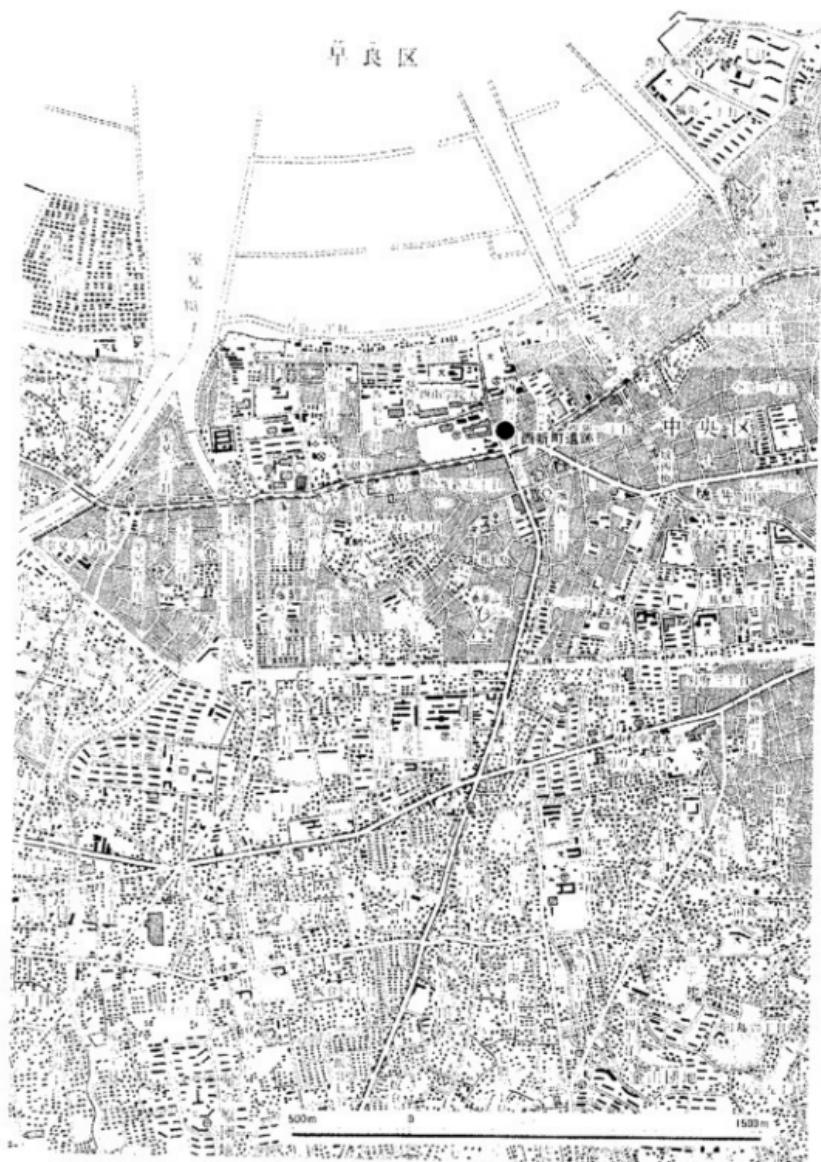


Fig. 1 西新町遺跡位置図 (1/25,000)

第3章 発掘調査の記録

1. 調査経過と概要

1) 調査経過

調査は現道の拡幅工事に伴うもので、現道幅4mを東側に8mの拡幅部分の発掘調査である。道路に面して病院、会社事務所等が占地しており、その出入口を確保する必要から調査区を四区に分割し、北側からI～IV区とした。なお出入口部分については軟弱な砂層地盤であるため発掘調査を断念した。また試掘調査で遺構下面まで1.5m前後の深さであるとの予測を得たので、I区に鋼矢板をめぐらして調査を実施した。

I区（6月29日～7月18日）

6月30日、鋼矢板を布設し、7月6日より重機による表土剥ぎを行う。遺構確認作業中に土師器が少量出土し、遺構が存在する確信を得る。しかし全体に擾乱が多く、少数の遺構しか検出できない。

II区（7月22日～8月27日）

吉村病院の前面の駐車場部分にあたり、さらにA、B区に分割して調査を行う。A区の調査が終了した後埋め戻してアスファルトで仮舗装したので、A区とB区の間に未調査区が生じる。住居址、土壙が多く検出される。土器は砂地に埋もれているので刷毛目まで明瞭に残る。

III区（8月29日～9月16日）

調査区が住宅及び飲食店の前面であり、人通りが多くなるので、歩道部分を確保するため調査区が狭くなる。中央部分は擾乱が多く遺構の残りは悪い。住居址が二軒検出され、SC-39から陶質土器が出土する。

IV区（9月17日～10月3日）

表土除去時に水道管を破損。III区と同じ深さでは遺構は検出できない。序々に下げていくがI～III区と同様な基盤破壊ではなく、遺構検出が困難であった。現地表下1.3mで灰白色粗砂が現れ、その面で土壙数基が検出される。10月3日埋め戻しを行い調査を終わる。

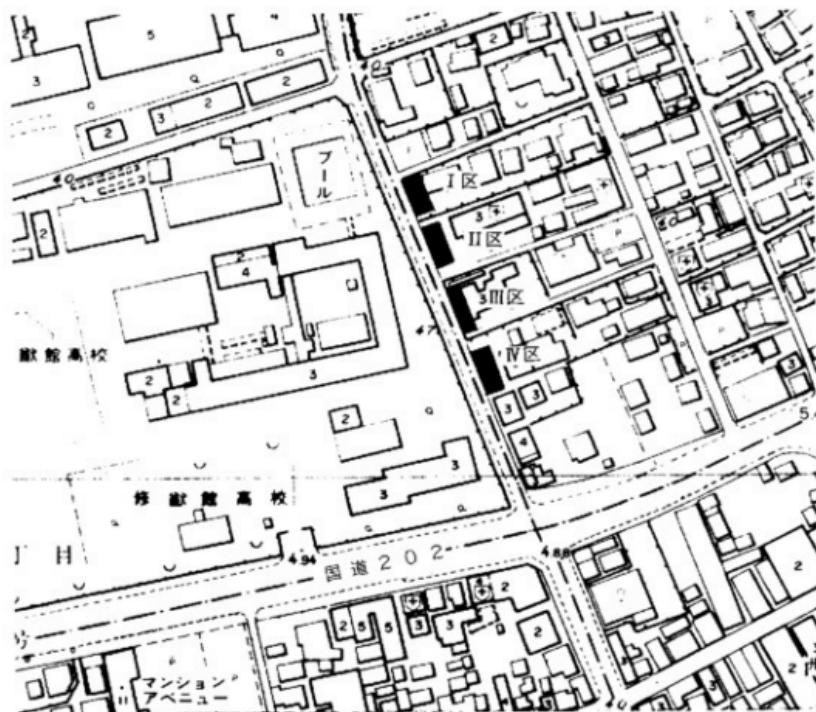
2) 調査概要

調査地点は百道浜と呼ばれる砂丘上に立地しているのと、夏季の熱い日照の下での調査で、遺構面の乾燥が著しく、水を撒いても直ぐに白く乾いてしまう状態で遺構の検出は困難であった。遺構の一部には掘り違いや、あるいは壁面の崩落により検出時と実測時に計測値が異なるものもある。

今回の調査は道路拡幅部の調査で、幅7～8m、長さ100mの狭長な面積であったが、古墳時

代前期（布留併行期）の竪穴住居址8軒、上壙21基が検出できた。中でもSC-31は土器の完形品が多く、各器種がセットで出土し、使われた位置をさほど動いていないものであろう。また北壁中央部の焼土はカマドと考えられ、その初現期のものであろう。SC-39からはほぼ完形品の陶質土器が1点出土している。外面は格子目タタキである。他に上師質の瓶の底部片、及び把手も数点出土しており、朝鮮半島との交流をうかがわせる。住居址の他に大型の溝が1条ある。南肩部から溝底までの調査で全体の幅は明らかではないが、3~4mの幅と推定され、東西に伸びる大溝であろう。遺構は調査区の中央部II~III区に多く、I、IV区で少なくなる。丁度砂丘の高い位置に集落があり、低い部分では少なくなる傾向を示す。

遺構は検出順に番号を付した。砂丘であり遺構と攪乱土壙の覆上が酷似していたので、遺構と考えていたものが掘り進む途中で攪乱上壙と判明したり、遺構として把握できないものがあり、多くの遺構番号が欠番となっている。



2. I 区の調査

I 区は調査区の北端に位置する。全体に建物の基礎、ゴミ穴等の擾乱が著しく、遺構の遺存が悪く、数も極めて少ない。試掘調査ではこれより以北は遺構が確認されていないことを考えれば、I 区が西新町遺跡の北東端と推定される。

調査区は東西7.5m、南北17mを測る。遺構の掘り込み面は黄白色砂層である。遺構面までは南端で地表下0.5m、北端で1.4mを測り、南から北へ緩やかな傾斜を示し、遺構が少なくなる。SK-01は近世の土壌であるが、他は古墳時代前期の土壌である。SK-04、05は浅い掘り込みで土壌より住居址の可能性がある。

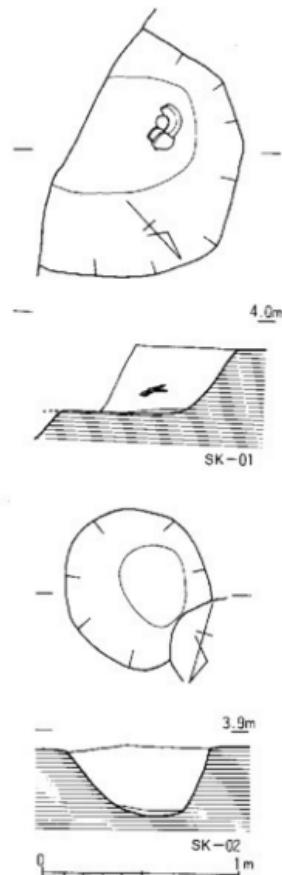


Fig. 3 SK-01・02実測図 (縮尺: 1/30)

土壌の調査

SK-01 (Fig. 3、PL. 1)

調査区の南寄りに検出した近世の土壌である。南北は建物の基礎で破壊されている。東西1.46m、南北0.98mを測る長楕円形の土壌である。断面は逆台形で底面は平坦となる。覆土は木炭混りの黒灰色軟質土である。遺物は少なく伊万里の染付皿と土師質皿である。

出土遺物 (Fig. 4、PL.17)

1は染付皿である。口径18.0cm、器高2.8cmを測る。見込みに濃緑の草花文を描き、口縁直下に細線を施す。胎土は灰白色で外底部3ヶ所にハリの痕跡を残す。2は土師質の小皿である。底部は糸切りで中央部が窪む。口縁部に薄く煤が付着しており、灯明皿として使用されたものであろう。

SK-02 (Fig. 3)

SK-01のすぐ北にある楕円形の土壌である。覆土はSK-03と同じ灰白色～暗灰色砂質土である。西端を擾乱土壌で切られ、断面皿状の小さな土壌である。東西0.8m、南北0.9m、深さ0.4mを測る。遺物は土師器の小片が出土している。

SK-03 (Fig. 5)

調査区の中央部に検出した大型の不定形土壌である。西側を擾乱により大きく切られ、南、北側の隅

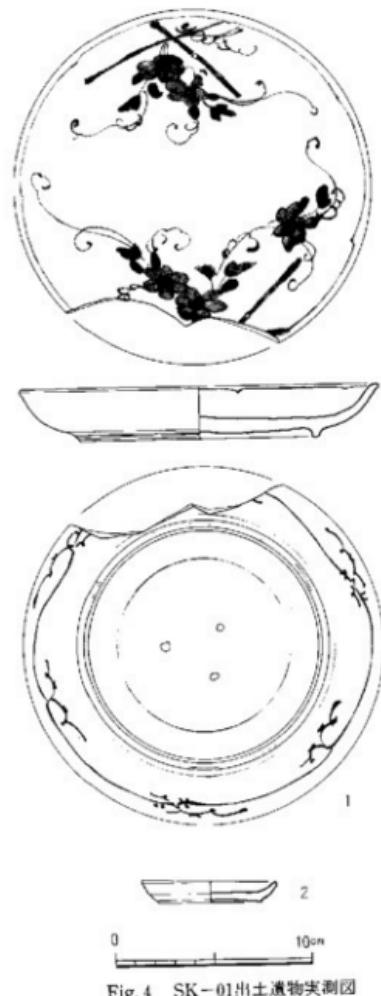


Fig. 4 SK-01出土遺物実測図

器台（12、13） 小型丸底壺とセットをなす器台である。12は受部だけの破片である。口縁下で屈曲して立ち上がる。外面はヘラ研磨、内面には縦位のヘラ研磨で暗文を描く。13は脚部である。裾部中位に焼成後、3個の凹孔を穿つ。内面は細い刷毛目、外面は丁寧なヘラ研磨を施す。胎土は精良で焼成堅緻、色調は赤褐色である。

陶質土器（6） 胴部から口縁部にかけての破片である。口径17.8cm、残存高4.6cmを測る。口縁端は角張り、中央部が少しくぼむ。胴部上半は繩文タタキ、口縁部から内面は横ナデ調

も破壊され全体の形状は明確ではないが、隅九の長方形を示すものであろう。南北2.8m、東西1.9m、深さ0.5mを測る。北東部の壁面はなだらかで、南壁は急傾斜を示す。底面は一度平坦になり、中央部近くでさらに深くなる。出土遺物は床面より約30cm上で出土しており、ある程度土壤が埋まってからの投棄である。

出土遺物 (Fig. 6・7, PL.17・26)

土師器

壺（1、7、8） 1は頸部～胴部にかけての破片である。外面には粗い縦位の刷毛目、内面は横位の刷毛目調整を行う。頸部と胴部の境に刻目突帯をめぐらす。7は小型丸底壺の口縁部から胴部にかけての破片である。8は短頸壺で復元口径13.3cm、残存高7.7cmを測る。胴部外面はヘラケズリの後刷毛目調整、内面は荒い刷毛目調整を施す。

甕（2～5） 3～5は球形に近い胴部から内窓気味に口縁部となる一群である。胴部外面は刷毛目、内面はヘラケズリ調整である。3は肩部に描波状文をもつ。

鉢（10） 口径14.5cm、器高8.0cmを測る。砂粒を多く含み、焼成良好で色調は明褐色、底部近くが一部黒変している。外面の胴部上半部は刷毛目、口縁部は横ナデで刷毛目を消す。胴部下半はヘラケズリである。

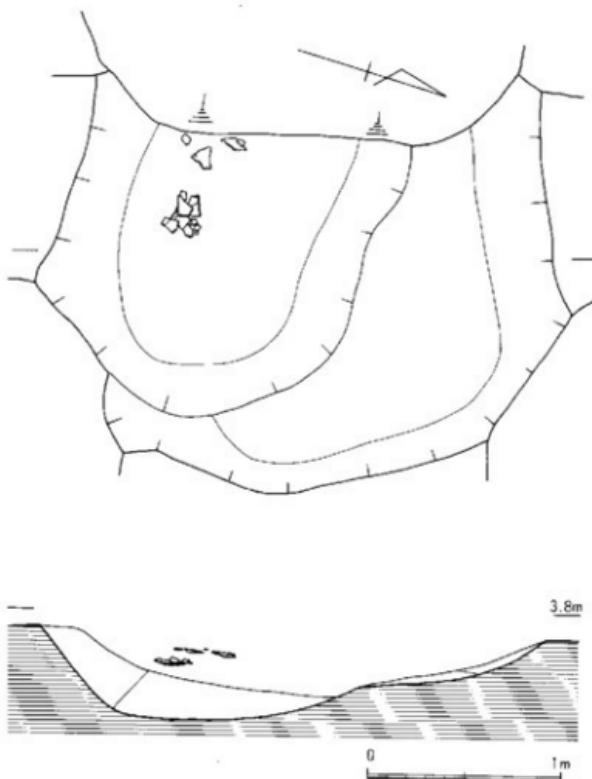


Fig. 5 SK-03実測図（縮尺：1/30）

整を施す。色調は青灰色、胎土には黒色粒子を少し含むが精良で、焼成堅緻である。

土製品 (15) 円筒形の土錐である。上端径2.6cm、下端径3.0cm、長さ6.6cmを測る。中心に径1.1cmの孔をもつ。外面はナデにより調整し赤色顔料が付着する。

石製品 (14) 砂岩製の砥石である。4面を使用し、各面の中央部が少し窪む。

SK-04 (Fig. 8)

調査区の西端に検出した浅い土壙である。南側の大部分は擾乱土壙に大きく切られ、全体の形状は明確でない。現状では北壁をほぼ東西にとる直角三角形を示す。遺存しているのは東北部の一部で本来隅丸長方形を呈していたものと推定される。一応土壙を考えたが、その形状から竪穴住居の可能性がある。床面は中央部が少し窪むが踏みかためられた状態は示していない。現存する規模は東西2.85m、南北1.5m、床面までの深さは0.2~0.3mを測る。遺物は土壙

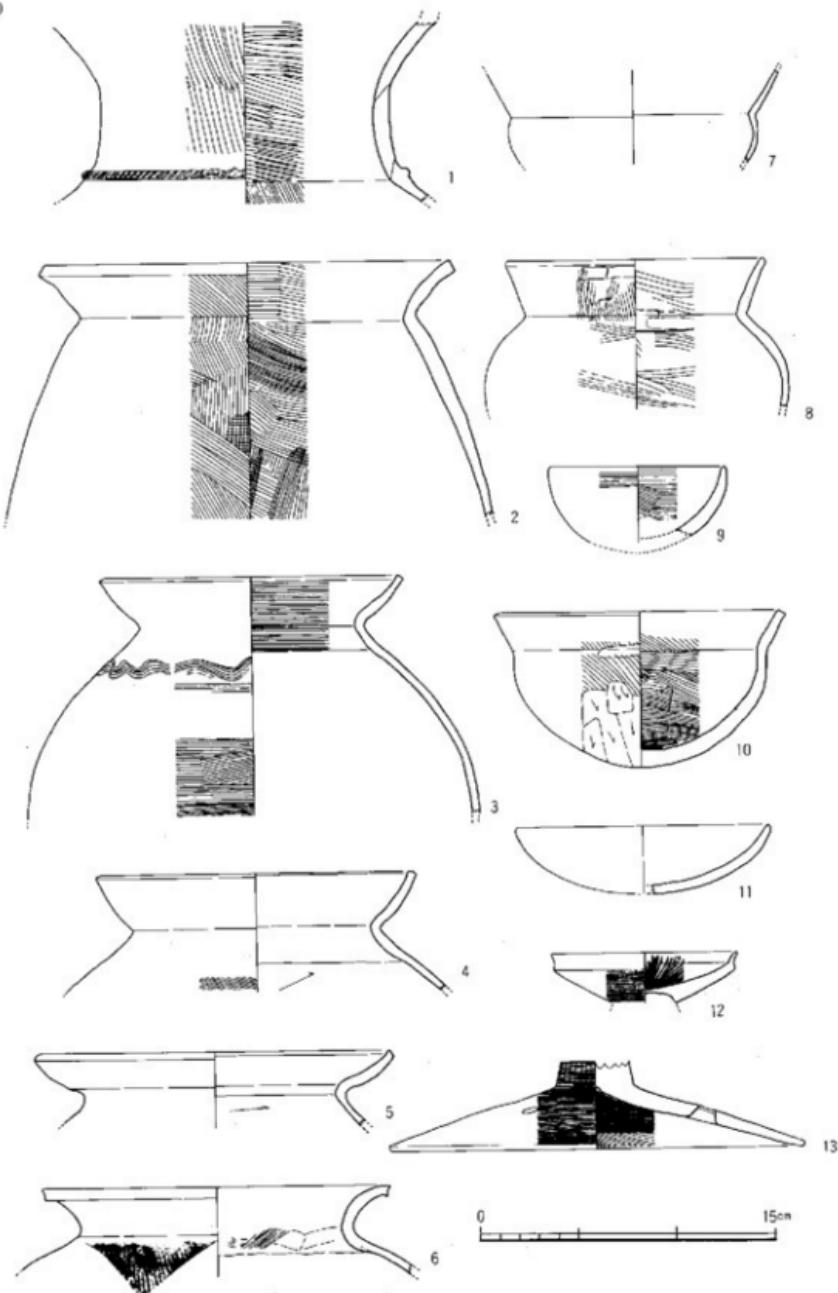


Fig. 6 SK-03出土遺物実測図(1)

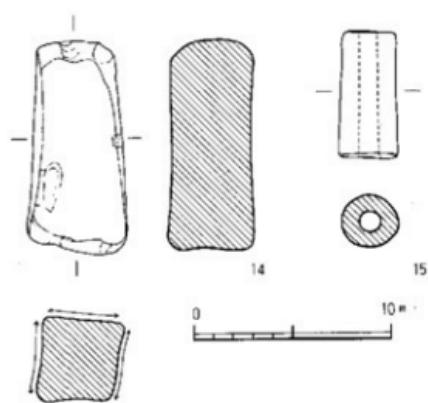


Fig. 7 SK-03出土遺物実測図(2)

の覆土から出土したのは少量の破片で、大部分はその南側の攪乱部からの出土である。他に遺構と切り合ひがなく、SK-04土壤の土器と考えられるのでここで一括して述べる。

出土遺物 (Fig.9~10, PL.17·18·26)

土師器

壺 (1~4) 1は口縁部と底部の一部を欠失し、卵形の胸部をもつ壺である。最大径は胴上半にある。

胴外面は刷毛目で口縁部近くはナデ調整、内面はヘラケズリを施す。底

部は平底に近い丸底である。2~4は内湾しながら外に開く口縁部をもつ。口縁端部を肥厚させ、口縁下をふくらませる。胴外面は刷毛目、内面はヘラケズリである。

壺 (5, 6) 小型丸底壺である。5は復元口径13.2cm、器高6.1cmを測る。胴部から底部にかけてヘラケズリ、胴部上半は刷毛目調整のあとヘラ研磨を施し、内面もヘラ研磨をしている。

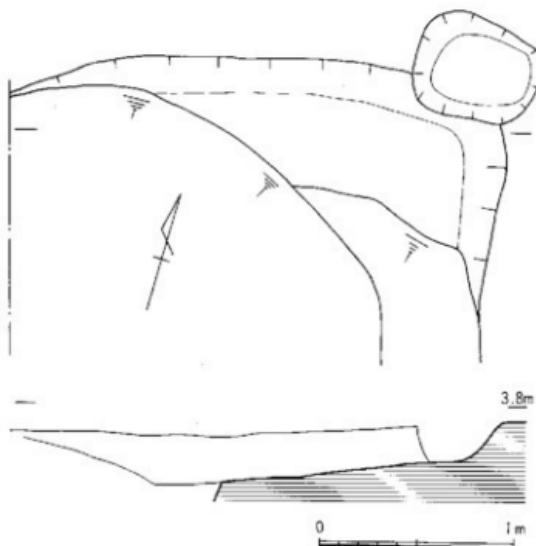


Fig. 8 SK-04実測図 (縮尺: 1/30)

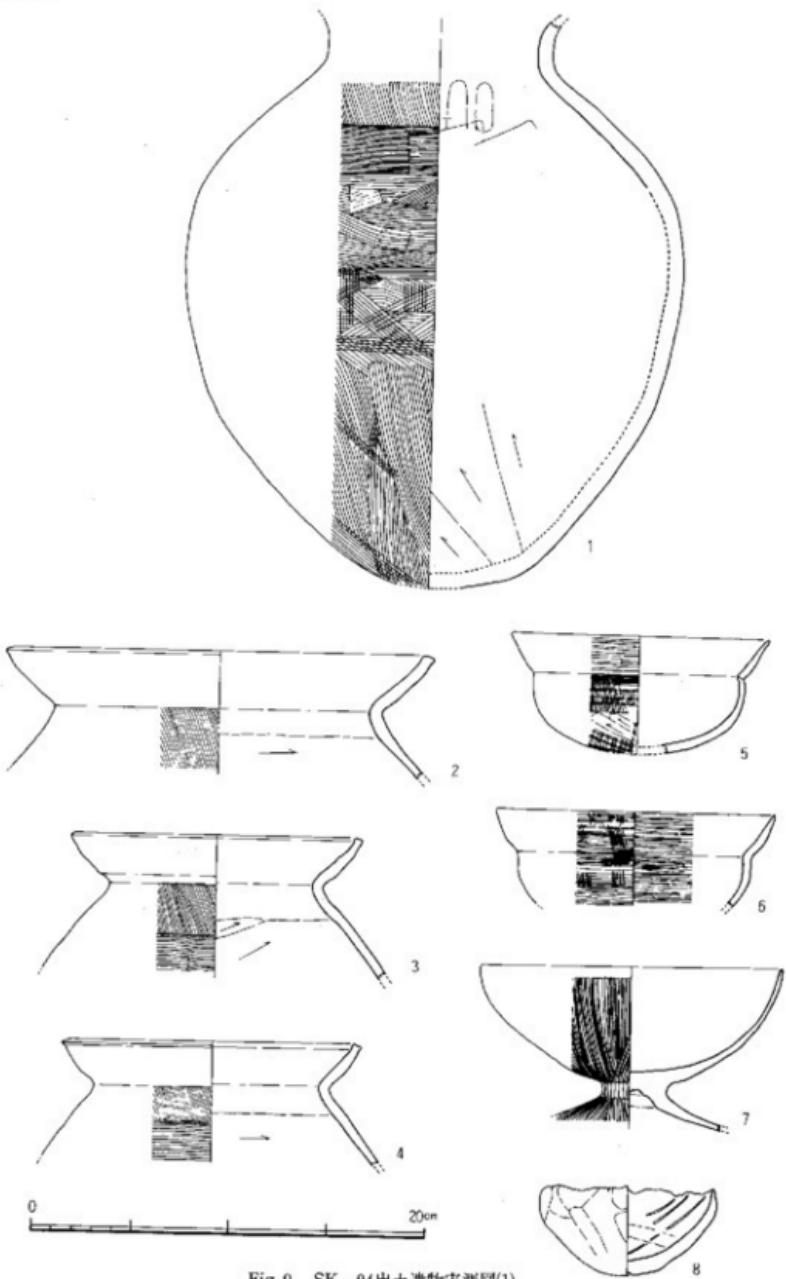


Fig. 9 SK-04出土遺物実測図(1)

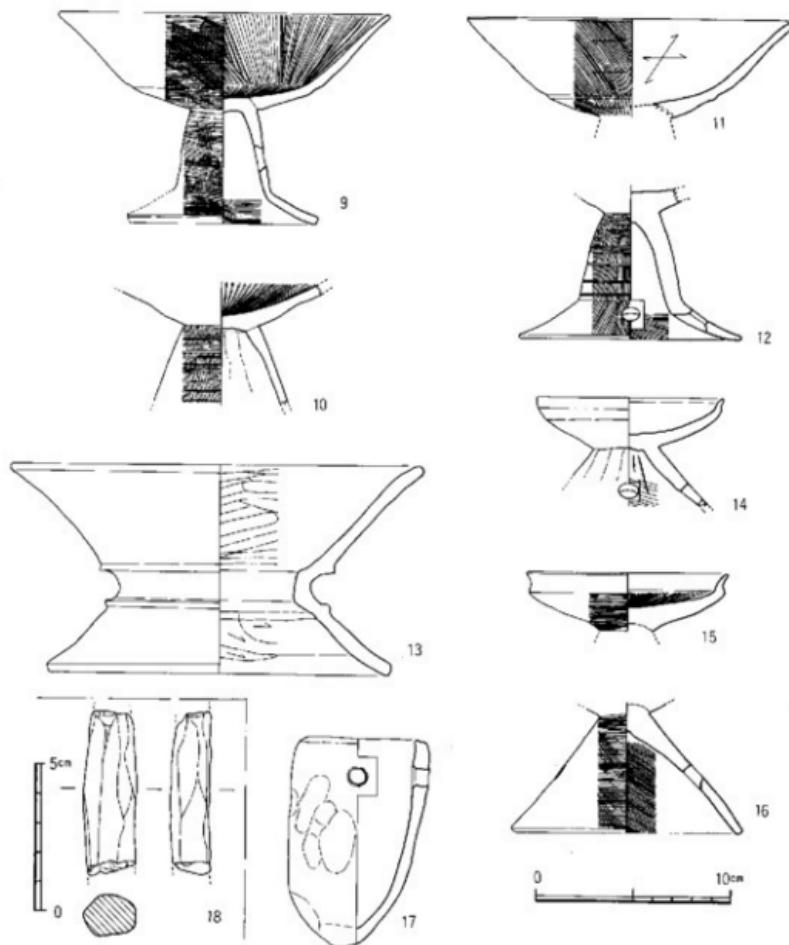


Fig.10 SK-04出土遺物実測図(2)

器壁は薄く丁寧なつくりである。6も内外面ともにヘラ研磨を施す。

壇(7、8) 7は脚付の壇である。口径15.6cm、残存高8.4cmを測る。内外面とも縦位のヘラ研磨で、口縁部を横ナデする。8は手搾である。口径9.0cm、器高4.6cmを測る。胎土に石英粒を多く含む。焼成は良好で色調淡褐色～暗灰褐色を呈する。外面には指跡が残り口縁部は波状をなす。

高杯(9～12) 9は脚の一部を欠損するがほぼ完形品である。壇部は体部との境で畳曲し、

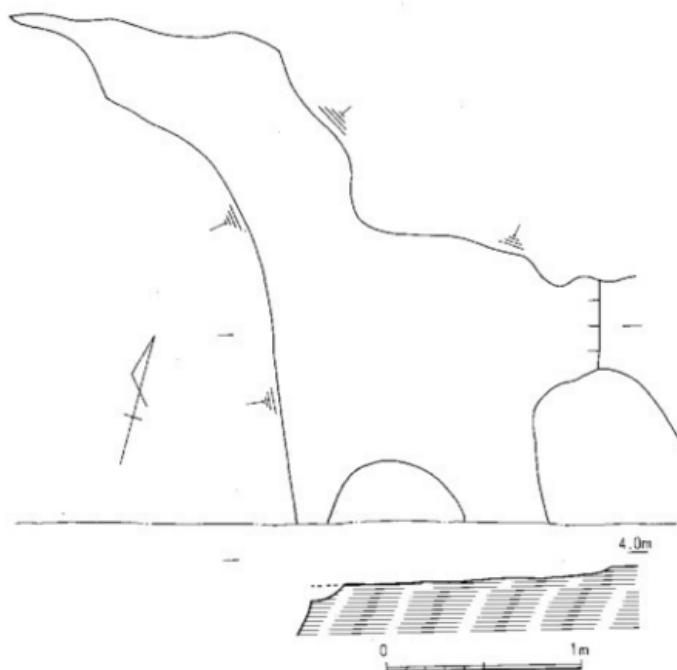


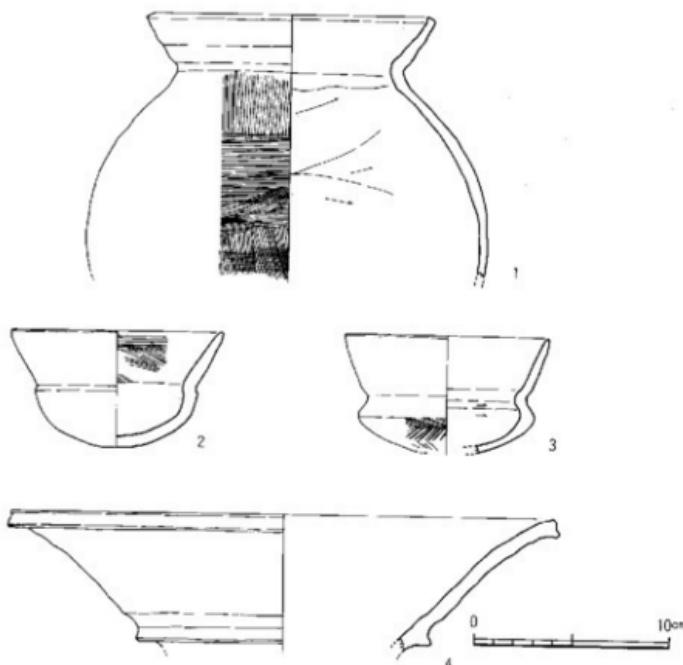
Fig.11 SK-05実測図（縮尺：1/30）

外反しながら口縁部となる。端部は丸く收める。脚は筒部から裾部が大きく開く。脚部には2孔をもつ。口径17.0cm、器高10.8cmを測る。坏部外面は刷毛目の上から横位のヘラ研磨、内面は縱位のヘラ研磨が暗文となる。11は坏部下位の屈曲が明瞭である。12は脚部で刷毛目の後、横位の暗文状のヘラ研磨をする。

器台（13～16） 11は鼓形器台でくびれ部の上下に突帯をもつ。復元口径21.2cm、器高10.8cmを測る。外面横ナデ、内面は受部がヘラ研磨、脚部はヘラケズリである。14～16は小型丸底壺とセットをなすもので、受部が大きく屈曲する。14は受部の屈曲が緩やかで、脚部は大きく直線的に開く。受部外面から脚部外面はヘラ研磨である。

タコ壺（17） 硬弾形の器形で完形品である。口縁下に一孔を穿つ。外面には指跡が残り、ナデ調整である。口径6.4cm、器高10.8cmを測る。

石製品（18） 滑石製の石錘である。両端を欠損する。断面を橢円形に削り、両端を中央部より細くしている。



SK-05 (Fig.11)

Fig.12 SK-05出土遺物実測図

調査区の南西端に検出した土壌である。SK-04と同様大部分は建物の基礎で削り取られ、全体の形状を知ることができない。南北に延びる東壁が0.5m遺存するだけである。深さは0.1~0.2mで壁面はなだらかである。覆土から土師器が出土したので一応土壌としたが、浅い自然の産みの可能性もある。またSK-04と同様に住居址の可能性もあろうか。出土遺物は土師器で少量である。

出土遺物 (Fig.12)

土師器

甕（1） 球形に近い胴部から内弯気味に立ち上がり口縁部となる。口縁端部の内側を摘み出す。外面は継、横位の刷毛目調整で内面はヘラケズリ調整である。

壺（2、3） 小型丸底壺である。全体に器表面が荒れて調整は不明瞭である。2は胴部の張りが少なく口縁部が直線的に開く。口縁端部は丸く收まる。3は胴部が強く屈曲し、少し内弯しながら口縁部となる。

鼓形器台（4） くびれ部の突帯から上の受部片である。口縁端は外側に引き出され、中央部が窪む。内面は荒い研磨で他はナデ調整を行なう。

3. II区の調査

I区の南、吉村病院の西側の調査区である。調査区は病院の駐車場及び来院患者の出入口にあたり、その確保のため北部分をA区、南部分をB区に分割して調査を実施した。東西8.5m、南北18mの狭い範囲の調査区であったが5軒の竪穴住居址や土壤等を検出した。

A区では浅い位置でSC-13、SD-10を検出したのでその面で一度調査を実施し、さらに10cm下げて、2回目の調査を実施した。その面でSC-16、18、SK-20等全面にわたり遺構が検出できた。SK-20は全体が堅く締まった焼土で単独な炉跡である。SC-31では壺、甕、高壙等が一括して原形を保って出土し、さらに北壁近くにカマドをもつ良好な住居址である。

住居址の調査

SC-13 (Fig.13)

II区の北西に位置する隅丸方形の住居址である。北、西壁は調査区外に拡がるが、住居址の大部分は調査区内にある。南、東壁の現存長3.3m、2.9m、深さ0.4mを測る。4本の主柱穴の配置から西、北側への拡がりは1m前後で、本住居址は一辺4~5mの隅丸方形の住居址であろう。覆土は中央部は暗褐色~黒褐色砂質土で壁寄りは黄白色砂層に灰白色砂層が少量混入する。壁面は垂直ではなくいくぶん傾斜をもつ。床面はほぼ平坦で中央部が少し窪むが踏みかためた状況ではない。床面には7個のピットがあるが、そのうち主柱穴と考えられるのはP1、P2、P3、P6であり4本柱になろ

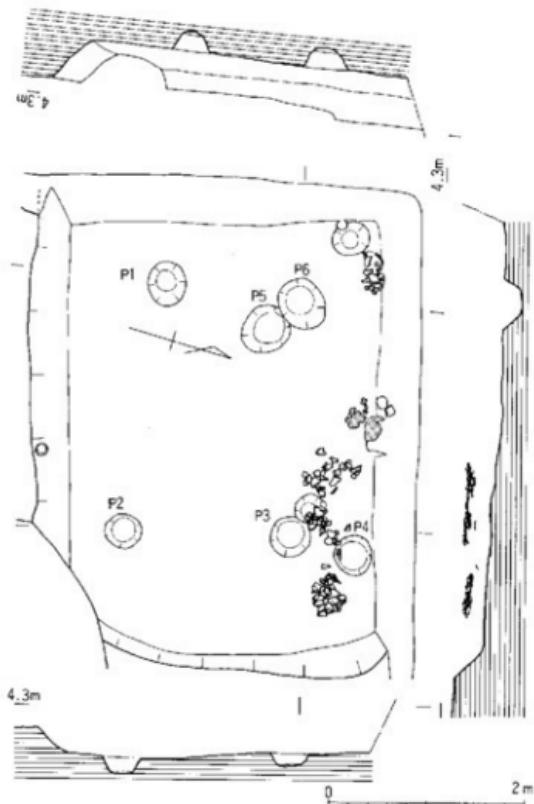


Fig.13 SC-13実測図 (縮尺:1/60)

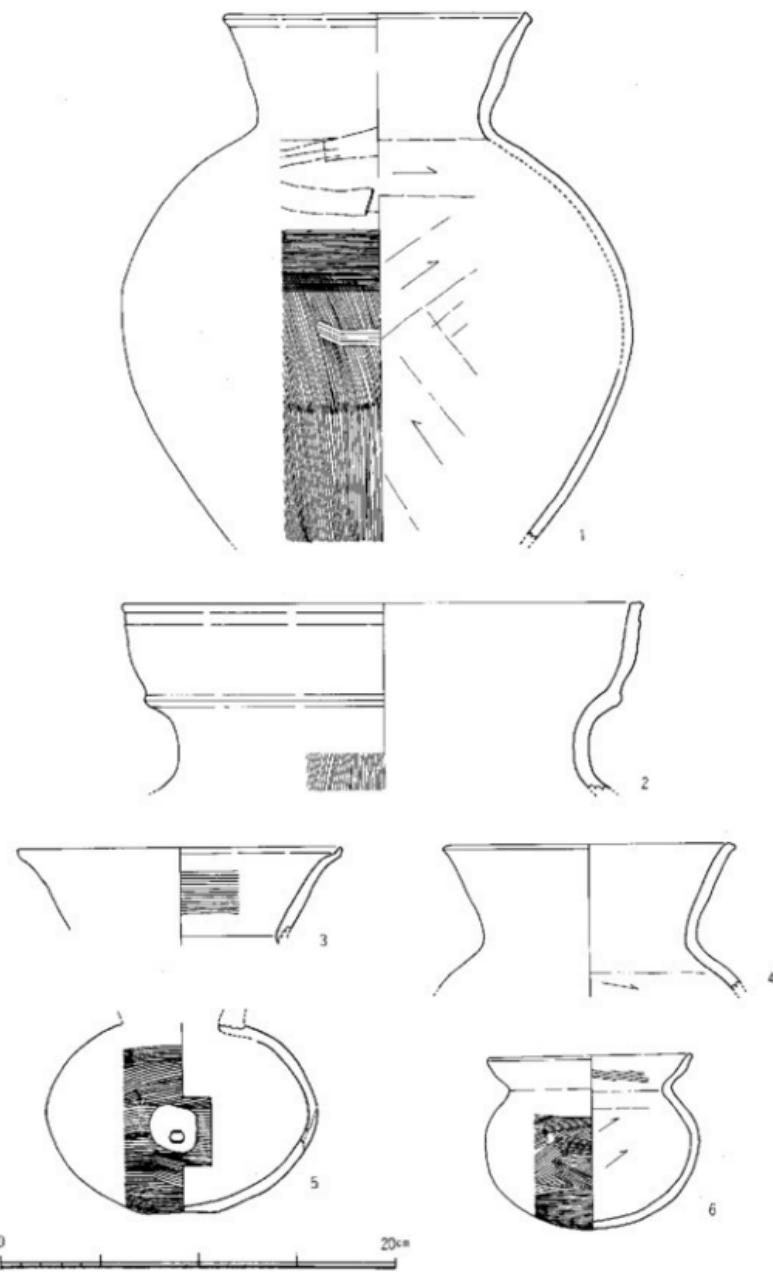


Fig.14 SC-13出土遺物実測図(I)

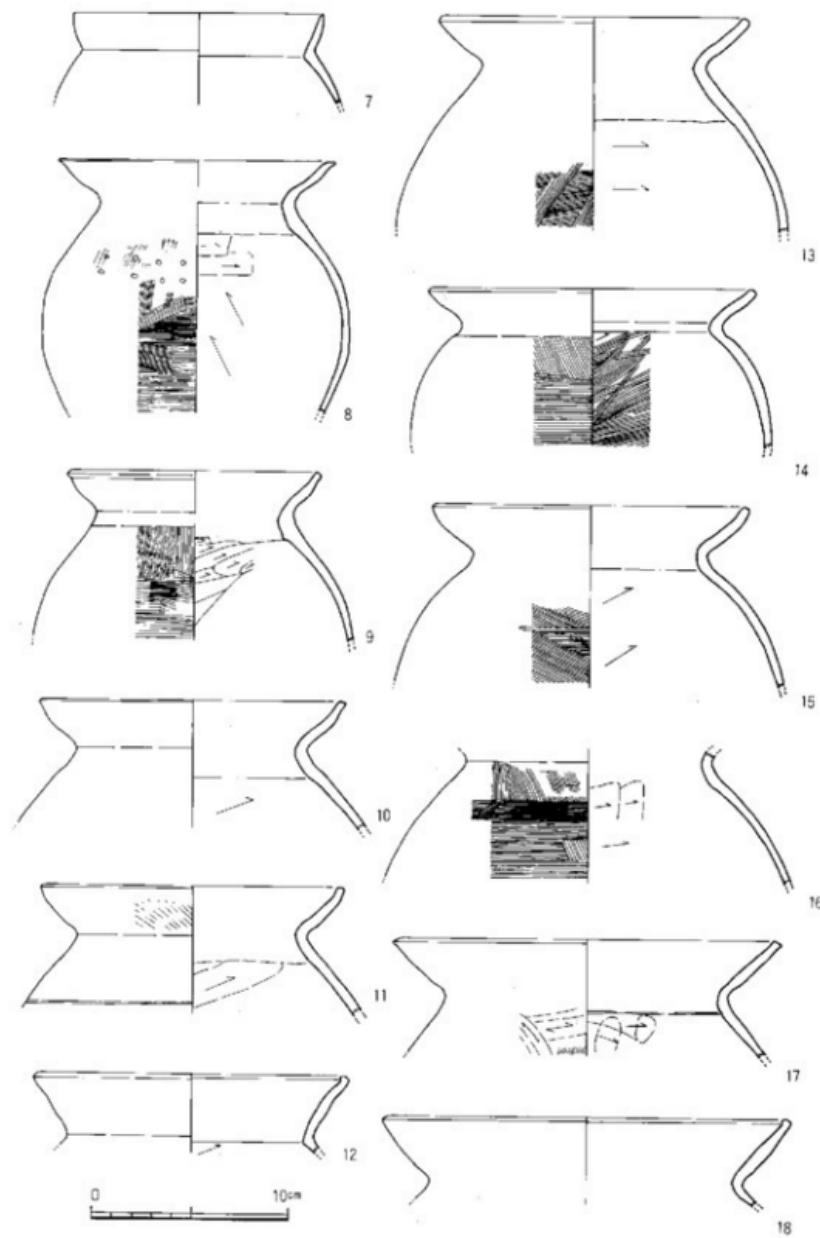


Fig.15 SC-13出土遺物実測図(2)

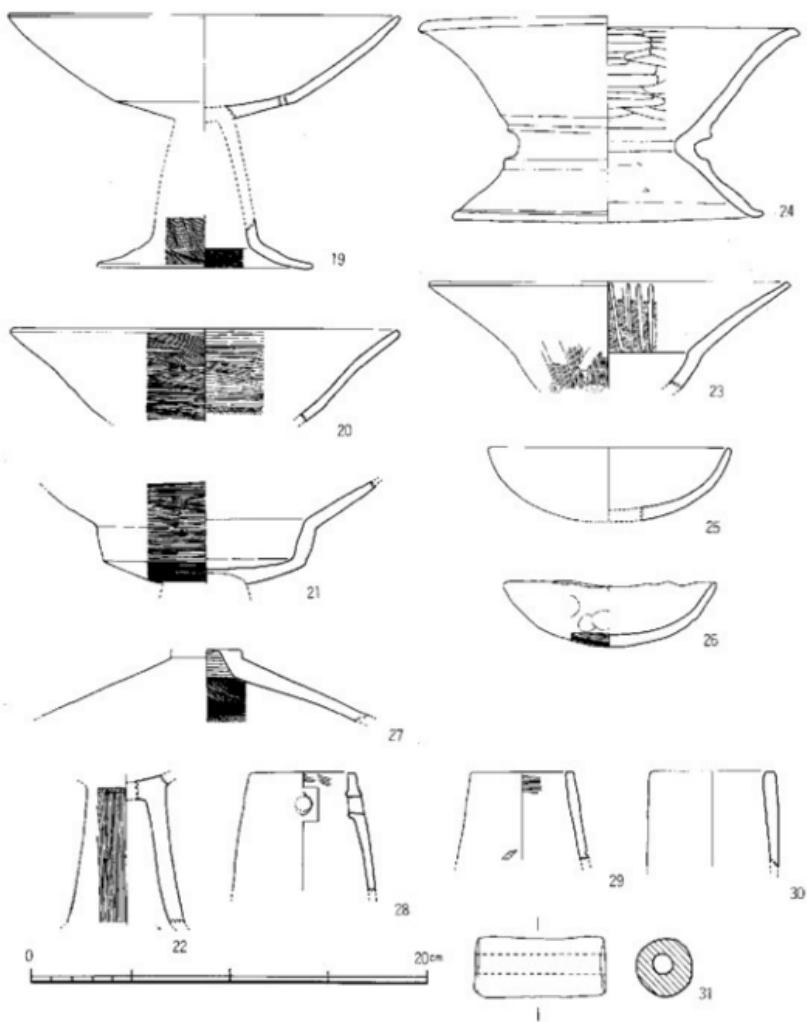


Fig.16 SC-13出土遺物実測図(3)

う。遺物は床面からの出土は少なく、大部分が覆土上層からの出土である。北壁の中央部には壺(Fig.14-1)が押しつぶされた状態で出土し、その東側に焼土の塊が径30~40cm、厚さ5~10cmの範囲に認められたが、床面上20cmの位置にあり、住居址に伴う炉、カマドとは考えられな

い。

出土遺物 (Fig.14~16、PL.18・26)

土師器

壺（1～6） 1は倒卵形の胴部に外反する長い口縁部となる。肩部下半～底部を欠損し、口径15.9cm、残存器高27.2cmを測り、最大径を胴部上位におく。胴部外面は下半が縦位の刷毛目、上半は横位の刷毛目調整、内面はヘラケズリである。口縁部は横ナデ調整を行なう。胎土に石英粒を含み、焼成は良好である。2は口径26.8cmを測る大型の二重口縁の壺である。屈曲部からほぼ垂直に立ち上がる口縁部で、端部を肥厚させる。3、4は広口壺の口縁部である。3の口縁端部は細く尖る。5は胴部～底部の遺存で、口縁部を欠損する。球形の胴部中央に焼成後の穿孔がある。外面は横位の刷毛目調整である。6は小型丸底壺でほぼ完形品である。球形の胴部に短い内弯気味の口縁部がつく。外面は刷毛目調整で内面はヘラケズリである。

壺（7～18） 8は胴部から内窓して外に開く口縁部となり、中位に緩い稜をもち、口縁部が平坦となり外へ端部を描み出す。肩部に棒状工具による2列の刺突文を施す。刺突文は全体にはめぐらす、部分的に装飾するものである。外面は横、斜位の刷毛目調整、内面ヘラケズリである。色調は暗赤褐色で胎土に砂粒、黒雲母を少し混入する。12、17、18は口縁端部が内側へ張り出す一群である。頭部から外傾して直線的な口縁部となる。他の一群の土器は内弯気味に外傾して立ち上がる口縁部をもち、口縁端部は角張っている。胴部外面は刷毛目調整で、内面はヘラケズリである。16は胴部だけの破片である。肩部に棒状工具による斜の平行刺突文をもつ。15も肩部に沈線を描く。

高坏（19～23） 19は脚部と坏部の一部がSC-16覆上から出土した土器と接合したものである。坏底部と口縁部の境に不明瞭な段をもち、口縁端は丸く取まる。調整は内外面ともヘラ研磨である。20は内外面とも丁寧なヘラ研磨である。21は坏底部と体部の境で大きく屈曲し、内面に稜をもつ。外面はヘラ研磨で、内面はナデ。23は21より緩やかな屈曲を示し、坏部の底に竹管文を施す。

器台（24、27） 24は鼓形器台でほぼ完形品である。口径10.6cm、底径16cm、器高10.6cmを測る。くびれ部の上下に低い突帯をめぐらし、口縁部は外反し丸くなる。外面は横ナデ、内面は受部が横位のヘラ研磨、脚部はヘラケズリである。27は脚部が大きく聞く。中位で大きく屈曲し、直立する形態であろう。外面は磨耗のため調整不明、内面は細かい刷毛目調整である。器台としたか21と同タイプの高坏の可能性がある。

壺（25、26） 26は完形品である。口径11.0cm、器高3.3cmを測る。外面は指で調整の後ナデ、一部指跡が残る。底部は刷毛目調整である。25は内外面ともナデ調整である。

タコ壺（28～30） 瓶弾形の小型のタコ壺口縁部片である。最大径を胴部下位におく。小破片のため口縁下の穿孔は28だけ認められるが、29、30にも同様の穿孔があろう。

土製品 (31) 円筒形の土錐で径2.8~3.0cmを測る。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好で黄褐色~明赤褐色を呈し、赤色顔料が付着する。

SC-16 (Fig.17, PL. 3~5)

II区AからB区の隅丸長方形の竪穴住居址である。北東部を新しい土壤に切られ、東壁の中央部をSK-20に切られ、南辺はSC-31を切る。A、B区2回分割して調査したため下面では南壁寄りの幅0.5mが未調査となった。住居址の規模は東西3.8m、南北6.5m、深さ0.35mを測り、狭長な平面形である。西側に幅0.6mのベッド状遺構を付設しているが、北西部に一部確認したにとどまり、全容を明らかにすることはできなかった。床面はほぼ平坦で、中央部に2個の主柱穴がある。径0.5m、深さ0.4mを測る。主柱穴の間に浅く幅広い溝がある。幅0.5m、長さ1.8mの断面皿状で、短軸に平行に走る。B区から未調査区にかけて焼土層が広がる。東西0.9m、南北0.6mの範囲に橢円形状に拡がる。焼土の上層は淡赤黄褐色砂層であるが、下層にい

くにしたがい暗赤褐色粘土の焼土ブロックを混えており、床面近くでは、極めて堅く焼き締って、叩くと金属音に近い音を出す。焼土の中ほどに甕がつぶれた状態で出土しており、カマドに近い状態である。遺物は床面より少し上で出土するものが多い。

出土遺物 (Fig.18~20, PL.18・19・26)

土師器

壺(1~9、19、20、22)

1~4は二重口縁壺である。1、2は大型壺の口縁部である。口縁部の中位で大きく屈曲して立ち上がる。1は内側へ強く傾斜し、2はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部は肥厚する。内外面とも横ナデ調整である。

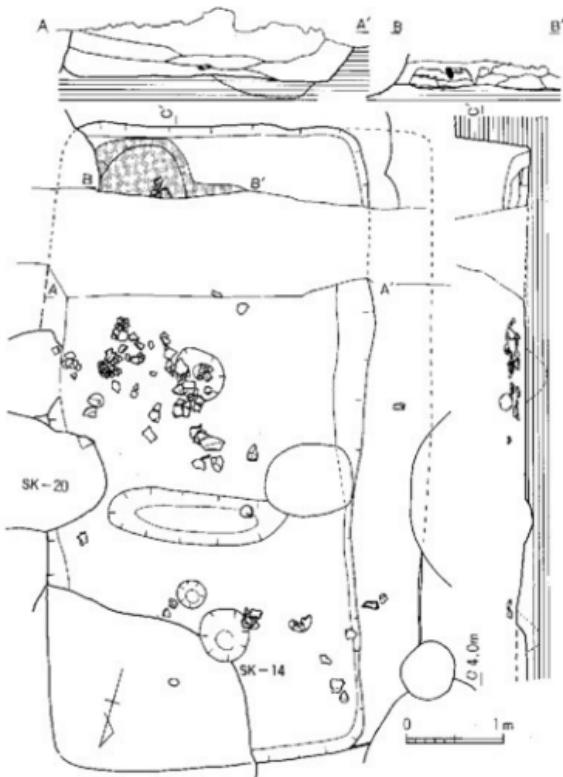


Fig.17 SC-16実測図 (縮尺: 1/60)

3、4は中型の壺である。口縁部中位で屈曲し、端部に向かって外反する。3は端部を肥厚させ、4は内側へ摘み上げている。5～7は外反する壺の口縁部である。6は強く外反する口縁部で外面をヘラ研磨している。7の内面は刷毛目調整である。9は直口壺の胴部である。口縁部の他はほぼ完全に残る。外面は刷毛目調整の後ヘラ研磨、内面はヘラナデである。19、20は小型丸底壺である。19は完形品で口径11.8cm、器高9.5cmを測る。胴部最大径と口径がほぼ同じで、口縁部が短い。胎上は精良で焼成も良く、色調は明褐色を呈する。調整は外面の胴部上半は刷毛目、下半はヘラケズリ、内面は板状工具によるナデである。口縁部は内外面とも横ナデ調整である。20は扁球の胴部に直立する口縁部がつく。外面は刷毛目調整の後ヘラ研磨、内面は口縁部～頸部まで丁寧なヘラ研磨で、それ以下は粗いヘラ研磨である。22は口縁部に最大径をもち、扁平な胴部となる。口縁端部は尖り、外面は丁寧なヘラ研磨を施す。

壺（10～18） 13は球形に近い胴部に直線的に外に開く口縁部となる。上端は平坦で外に摘みだす。外面は縱、横、斜位の刷毛目、内面はヘラケズリである。他の土器群は、内弯気味に立ち上がる口縁部で端部は内側（18）、外側（15）、内外側（11、14、17）に摘みだす三種がある。胴部外面は刷毛目、内面はヘラケズリである。11は肩部、胴下半が縱位、胴中央は横位の刷毛目調整である。肩部に一条の波状沈線をめぐらす。10は頸部近くに櫛状工具による4条の波状沈線がめぐる。17は胴下半に煤が著しく付着し、内側に炭化物が付く。

高壺（28～31） 脚部を欠損し、壺部だけの遺存である。底部と体部の境に緩やかな段をなす。口縁端部かすはまるものと、丸く収まる二種がある。調整は外面が刷毛目の後ヘラ研磨、内面もヘラ研磨で30、31は暗文となる。

器台（26） 受部だけの破片である。屈曲部から外反して口縁部となる。外面はヘラ研磨、内面はナデ調整である。

壺（23～25） 23は復元口径13.0cm、器高7.3cmを測る。丸い底部から内弯して口縁部となる。端部は内側へ摘み出す。外底部はヘラ削りで、他はナデ調整である。24は口縁部の一部を欠損するが、ほぼ完形品である。口径13.0cm、器高3.6cmを測る丁寧な造りである。口縁端部は横ナデで他はヘラ研磨である。

タコ壺（32） 砲弾形のタコ壺である。胴下半部を欠損する。口縁下に一孔を穿つ。内外面に指跡が残る。

瓶（33） 棒状の把手部の破片である。全体の形状は不明である。3次調査で出土している朝鮮半島系の土器であろう。断面は橢円形で径2.5～3.2cm、長さ7.2cmを測る。胎上には砂粒を少し含むが良好で色調は黄白色である。

石製品（34・35） 34は砂岩製の砥石である。画面を使用している。35は滑石製の剣形石製品である。基部と側面に穿孔するが貫通はしていない。最大幅2.5cm、長さ4.3cmを測る。全体を研磨により整形するが、両側に稜線が残る。

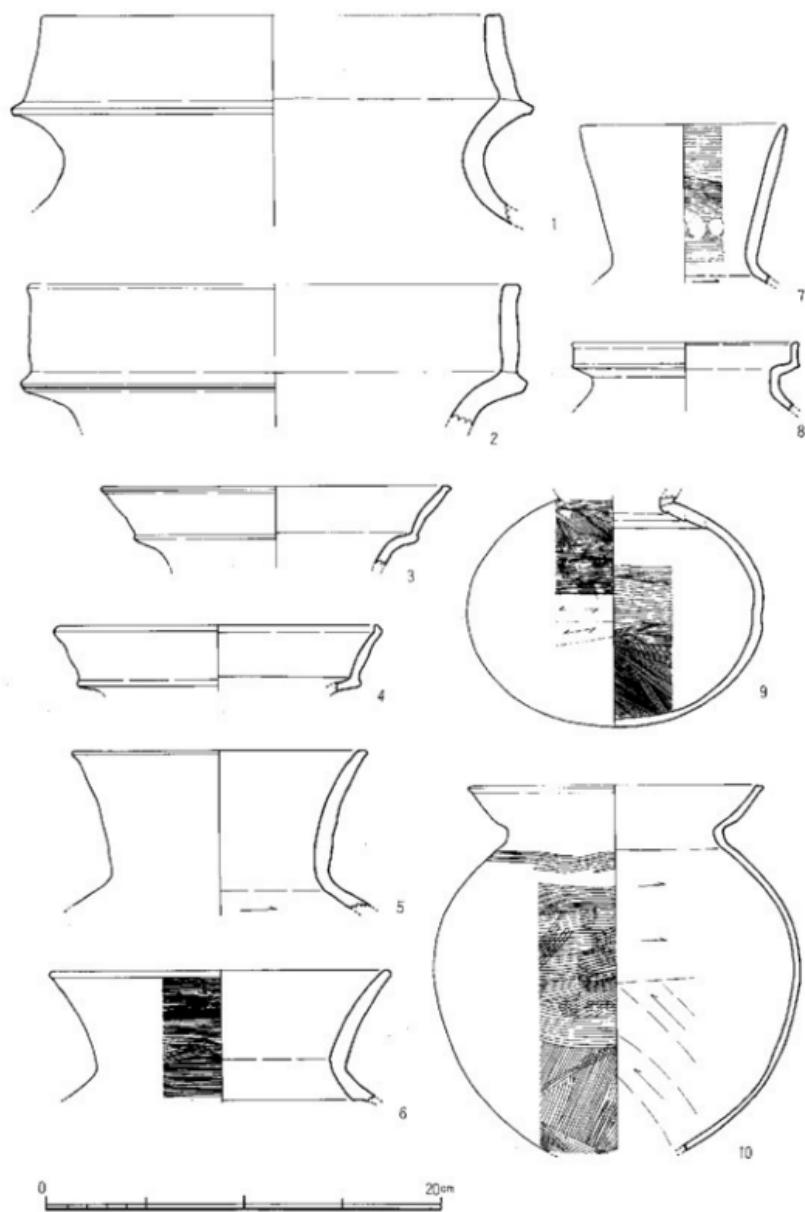


Fig.18 SC-16出土遺物実測図(1)

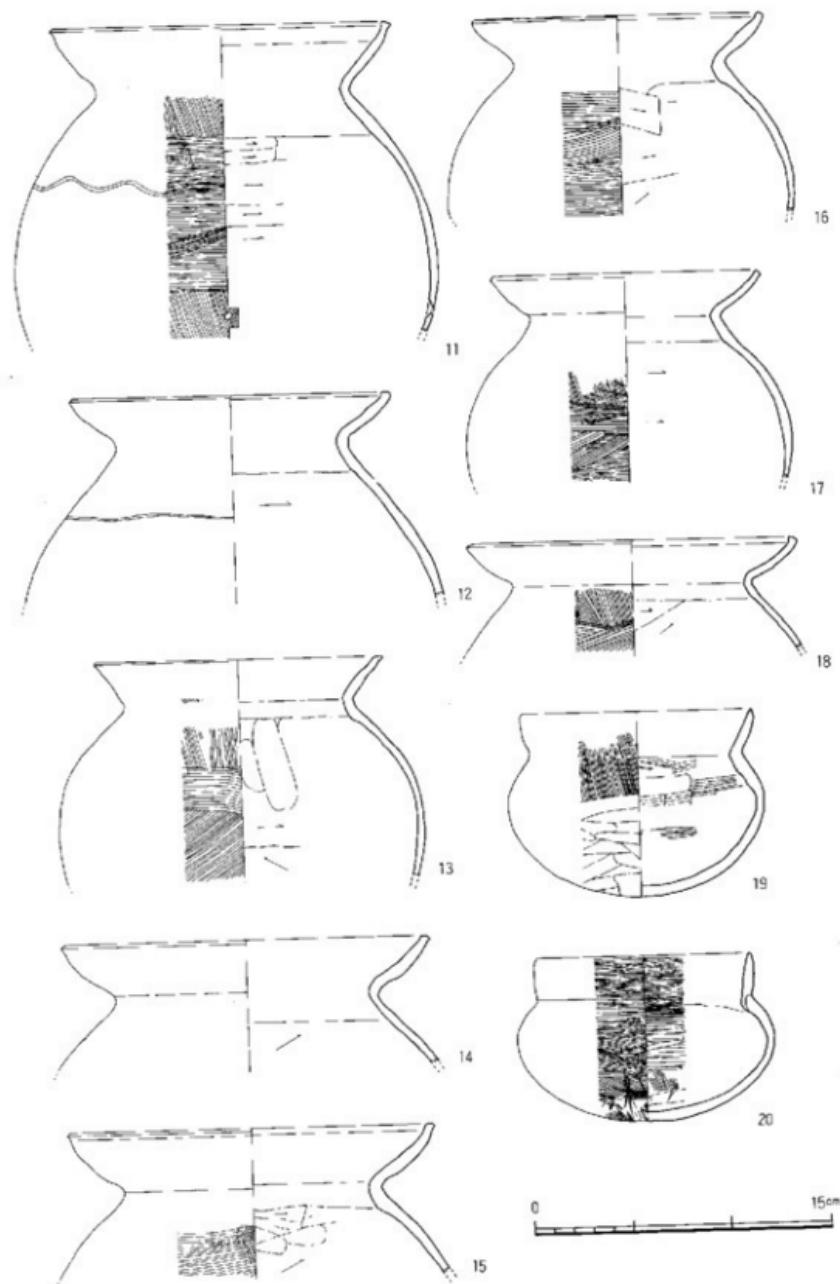


Fig.19 SC-16出土遺物実測図(2)

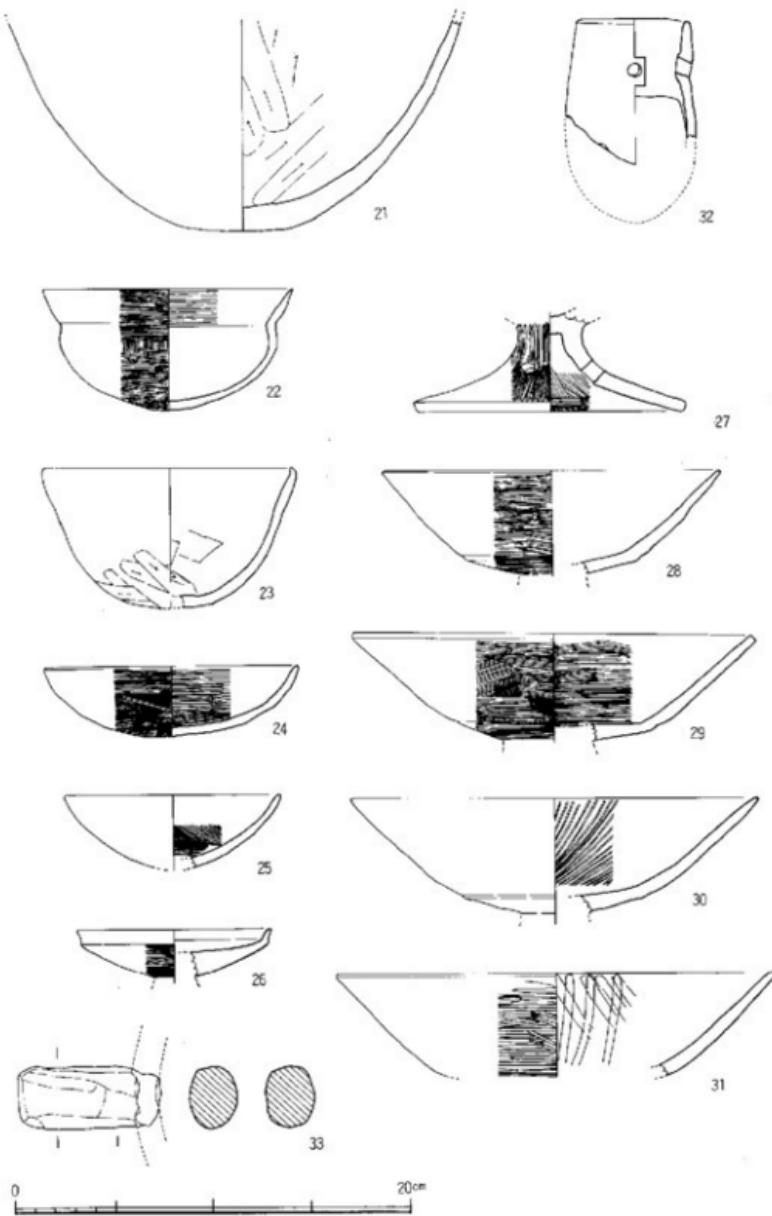


Fig.20 SC-16出土遺物実測図(3)

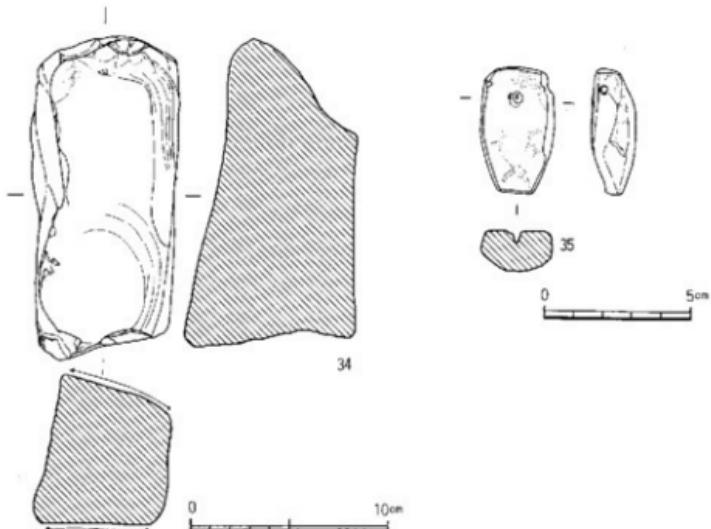


Fig.21 SC-16出土遺物実測図(4)

SC-16 (Fig.22、PL. 6)

II区Aの東部に位置し北西隅をSC-13に、西側を擾乱土壌に切られ、北壁と南壁を検出したにとどまる遺存の悪い住居址である。北東隅の壁際にそって焼土層が認められた。規模は径0.3~1.0mの範囲であり、さらに調査区外へ拡がっている。住居址の規模は現状で南北4.0m、東西3.3m、深さ0.3mを測る。一辺4~5mの住居址であろう。出土遺物は少なく西壁に寄った位置で床面に密着して数個体が出土する。焼土中からも壺、甕、塼の破片が出土している。床面には柱穴は認められない。

出土遺物 (Fig.24、PL.19)

土師器

壺 (1、5、7) 1は二重口縁壺である。屈曲部から大きく外傾し、端部は内側へ摘み出す。内外面とも横ナデ調整である。5は球形の胴部に外反して聞く短い口縁部がつく。口縁端部は丸く収まる。復元口径12.2cm、器高13.1cmとなる。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好で、色調は暗赤褐色を呈する。内面は黒褐色である。口縁部は刷毛目調整の後横ナデ、外面は斜位の刷毛目調整である。底部の一部にヘラ削りを残す。7は小型の壺の胴部片である。外面にはヘラ研磨を施す。

甕 (2~4) 球形に近い胴部に内弯気味の口縁となる一群である。2、3、5、6は住居址西側で一括出土品である。2は肩部に櫛状工具により四条の平行沈線、その下に波状文を描

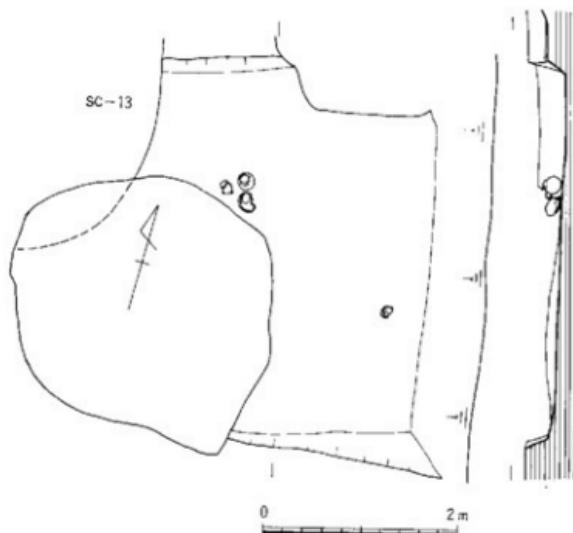


Fig.22 SC-18実測図 (縮尺:1/60)

く。3は口縁部の半分以上を欠損するが、胴、底部は完存する。口径15.0cm、器高19.0cmで最大径を胴上半にもつ。肩部に一条の沈線を描く。

高環(6) 壱部だけで脚部を欠損する。底部と体部の境に明瞭な段をもつ。口縁端は丸く收め、内外面ともにヘラ研磨で内面は暗文となる。

壇(8) 脚部のみの遺存である。脚台付壇になろう。外面をヘラナデする。

SC-28 (Fig.23)

II区Bの南西隅、SC-31の南に位置する住居址である。西側をSK-26、北側を水道管に切られ、南部は調査区外に拡がり全体の規模は明らかでない。現状で東

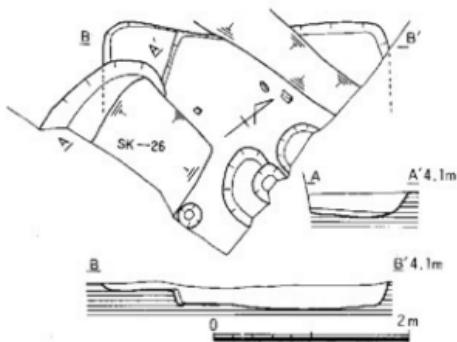


Fig.23 SC-28実測図 (縮尺:1/60)

西2.9m、南北2.4m、深さ0.2mを測る小規模な住居址である。西側にベッド状遺構をもち、その規模は幅0.7m、高さ0.1mである。住居址の壁面は比較的垂直に近く、床面はほぼ平坦である。遺物の出土は著しく少なく、実測可能な土器は2点だけである。

出土遺物 (Fig.24)

土器

壺(9) 小片で口径は計測できない。二重口縁壺で屈曲部から少し外傾する口縁である。端部は肥厚し、内外面ともナデ調整を行なう。

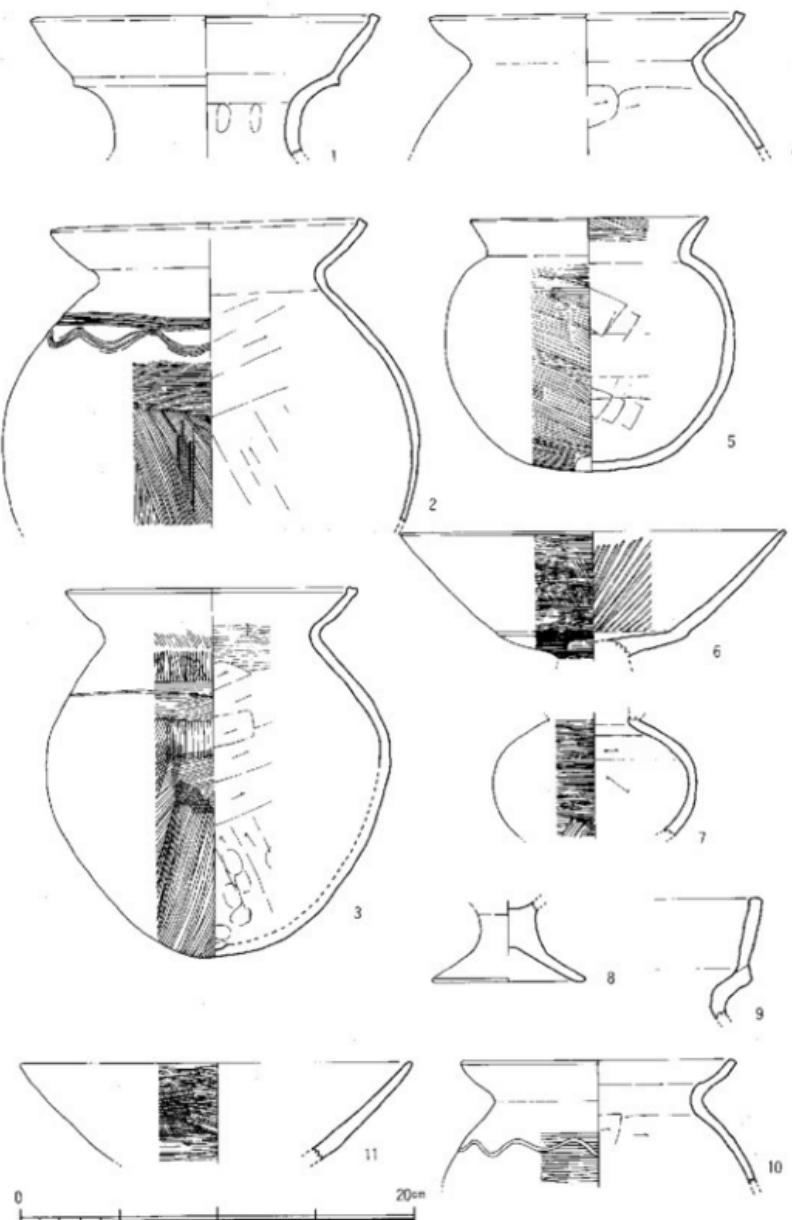


Fig.24 SC-18・28・32出土遺物実測図

甕 (10) 頸部から内窓気味に開く口縁部で端部は丸く取まる。内面にも稜線を残す。肩部に一条の波状文を描き、胴部外面は刷毛目調整、内面はヘラケズリである。

SC-31 (Fig.25, PL. 6 ~ 8)

II区Bの北端に位置し、SC-16に北壁を、東側をSK-29に切られる住居址である。主軸をN-16°-Wにとる隅丸長方形の住居址であるが、押しつぶされた少し菱形に近い形態である。規模は東西3.5m、南北4.4m、深さ0.5mを測る。南北部の壁面は崩落し、傾斜はなだらかである。床面はほぼ平坦で、中央部が少し深む。南西隅に床面より少し高くなった部分があり、その規模は0.7m×0.5m、高さ5~10cmである。ベッド状構造の残存であろう。北壁の中央部にカマドの基部のみが遺存している。幅0.8m、長さ0.9mでU字状に側壁を残す。東側の側壁近くから焼土に混って甕(13)、西からも甕、高环が一括して出土している。カマド周辺だけでなく床面全体から完形品に近い土器が多く出土している。南壁に寄った位置で甕(4、9、11、12、14)、高环(25)、中央部で壺(1、2、19)等が一括して出土している。完形品や完形に近い状態であり、本来の位置を保っているものであろう。各器種のセットとしても良好な資料であ

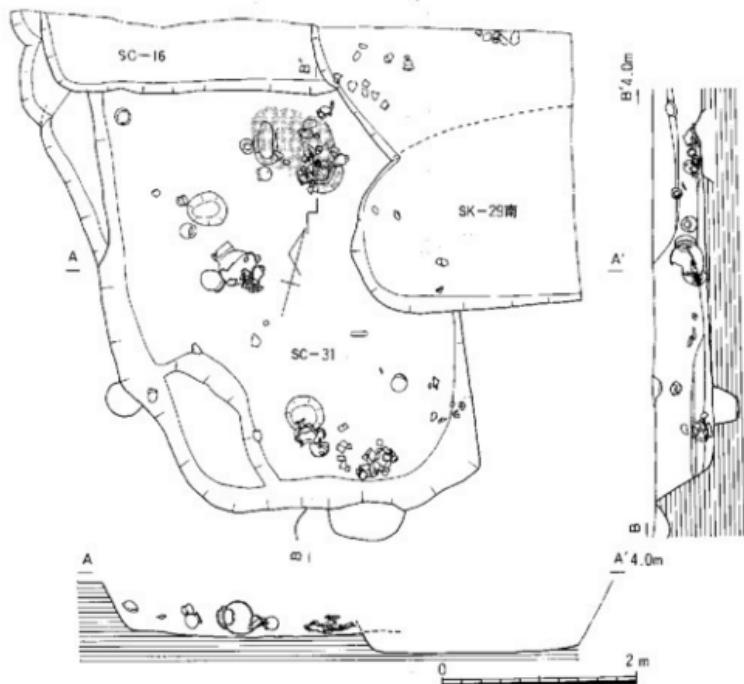


Fig.25 SC-31実測図 (縮尺: 1/60)

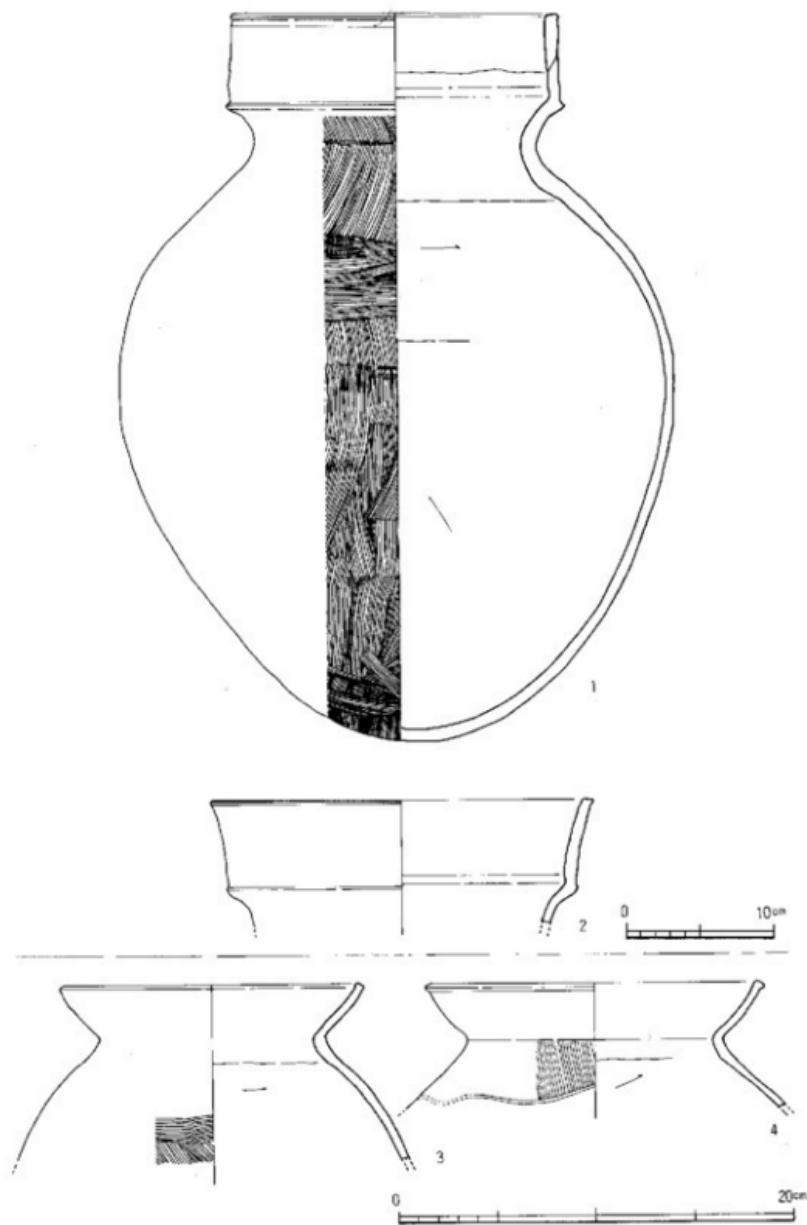


Fig.26 SC-31出土遺物実測図(1)

る。

出土遺物 (Fig.26~29, PL.19・20・26)

土器

壺 (1、2、5、18~20) 1、2は二重口縁の大型壺である。1は住居址の中央部で横軸の状態で出土した。口径22.2cm、器高49.8cmで胴部中位に最大径をもつ。底部は尖り気味となる。口縁部は突帯状の屈曲部からほぼ直立する。口唇中央部が少し窪み、屈曲部の内面に稜をもつ。外面は縱、横、斜位の細かい刷毛目調整をし、内面はヘラケズリである。18は小型の二重口縁壺の口縁部である。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好で色調は黄白色である。屈曲部の上に沈線上の窪みを2条もつ。口縁端部は肥厚させ、内外面とも横ナデ調整である。19、20は小型丸底壺である。19はほぼ完形品で口径11.0cm、器高8.6cmを測る。最大径を口縁部にもち、口縁部は外反気味で先端は尖る。外面から口縁部内面にかけて刷毛目のあと横ナデ、胴部内面はヘラケズリである。

甕 (3、4、6~17) 6~8は小型の甕で球形の胴部に内窓する口縁部となる。6、7はほぼ完形品で胴部外面は刷毛目、内面はヘラケズリである。6の口縁部は肥厚させる。9~13は大型品である。球形に近い胴部に内窓する口縁部となる。端部は内、外側に搞み出したり、上端を窪ませているものもある。胴部外面は刷毛目調整で、内面はヘラケズリ、口縁部は横ナデである。10は櫛描の波状文を浅く描き、11、12は一条の波状文である。12の上端は窪む。15はくの字に屈曲する口縁部で内外面とも粗い刷毛目調整である。長胴の甕であろう。

鉢 (21、22、24) 21は西壁近くで口縁を下にして出土した完形の土器である。口径17.5cm、器高6.0cmを測る。胎土は精選され焼成は良好、明褐色を呈する。深鉢状の胴部から大きく外傾する口縁部となる。外底はヘラケズリの後ヘラ研磨、他は内外面とも横位のヘラ研磨である。22も21と同様であるが、口縁部は少し内窓する。外底は縦位の粗い研磨である。24は21、22に比較して口縁部が短く、外底はボタン状に突起している。器表面は磨滅し、調整は不明である。

高坏 (25~28) 25は復元口径20.7cm、器高10.2cmを測る。丸い坏部から外反する口縁部となる。体部と底部の境には段を有しない。脚部に2孔を穿ち、裾部は大きく開く。坏内面から脚、裾部にかけて刷毛目の後ヘラ研磨を施す。脚内面にしばり痕が残る。26は内面に暗文をもつ。

石製品 (29) 安山岩系の小型の舟状石製品である。幅1.7cm、長さ8.5cm、最大厚0.9cmを測る。上面は平坦にし、丁寧な研磨を行ない、両側面及び下面は荒い研磨で丸味をもたせている。中央部を最も厚くし、両端は薄く、幅も狭くなる。先端は尖り、基部は平坦となる。

SC-32 (付図)

II区Bの南西隅に位置する住居址である。遺構は南側SK-24と擾乱、北側を水道管に切断されて、遺存状態は極めて悪い。北壁を長さ約1m確認出来ただけである。深さも5cmと浅く、

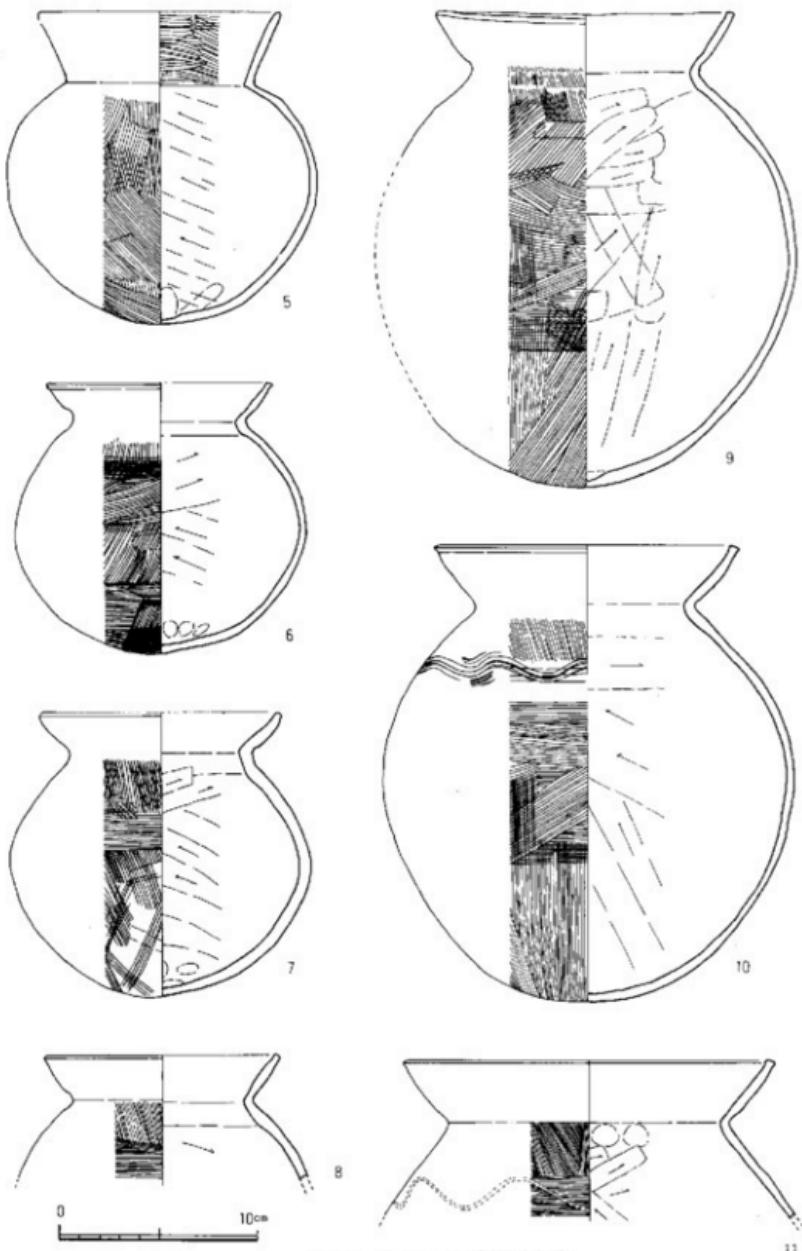


Fig.27 SC 31出土遺物実測図(2)

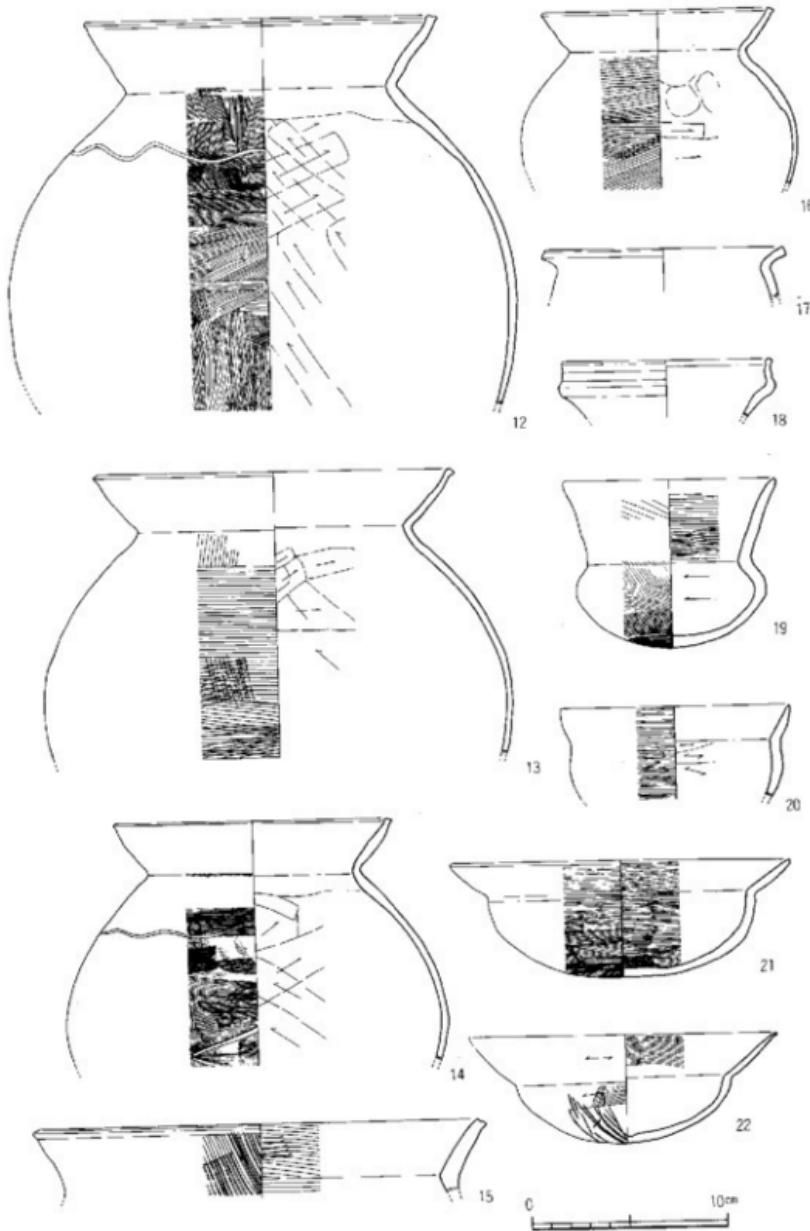


Fig.28 SC-31出土遺物実測図(3)

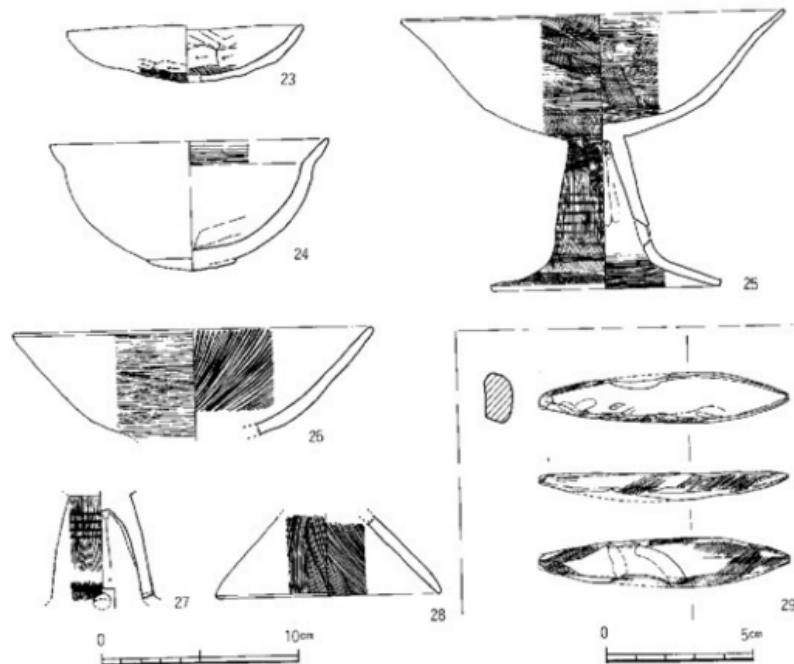


Fig.29 SC-31出土遺物実測図(4)

全体の規模、形態は不明である。出土上器は他の住居址と同時期の所産であることから隅丸長方形の住居址であろうか。

出土遺物 (Fig.24)

高坏 (11) 口縁部破片が1点だけ出土した。復元口径20.0cm、残存器高5.0cmを測る。外面は刷毛目の後ヘラ研磨、内面もヘラ研磨である。胎土は精良で焼成は良く、色調は赤褐色を呈する。

土壤の調査

SK-06 (Fig.30, PL. 9)

II区A南西端に位置する隅丸長方形の土壤である。両側はA、B区の間の未調査区に入つて不明である。現存幅0.8cm、長さ1.7m、深さ0.3mを測る。西側でSK-15と重複するが覆土が同一で前後関係は不明である。

出土遺物 (Fig.31)

土師器の破片が約20点出土しているが、いずれも胴部片であり、実測可能なものは図示した

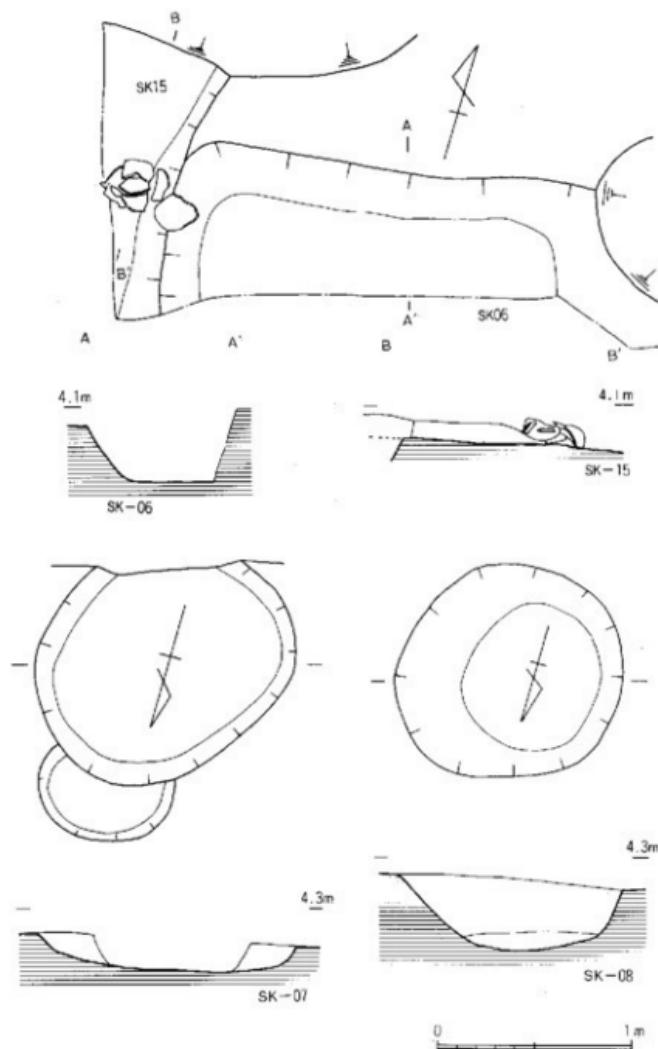


Fig.30 SK-06-08・15 実測図 (縮尺: 1/30)

1点である。1は甕の口縁部破片である。口縁端部は肥厚し、内外面とも横ナデ調整である。

SK-07 (Fig.30)

II区の南端に位置する楕円形の土壙である。一部南端は調査区外にかかる。長径1.5m、短径1.3m、深さ0.2mを測る浅い皿状の土壙である。覆土は暗褐色～灰褐色砂層である。出土遺物は少なく、土師器の破片が約20点で、実測可能なものはない。

SK-08 (Fig.30)

7号土壙の北約1mに位置する楕円形土壙である。長径1.2m、短径1.1m、深さ0.3mを測る。覆土は灰褐色砂層である。出土遺物は土師器の破片約60点である。

出土遺物 (Fig.31)

2は高环の坏部である。底部と体部の境に段をもち、外面は横位のヘラ研磨、内面は縦位のヘラ研磨である。

SK-10 (折り込み)

II区Aの北東部に位置する断面が皿状の不定形土壙である。北側は擾乱に切られて不明である。覆土は灰褐色～暗褐色砂質土である。

出土土器 (Fig.31)

4は甕の口縁部片である。小片で口径は計測できない。口縁部は内外面とも横ナデで胴内面はヘラケズリである。5は脚台付壺の脚部である。全体に磨耗が著しく調整は明らかではない。

SK-14 (Fig.32・17)

調査区の中央部に位置し、SC-16の中に収まる。北側を植木穴に削平された三日月形をした土壙である。径1.5m前後を測る不整円形を呈すると思われる。深さ0.45mを測り断面が皿状を呈する。出土土器は少なく、土師器片が約20点出土している。

出土土器 (Fig.31)

実測できたのは2点のみである。6は脚台付壺の脚部である。外面はヘラケズリの後ナデ調整である。7は二重口縁甕の破片である。口縁部は肥厚する。調整は磨耗のため不明。

SK-15 (Fig.30)

II区の△南西隅に位置する土壙である。東側でSK-06と重複し、北側を擾乱により切られ、西側は調査区外へ拡がり全体の形状は不明である。現存幅0.5m、長さ1.3m、深さ0.2mを測る狭長な浅い土壙である。

出土土器 (Fig.31)

9は復元口径23.4cm、器高33cmを測る変形土器である。倒卵形の長胴に強く外傾する口縁部となる。底部は尖り気味の丸底である。外面は粗い斜位の刷毛目調整で煤が多く付着する。内面は胴上半から口縁部にかけて刷毛目、下半はナデ調整を行なう。8も9と同様の胴部になる甕の口縁部である。

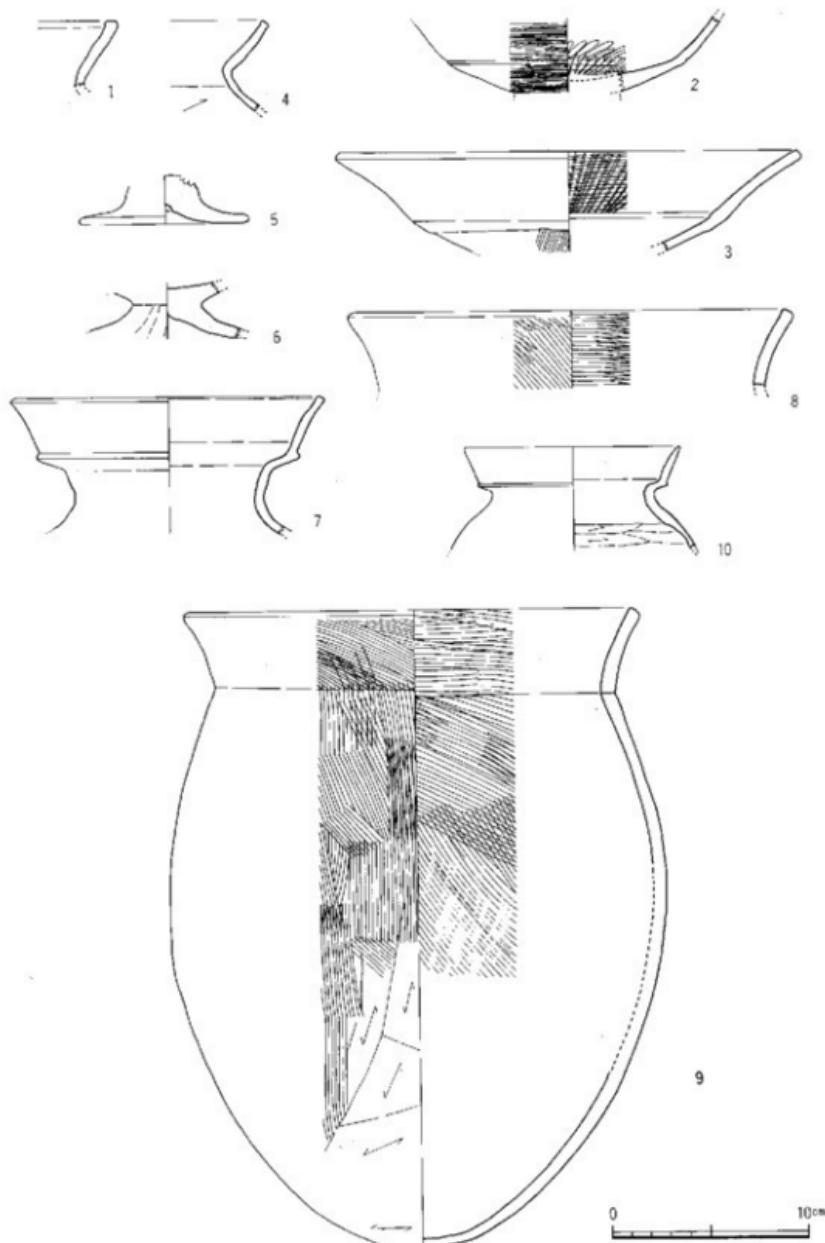


Fig.31 各土壤出土遺物実測図

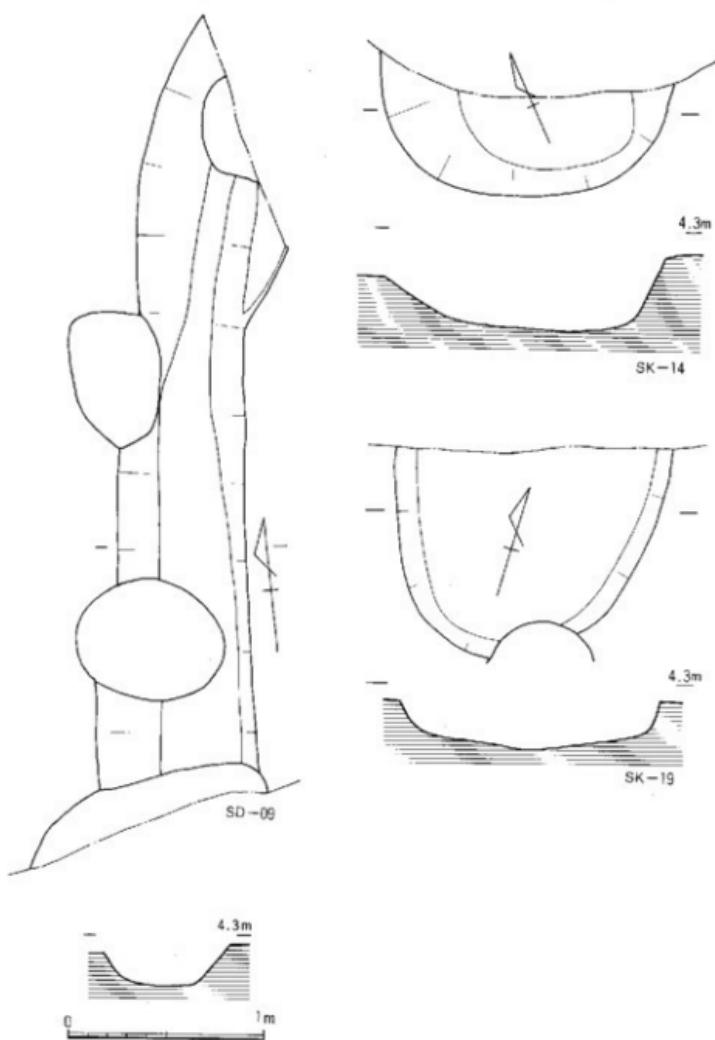


Fig.32 SD-09・SK-14・19実測図 (縮尺: 1/30)

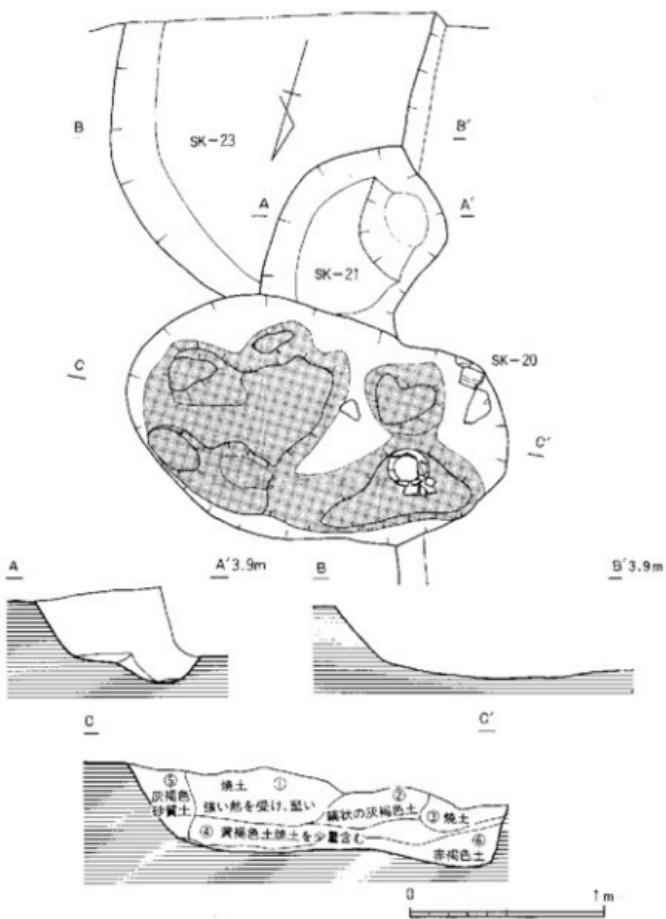


Fig.33 SK-20・21・23実測図 (縮尺: 1/30)

SK-19 (Fig.32)

SC-13の南側に位置する長楕円形の土壙で北半をSC-13に切られる。現存幅1.4m、長さ1.1m、深さ0.3mを測る断面皿状の土壙である。覆土は灰褐色砂層である。出土遺物は極めて少なく土器片が約10点ある。

出土土器 (Fig.31-10)

小型の二重口縁壺の破片である。外面は刷毛目調整、内面はヘラケズリである。

SK-20 (Fig.33、PL.10)

SC-16の東に位置する壺塙である。平面形は不整な長楕円形を呈する。土壙の内側は粘土が熱を強く受け赤変するが、壁面は焼けていない。火を特に強く受けているのは上壙上面の粘土で暗赤褐色焼土層である。焼土の厚さは0.2m前後で中央部が厚く、周辺部が薄くなる。土壙の北西に寄った位置に甕が据えられた状態で出土した。口縁部が少し欠損するがほぼ完形品である。底部近くから拳人の扁平な石が出土しており、木米石の上に甕を置いていたものであろう。土器は上から押し潰された状況を示す。断面の土層は①堅く焼けた焼土、暗褐色土。②木炭と灰褐色砂質土との構造堆積土層。③焼土の小ブロックと暗褐色砂質土の混合土。④黄褐色砂層で熱を少し受けている。⑤灰褐色砂質土。⑥赤褐色砂質土で熱を少し受けている。

出土土器 (Fig.34、PL.21)

1は二重口縁壺の口縁部である。屈曲部から強く内傾する口縁部で、端部は肥厚する。2は底部を少し欠損するがほぼ完形品の甕である。焼土の北西部に据えられた上器である。口径17.6cm、器高28.0cmを測る。最大径を胴中央におき、口縁部は直線的に外傾する。口縁端部は内側へ摘み出し、上端を窪ませる。胴部外面は刷毛目調整で、内面はヘラケズリ、口縁部は内外面とも横ナデ調整である。3は壺の口縁部であろう。

SK-21 (Fig.33)

SK-20に切られた不定形の小土壙である。現存の長径0.9m、短径0.8mを測る。床面は二段に掘り込まれ、深さが0.5mを測る。覆土は黄白色砂層に灰褐色土が少量混じる。出土遺物は少なく、土師器片が約10点出土している。

出土土器 (Fig.34)

壺の口縁部である。4は直口壺の口縁部でSC-13の1の形態の胴部がつくものであろう。口縁部内外とも横ナデ調整である。5は大型の二重口縁壺である。屈曲部から緩く外傾する口縁部で、端部は肥厚する。

SK-23 (Fig.33)

北側をSK-20、21に切られ、南側は調査区外へ伸びり、遺構全体の一部の調査であり、全体の規模、形態は不明である。大型の不整円形土壙であろう。断面は皿状で浅い掘り込みである。遺物は土師器の破片が約20点出土している。器種は二重口縁の壺と小型の甕である。

SK-24 (Fig.36、PL.11)

II区Bの南端に位置する。東西を擾乱土壙に切られ、南側は調査区へ拡がる。覆土は上層が暗褐色砂質土、下層が灰褐色砂層ないし灰白色砂層である。大部分の上器は上層の暗褐色砂質土からの出土である。全体の程度の遺存であり、全体の形状、規模は明確ではないが、円～楕円形の平面形を呈する大型土壙であろう。現存規模は東西1.4m、南北1.7m、深さ0.6mを測る。断面は深鉢状を示す。

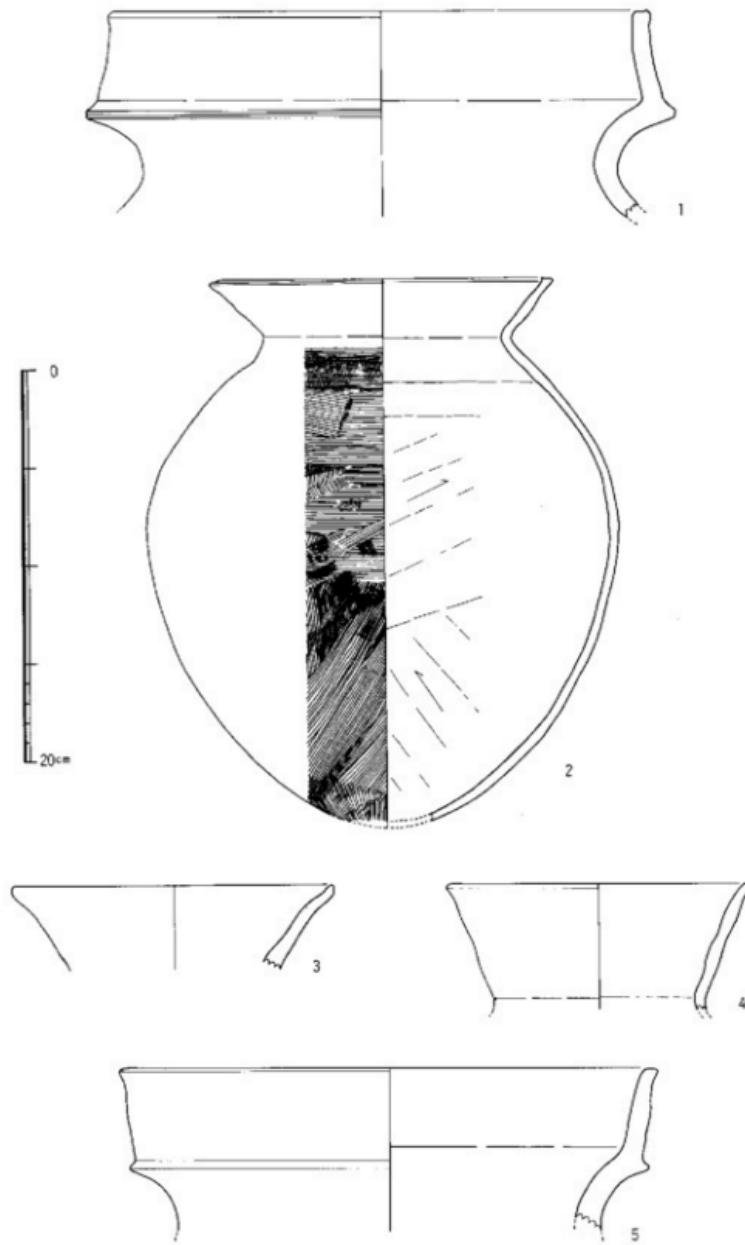


Fig.34 SK-20・21出土遺物実測図

出土土器 (Fig.37~39、PL.21・22・26)

壺（1～4） 二重口縁壺である。1は大型壺の口縁部である。大きな屈曲部から少し外傾して立ち上がり、口径32.0cmを測る。胎土には石英粒を多く含み、焼成は良好、色調は淡黄褐色～淡灰褐色である。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部内面はヘラケズリである。2は突帯状の屈曲部から内湾しながら立ち上がり、口縁外端を上に摘み上げている。口縁部は横ナデ、胴部外面は刷毛目調整で内面はヘラケズリである。3は1と同様の形態である。4は底部～胴部の遺存で、口縁部を打ち欠いた状況である。胴が強く張り、最大径を胴上位におき、径41.0cmを測る。底部は平底に近い丸底である。外面は刷毛目、内面はヘラケズリを行ない、指跡が残る。

甕（5～10） 5は二重口縁の甕である。口縁部を欠損するが他は遺存する。最大径を胴上位におき底部は丸底である。外面は刷毛目、内面はヘラケズリである。外面には煤が付着し、内壁には炭化物が付着している。6～10は球形に近い胴部に内湾気味に立ち上がる口縁部となる一群の土器である。口縁端が肥厚するもの（6、7、9）、肥厚しないもの（10）、口縁下に稜線をもつもの（8）の三種に分類できる。6は復元完形品で、口径18.5cm、器高27.2cmで最大径を胴上位におく。口縁上端は平坦で肥厚する口縁部は内外面とも横ナデ、胴外面は刷毛目、

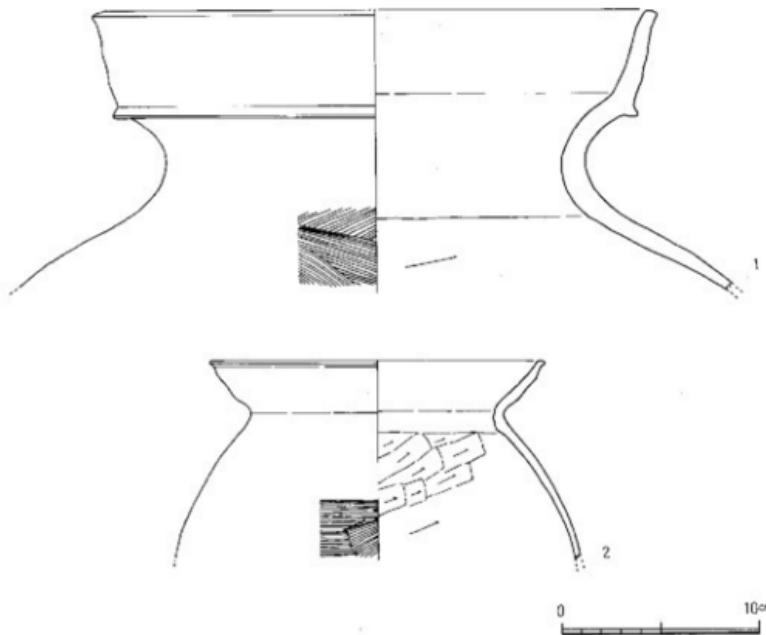


Fig.35 SK-23出土遺物実測図

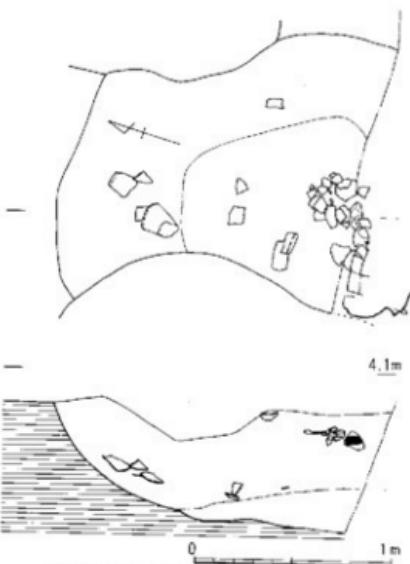


Fig.36 SK-24 実測図 (縮尺: 1/20)

内面はヘラケズリである。胎土には砂粒を多く含み、焼成良好で、色調は灰褐色ないし黄褐色である。外面に煤が付く。8は口縁部の中ほどに稜をもち、強く膨らみをもつ。10は内窓気味に立ち上がる口縁部が端部で丸く取まる。いずれも口縁部外面は横ナデ調整、胴部外面は刷毛目、内面はヘラケズリである。

高壙 (11, 12) 11は壙部だけの破片である。復元口径19.2cmを測る。底部と体部の境に弱い段をもつ。外面は横位のヘラ研磨、内面は刷毛目のあとヘラ研磨を施す。胎土は精良で焼成良好、色調は黄褐色である。12

は脚部片で裾が大きく広がる。脚部に3個の穿孔がある。

器台 (13) 小型丸底壙とセットをなすもので、受部だけの破片である。口縁下で強く屈曲し外反する。内外面とも丁寧なヘラ研磨を施す。

陶質土器 (14) 土師質で堅く焼き締められた壙の破片である。内面はヘラケズリの後ナデ調整、外面は格子目のタクキで調整する。胎土には砂粒を少量含むが良好で、焼成堅緻で色調は黄褐色ないし赤褐色を呈する。西側の擾乱部からの出土である。

SK-25 (Fig.40)

II区Bの西壁中央に位置する狭長な上壙である。調査区の端に確認されたため、その一部しか調査しておらず、全体は不明であるので溝の可能性もある。現存する平面形はU字状で現存長0.9m、幅0.7m、深さ0.7mを測る深い溝状の上壙である。覆土は灰褐色砂層である。

出土土器 (Fig.41, PL.22)

1、2とも手捏の粗末な造りで、全体に歪な壙である。口縁の一部を欠損するがほぼ完形品である。1は口径8.6cm、器高3.1cmを測る。外面には指跡が明瞭に残るが、内面はナデ消す。口縁端は波状である。2は底部が尖り気味の深い壙で口径9.3cm、器高6.0cmを測る。調整は1とほぼ同様であるが、外底部をヘラケズリしている。

SK-26 (Fig.40)

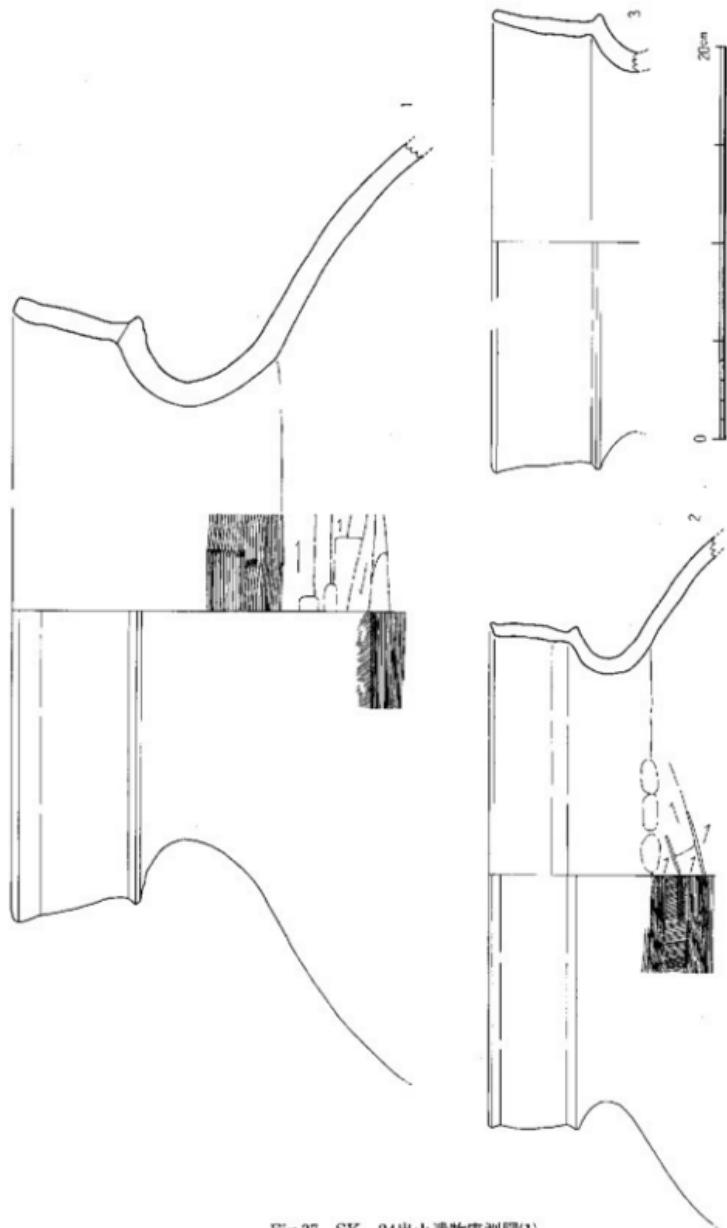


Fig.37 SK-24出土(1)

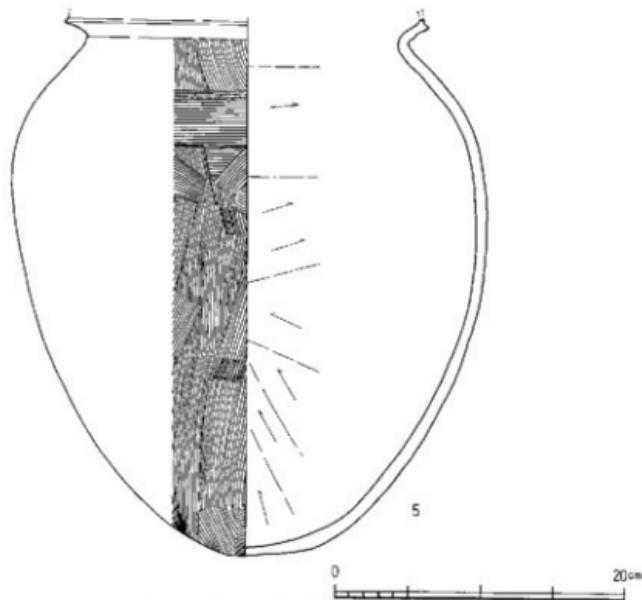
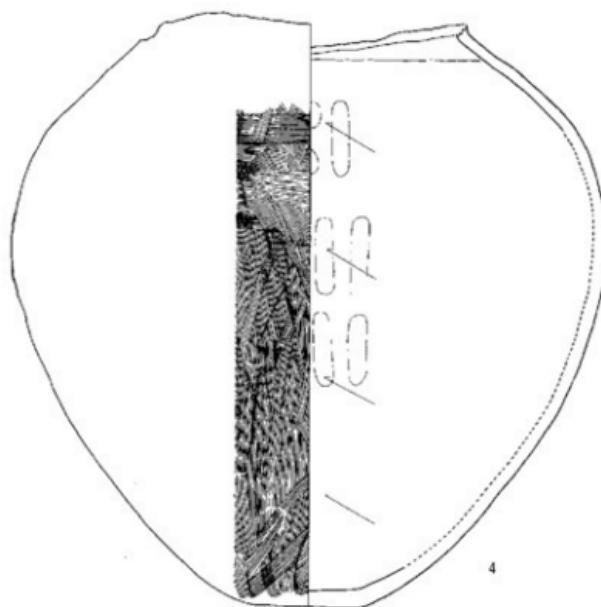


Fig.38 SK-24出土遺物実測図(2)

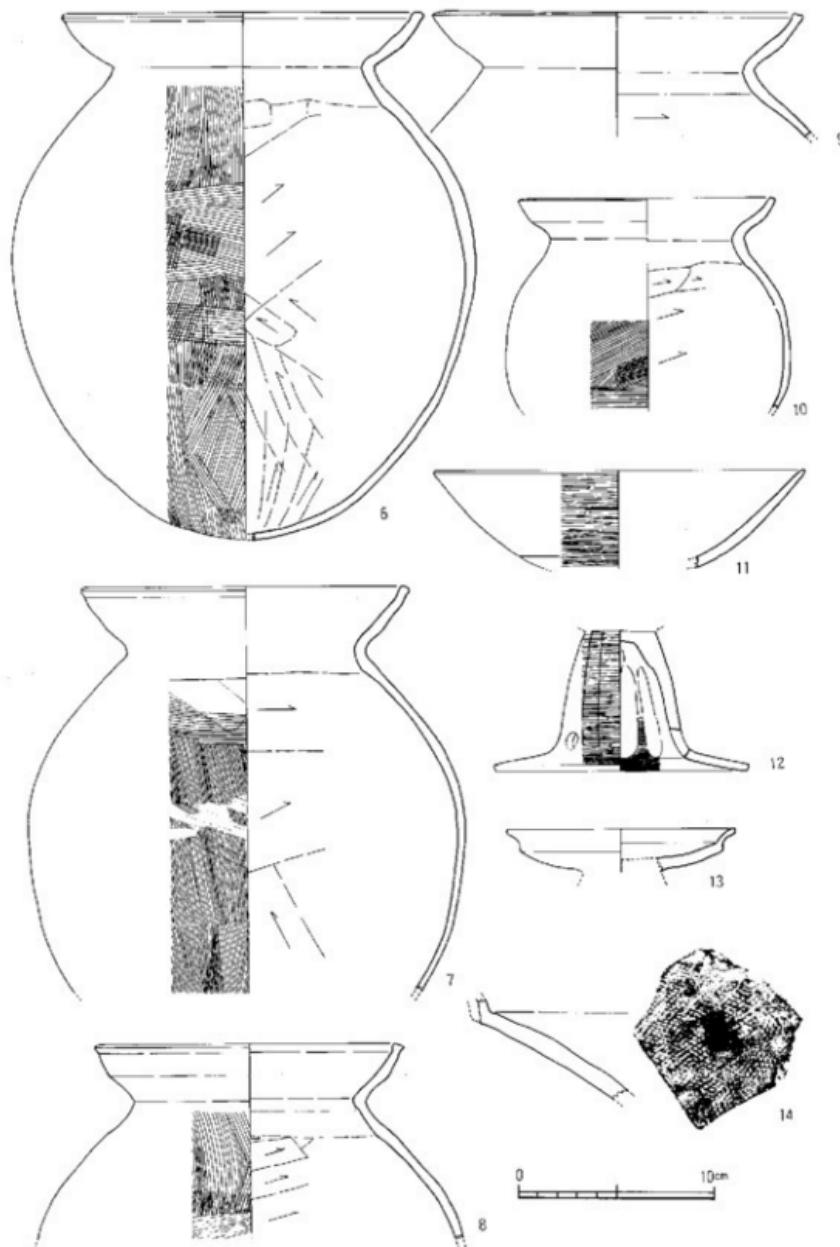


Fig.39 SK-24出土遺物実測図(3)

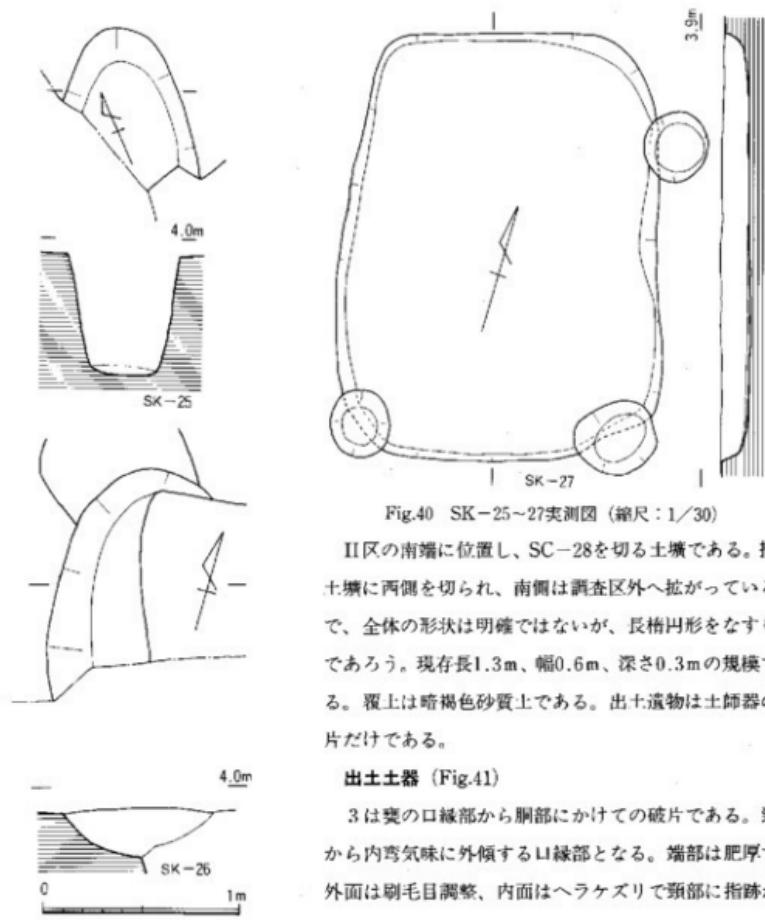


Fig.40 SK-25~27実測図 (縮尺: 1/30)

II区の南端に位置し、SC-28を切る土壙である。擾乱土壙に西側を切られ、南側は調査区外へ拡がっているので、全体の形状は明確ではないが、長楕円形をなすものであろう。現存長1.3m、幅0.6m、深さ0.3mの規模である。覆土は暗褐色砂質土である。出土遺物は土師器の小片だけである。

出土土器 (Fig.41)

3は甕の口縁部から胴部にかけての破片である。頸部から内弯気味に外傾する口縁部となる。端部は肥厚する。外面は刷毛目調査、内面はヘラケズリで頸部に指跡が残る。

SK-27 (Fig.40)

SC-31の上面にある主軸を南北にする隅丸長方形の浅い土壙である。長辺2.5m、短辺1.9m、深さ0.2mを測る。東壁は直線的で、西壁は丸味をもつ。全体に歪んだ形態である。SC-31の覆土と酷似することから、住居址の覆土の可能性がある。出土土器は少ない。

出土土器 (Fig.41)

内外面ともヘラ研磨をもつ高环の口縁部破片である。

SK-29 (Fig.25, PL.12)

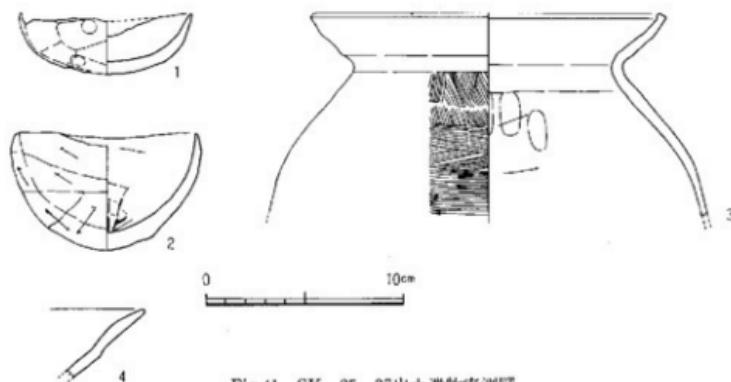


Fig.41 SK-25~27出土遺物実測図

II区Bの北西端に位置する。当初SC-31を切る大型土壙一基と考えていたが、西壁の土層観察により南、北の2基の土壙であることが判明した。出土土器の時期はほぼ同じで、同時期の所産である。土壙の切り合いは南土壙が北土壙を切り、北土壙はSC-16に切られる。

南土壙は現存高南北2.0m、東西2.3m、深さ0.5mを測る長楕円形の土壙である。調査を実施できたのは西半部である。覆土は上層が暗灰色砂層、下層は灰白色砂層である。遺物は東側壁近くで出土している。

北土壙はSC-31の床面からの検出である。南側を南土壙に切れられ、北側は調査区外へ抜がる。全体の中で確認したのは西壁の一部であり、形状は明らかではない。床面はほぼ平坦で、南土壙と同一レベルである。

南土壙出土遺物 (Fig.42, PL.22・26)

土師器 (1) 球形の胴部に内窓気味に立ち上がる口縁部で端部が肥厚する壺である。復元口径15.5cm、器高23.9cmを測る。胎土に砂粒を多く含み焼成は良好、色調は黄褐色を呈する。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部外面は刷毛目、内面はヘラケズリである。

鉄製品 (12) ほぼ完形品の小型の刀子である。全長8.2cm、最大幅0.9cm、厚さ2.5mmである。茎と身の境に明瞭な段ではなく、基部が細くなる。

石製品 (11) 硬質砂岩製の石製品である。円柱状の両端を細く研ぎ出している。縦に半折し、現状では断面カマボコ状を示す。最大幅1.1cm、長さ5.6cm、厚さ0.7cmである。

北土壙出土土器 (Fig.42, PL.22)

壺 (2~6) 2~4は球形に近い胴部に内窓気味に立ち上がる口縁部となり、端部が肥厚する一群である。胴部外面は刷毛目、内面ヘラケズリ、口縁部は内外面とも横ナデ調整である。4の肩部には一条の波状沈線を描く。5は覆土上面からの出土で、混入した土器であろう。外

面には継位の粗い刷毛目、内面はヘラケズリである。長い胴部に外反する口縁部がつく。6はくの字に外反する口縁部である。内外面とも刷毛目調整である。

壺（7、8）小型丸底壺である。7は復元口径11.4cm、器高8.2cmを測り、最大径は口縁部にある。球形の胴部で直線的に開く長い口縁部がつく。胎土には砂粒を少し含むが良好で焼成も良く、色調は淡黄褐色を呈する。口縁部から胴部上半はヘラ研磨で、下半は刷毛目調整、胴部内面はヘラケズリである。8は扁平な球形の胴部に口縁部が外に強く開くものである。

高坏（9） 坏部のみで、脚部は欠損する。丸味をもつ底部から強く外反する口縁部となり、端部は角張る。内面は刷毛目の後、継位のヘラ研磨で暗文を描く。外面もヘラ研磨である。

タコ壺（10）砲弾形のタコ壺で口縁下に一孔をもつ。全体に粗雑な調整で内外面とも指ナデである。焼成は良く、胎土に砂粒を多く含む。口径5.8cm、器高9.8cmを測る完形品である。

SD-09 (Fig.32, PL.9)

II区Aの南西隅に位置する近世の溝である。幅0.7mで南北方向に延び調査区外へ拡がる。覆土は淡赤褐色ないし黄褐色砂層で他の占墳時代の遺構の覆土とは異なる。

出土遺物 (Fig.31)

出土土器は破片だけである。古墳時代の土師器約50点、中世の土師質糸切皿2点、近世磁器10点が出土している。図示したのは土師器の高坏である。(3)は内弯する环底部から外反する口縁部となり、境に稜線をもつ。外面はヘラ研磨で内面は刷毛目の後ヘラ研磨している。

SK-34 (Fig.43, PL.11)

II区Bの南西隅に検出した焼土である。中央部を擾乱に切られる。北側はドーナツ状に焼土壁を形成し、中央部が窪む。焼土壁の厚さは0.1~0.2mを測り壁高0.5mである。断面は逆台形である。南側は西壁が高さ約0.1m、幅0.15mで帯状に連なり北側の焼土壁と一体となる。出土遺物は土師器の小片である。古墳時代前期の炉であろう。

4. III、IV区の調査

II区の南側に接する調査区で、III区は幅6m、長さ21m、IV区は幅8m、長さ20mの狭い面積である。III区の北端とIV区の南端では約50cm以上の差があり、北から南へ緩やかな傾斜を示す。

III区は中央部に大きな擾乱があり、遺構の残りは悪かったが、古墳時代前期の大溝、竪穴住居址2軒、土壙5基を検出した。大溝は幅3~4mの東西に伸びるものである。SC-39からは陶質土器片が出土し、接合の結果ほぼ完形品となった。IV区は遺構の密度が薄く土壙を6基検出したのみである。SK-52は大型の不定形土壙であるがI~III区の土壙と比べて著しく大きく、遺構の性格が異なるものであろう。SK-50からは古い様相の土器が少量ではあるが出土している。

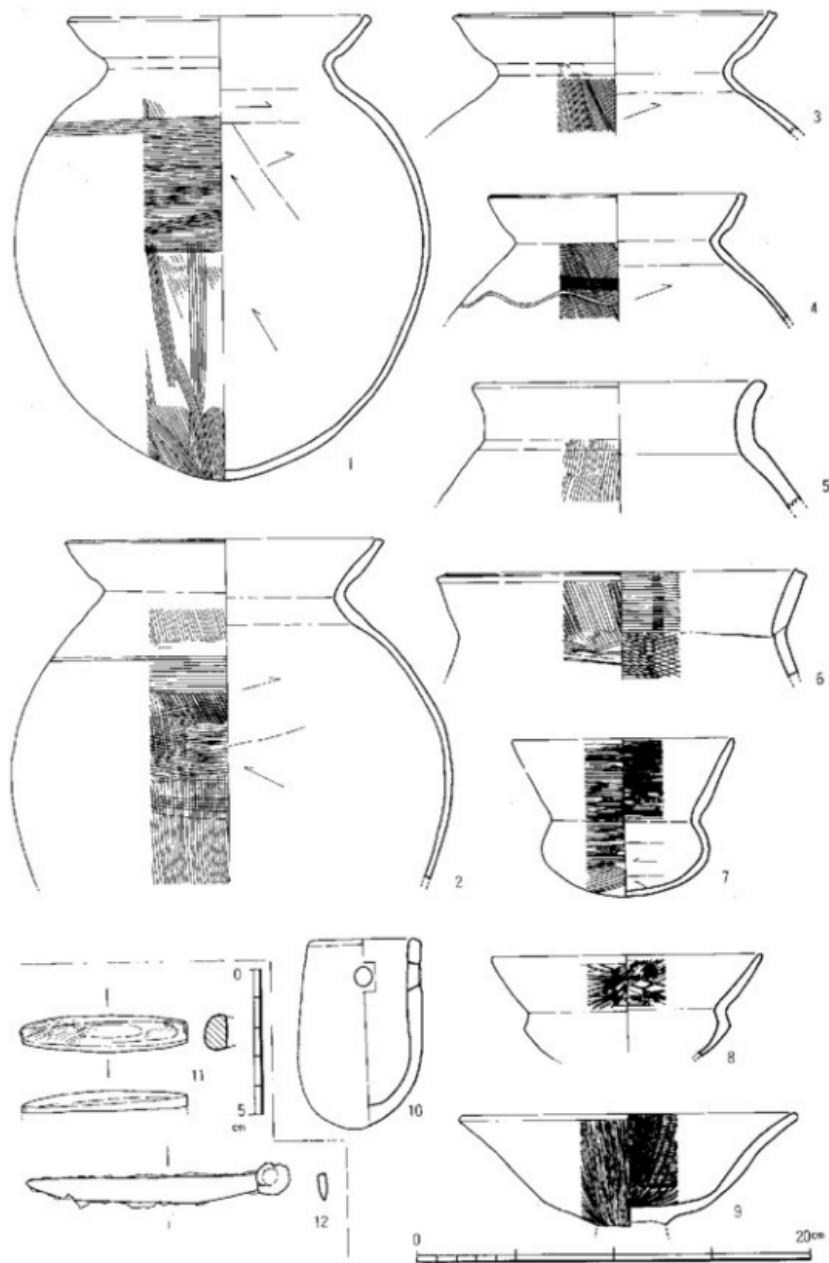


Fig.42 SK-29出土遺物実測図

住居址の調査

SC-39 (Fig.44, PL.13)

III区の南端に位置する方形堅穴住居址である。住居址を対角線で結んだ南側は調査区外に抜がり、調査を実施したのは北側の三角形の部分、住居址の北半分の調査にとどまった。住居址は主軸を北西—南東におく一辺4~5mを測る隅丸長方形の堅穴であろう。現状では西辺2.7m、北辺3.7m、深さ0.4mを測る端正な住居址である。覆土は暗褐色砂質で床面、壁面近くは灰白色砂層となる。出土遺物は覆土の上層からの出土が大部分である。それも住居址の中央部に破損した上器を投棄した状況を示す。甕(15)1点だけは床面に横転した状態で出土した。

出土土器 (Fig.45~48, PL.23・24)

壺(1~4, 11) 1は球形の胴部に外反する長い口縁部がつく壺である。外面は胴上位にタタキ目があり、その上から横刷毛、横ナデを行い、胴下位は継、斜位の幅の狭い刷毛目、内面は口縁部が横位、胴部が斜位の刷毛目調整を行なう。復元口径16.0cm、器高31.0cmを測り、胎土に微砂粒を含むが精良で焼成良好、色調は赤褐色ないし黄褐色を呈する。2は卵形の胴部に直線的に開く短い口縁部がつく。全体に器面が荒れ、調整は不明瞭である。胴部外面にタタキ痕が少し残り、その上から細い刷毛目調整、内面はヘラケズリである。復元口径12.2cm、器高28.2cmを測る。3、4は二重口縁壺の口縁~胴部片である。屈曲部から大きく外傾する口縁部で、端部を内側へ摘み出す。口縁部は内外とも刷毛目、胴外面は刷毛目、内面はヘラケズリである。11は小型丸底壺である。口径9.0cm、器高9.5cmを測る。胎土には石英粒を多く含み、

焼成は良好で色調は灰褐色ないし黒褐色である。胴外面から口縁部内面にかけて刷毛目、胴内面はナデ調整である。

甕(5~7) 5は住居址東端から単独で出土した大型の上器で、他の土器群より古くなる。胴部と口縁部の境の屈曲部及び胴下半部に突帯をめぐらす。胴下半部の突帯には刻目を施す。突帯間は荒い刷毛目で、以下はナデ調整、内面も刷毛目調整である。口径29.6cm

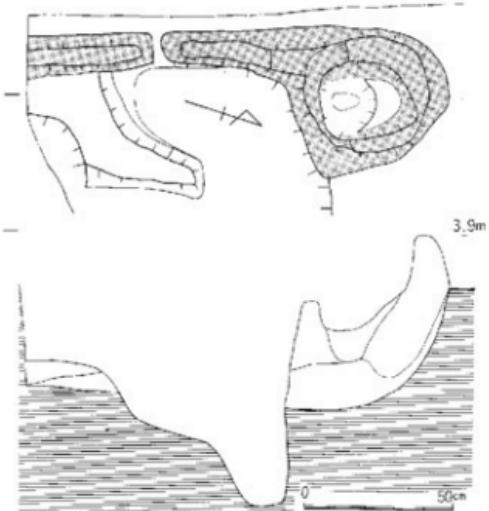


Fig.43 SK-34実測図 (縮尺:1/20)

器高39.7cm、胎土に砂粒を含み色調は灰黄褐色である。7は球形に近い胴部に内窓気味の口縁部となる。端部を内側に擒み出す。肩部に波状の沈線をめぐらす。外面は刷毛目、内面はヘラケズリである。

高坏（9、10） 9は坏部から脚部にかけての破片である。坏底部から直線的に外に開く口縁部で、端部を丸く收める。外面は横位の研磨で脚部は継位の刷毛目の後暗文風の横位のヘラ研磨を施す。内面は磨耗のため調整不明。

器台（8） 鼓形器台である。受部の一部と脚部の半分を欠損する。口径19.5cm、器高10.2cmを測る。胎土に砂粒を含むが良好である。焼成も良好で色調は淡赤褐色を呈す。外面は横位のヘラ研磨で内面は受部がヘラ研磨、根がヘラケズリである。くびれ部上、下突帯は低い。

壺（12、13） 12は小型の手捏の小壺で口縁部は波状で、内外面に指跡が残る粗い調整である。13は内外面とも刷毛目調整を施す。

鉢（14） 全体に歪んでいる。丸い胴部に外反する口縁部となる。器面が荒れているので調整は不明瞭であるが、ナデ調整であろう。

陶質土器（15） 胴部は強く張り扁平な球形であり、口縁部は外反する。胴外面は丁寧な格子目タキで全体に及び、胴部上半に細い平行沈線が15～6条めぐる。内面はナデ調整で、口縁部は内外面とも横ナデ調整である。焼成は軟質の須恵器の程度で、胎土は精良で色調は灰色を呈する。

SC-40 (Fig.49, PL.14)

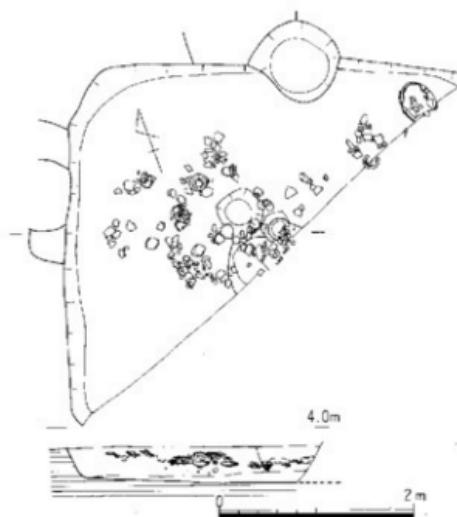


Fig.44 SC-39実測図 (縮尺: 1/60)

III区の西壁中央部に位置する竪穴住居址である。西辺が調査区外に延びており、全体の規模は明らかではない。現状で南北3.3m、東西2.8m、深さ0.5mを測り、本来一辺3.3m前後の端正な隅九方形の住居址であろう。床面はほぼ平らで中央部が少し窪む。中央部から少し北に寄った位置に焼土が検出された。平面形を確認した高さで検出されたが、その位置等から住居址に伴なう炉の可能性があると考

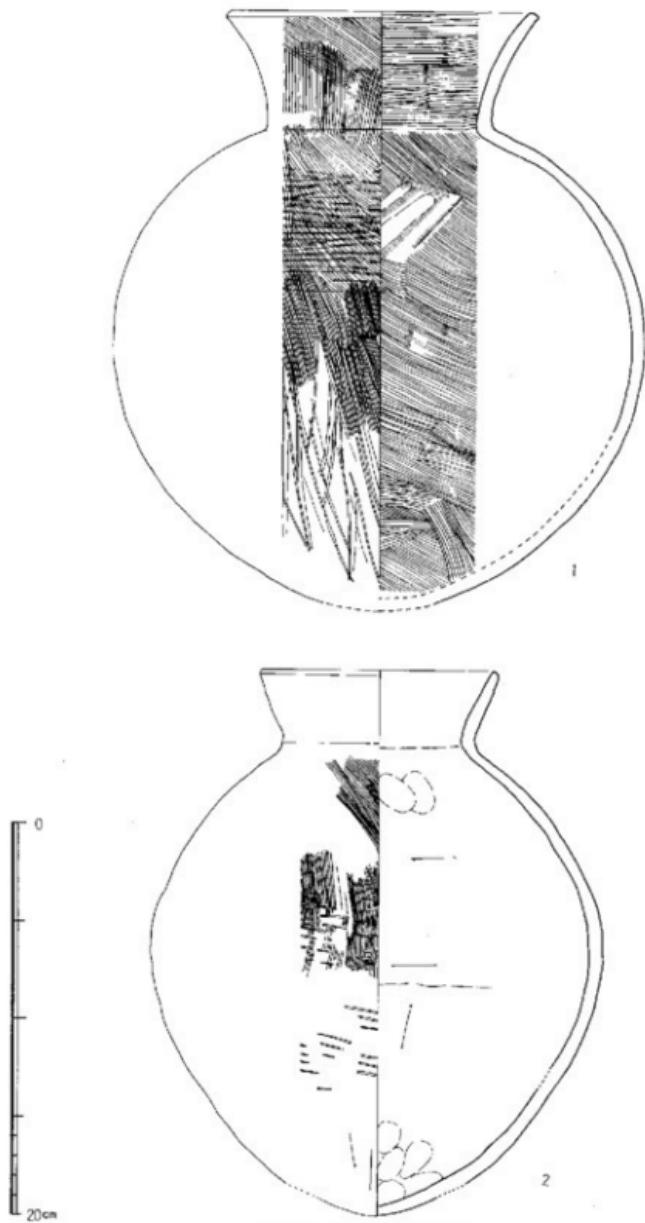


Fig.45 SC-39出土遺物実測図(1)

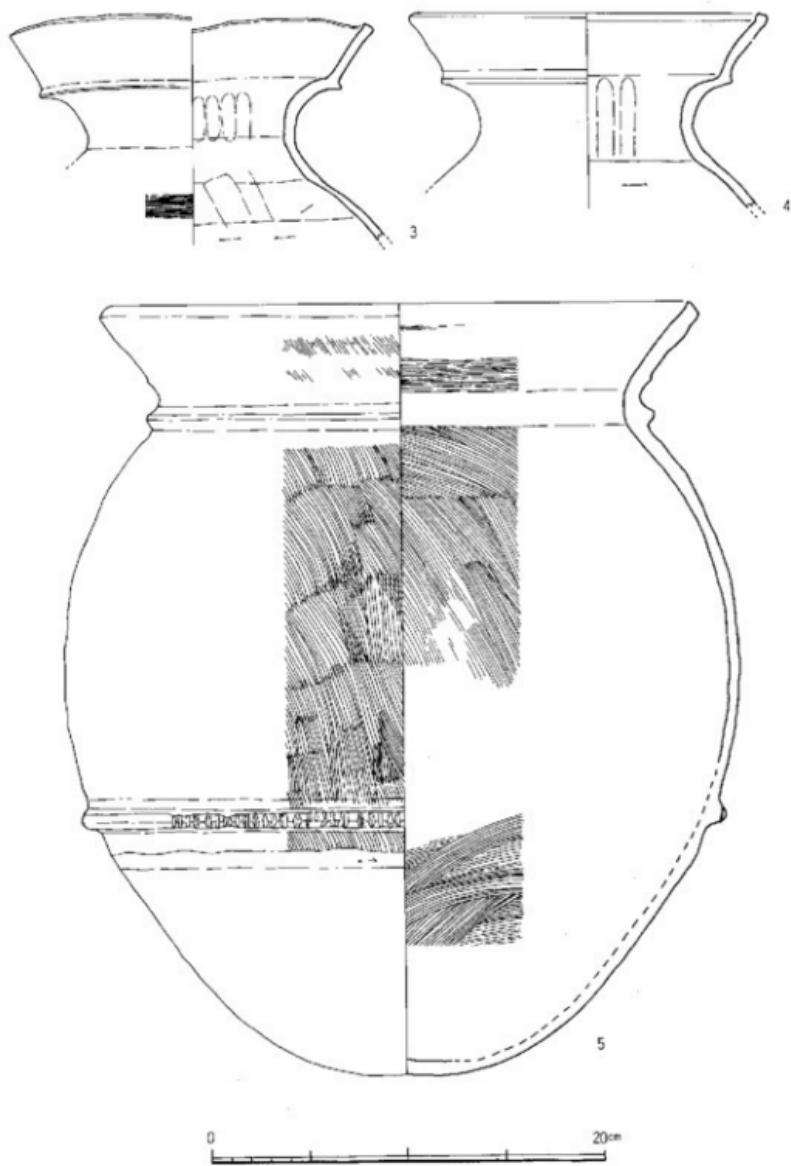


Fig.46 SC-39出土遺物実測図(2)

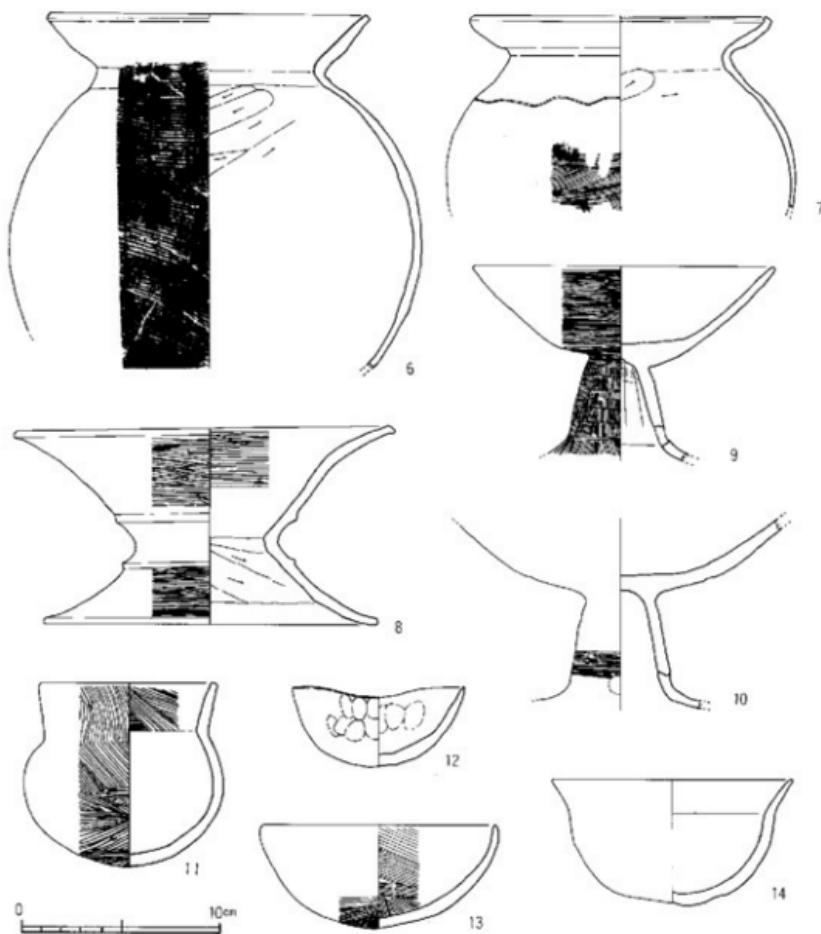


Fig.47 SC-39出土遺物実測図(3)

えていたが、焼土中から近世磁器片が出土したので、後世の焼土であることが判明した。床面には南壁に寄った位置で径1mの大ピットがある。覆土は灰白色砂層で住居址床面近くの覆土と同様であり住居址に伴なうものであろう。他に炉、カマド等の施設はない。遺物は床面より浮いた状態、覆土上層からの出土である。

出土遺物 (Fig.50・51、PL.24・26)

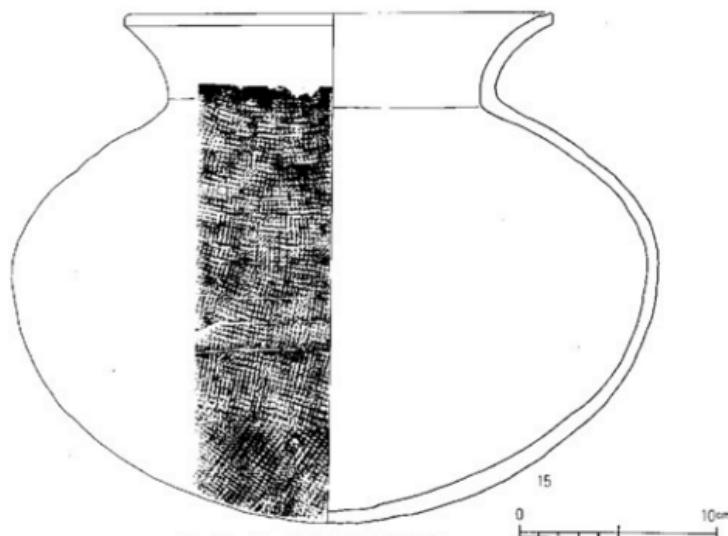


Fig.48 SC-39出土遺物実測図(4)

土器器

壺（1、2、12、13、） 1、2は口縁部の破片である。口縁部は肩部から外反し、端部を内側へ摘み出す。調整は内外面とも横ナデである。12、13は小型丸底壺である。肩窓の肩部に内窓気味の短い口縁部がつく。端部は丸く收まる。外面は刷毛目の後ナデ調整、内面は磨耗のため不明である。

甕（3～10） 3は直線的に開く口縁部で端部は丸くすぼまる。外面には煤が付着し、内面はヘラケズリである。4～10は内窓気味に外に開く口縁部をもつ一群である。口縁部の内外面は横ナデ、肩部の外面は刷毛目、内面はヘラケズリである。4は肩部に5条の平行沈線をめぐらす。5は口縁下が膨らみ稜をもち端部は外反し丸く收まる。7は肩部に一条の沈線をめぐらすが、全周しない。4も二条の波状沈線が認められる。

高坏（14～17） 14は口縁部の一部を欠損する。口径33.4cm、器高24.0cmを測る大型の高坏で全体に歪みをもつ。坏部は底部と体部の境に明瞭な段をもち、外反する口縁部となる。脚部はあまり広がらず、2ヶ所に穿孔する。調整は坏外面が刷毛目の後ナデ、内面ナデ、脚部は刷毛目のあとヘラ研磨である。16は脚部片で穿孔がある。外面は刷毛目の後ヘラ研磨、内面は刷毛目でしづり跡が残る。

土製品（18） 円筒形の土鍤である。両端部が少し欠ける。最大幅1.4cm、長さ3.5cmを測る。

鉄製品（19） 先端の刃部を欠損する刀子である。現存長9.6cm、厚さ0.3cmの板状を呈し、基部から刃部にかけて幅広くなり先端を片面へ曲げている。

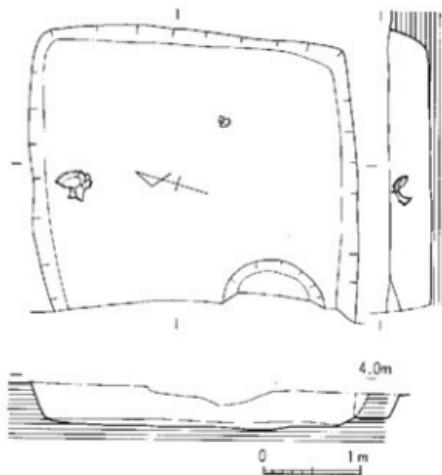


Fig.49 SC-40実測図 (縮尺: 1/60)

溝の調査

SD-44 (PL.14・15)

III区の北端に検出した、調査区と直交する大型の溝である。大部分は調査区外へ延びており、全体の規模、方向、形態は明らかではない。調査した範囲では幅2.5m、長さ5.8mを測る大溝である。おそらく幅4～5mになる溝であろう。堆積上層が暗灰色砂層、下層は少し灰褐色砂を混入した黄白色砂層である。この溝は今回調査した地点では比較的高い位置にあり、集落を横断する可能性があるが、狭い範囲の調査であり不明な点が多い。遺物は多量に出土している。古墳時代前期の土師器、玉砥石、鉄ノミがある。

出土遺物 (Fig.52～55、PL.24～26)

土師器

壺（1～11、26、28～30） 1は二重口縁で著しく短胴の壺である。復元口径29.6cm、器高28.4cmを測る。胴上半部と底部は接合しないが、胎土、色調等より同一個体と考えられる山陰系の土器である。胎土には砂粒を含むが精良で、焼成良好で色調は淡褐色である。全体に磨耗が著しく調整は明確でないが、外面は刷毛目、胴内面はヘラケズリであろう。2～8は二重口縁壺の胴～口縁部の破片で、口縁下に突起状の屈曲部をもつ一群である。口縁部は内外面ともヨコナデ、胴部外面は刷毛目、内面はヘラケズリである。3、4、7は口縁端を内側へ強く擒み出す。6は両方へ肥厚させ、5は丸く收める。9、10は球形の胴部からラップ状に開く口縁部である。11は頸部に三角突起をもつ。内外面とも刷毛目調整で、その上から横ナデを行なう。

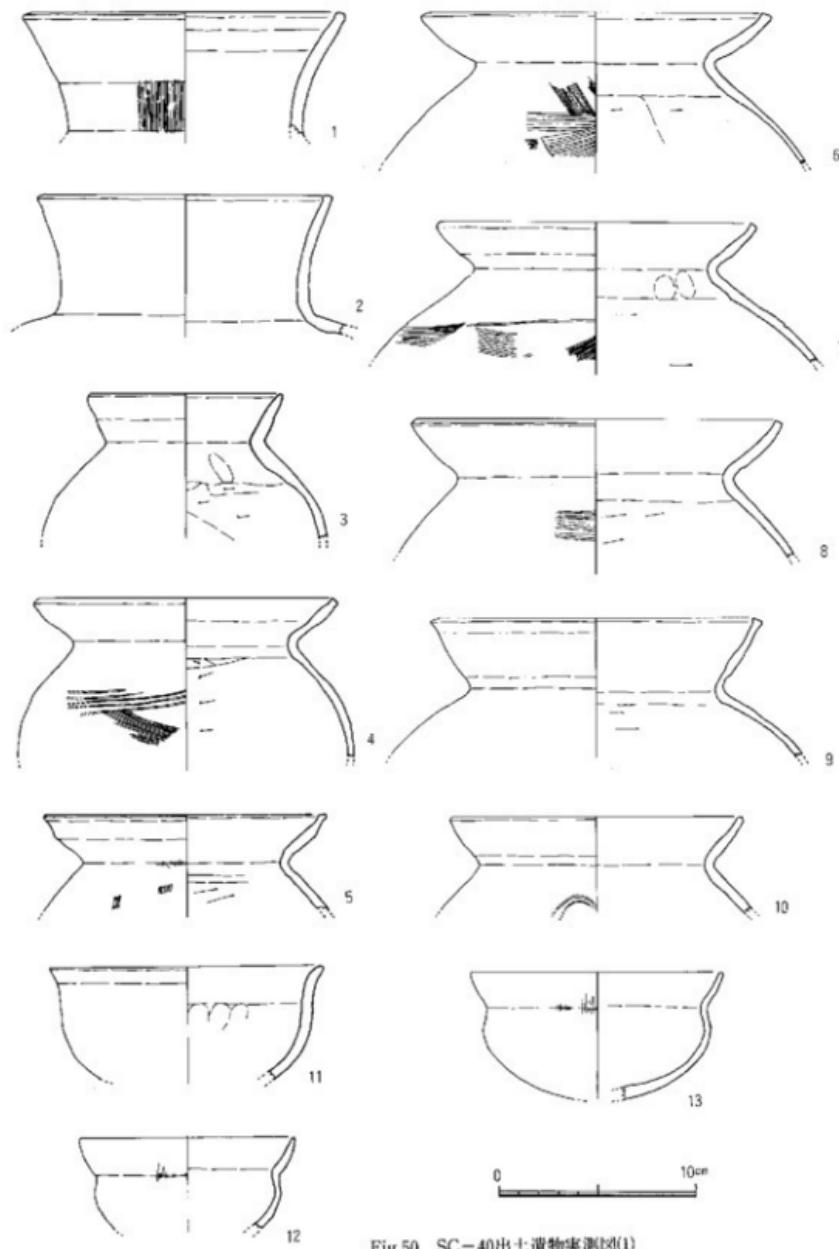


Fig.50 SC-40出土遺物実測図(1)

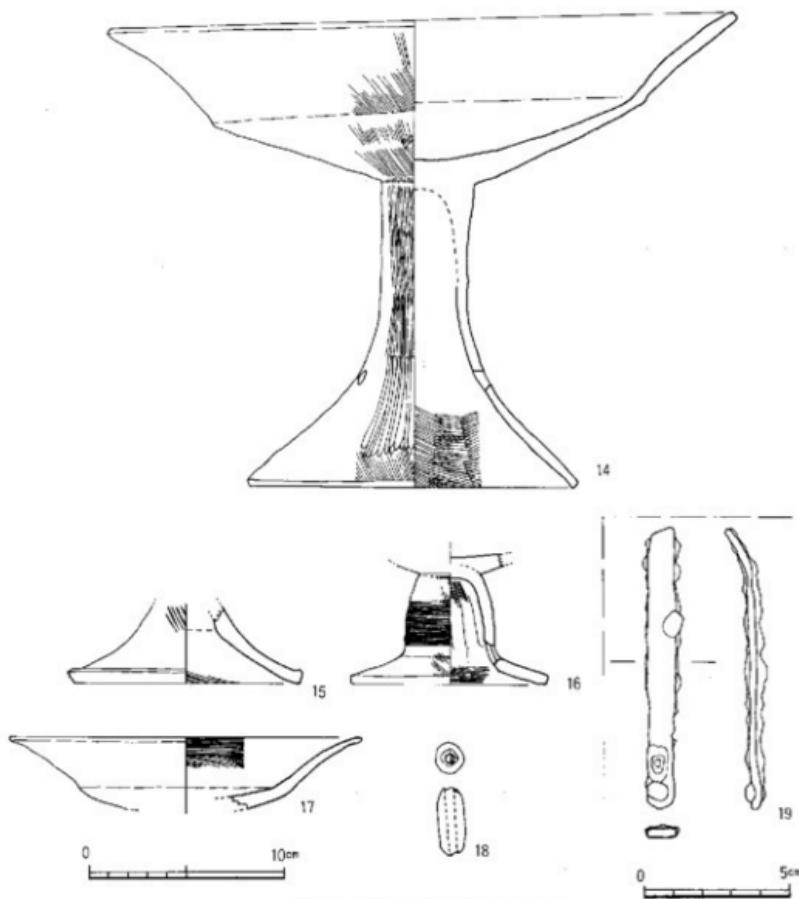


Fig.51 SC-40出土遺物実測図(2)

26は直口壺の口縁部であろう。色調は黄褐色で胎土に砂粒を含む。内面は刷毛目で外面は丹塗でタタキの後横ナデを行なう。28~30は小型品である。28は脚付の直口壺であろう。内外面とも研磨を施す。29は頸部に突帯をもつ小壺である。内外面ともナデ調整である。外面に丹塗の痕跡が認められ、全面に塗布されていたものであろう。30は小型丸底壺の破片である。

壺 (12~25、27) 大部分が頸部から内窪しながら外に開く口縁部をもつ一群である。口縁部の内外面は横ナデ、胴部外面は刷毛目、内面ヘラケズリである。口縁端部を内側へ摘み出すもの、そのままのもの、外側へ引き出すものの三類に分けられる。肩部に刺突文を描くものが

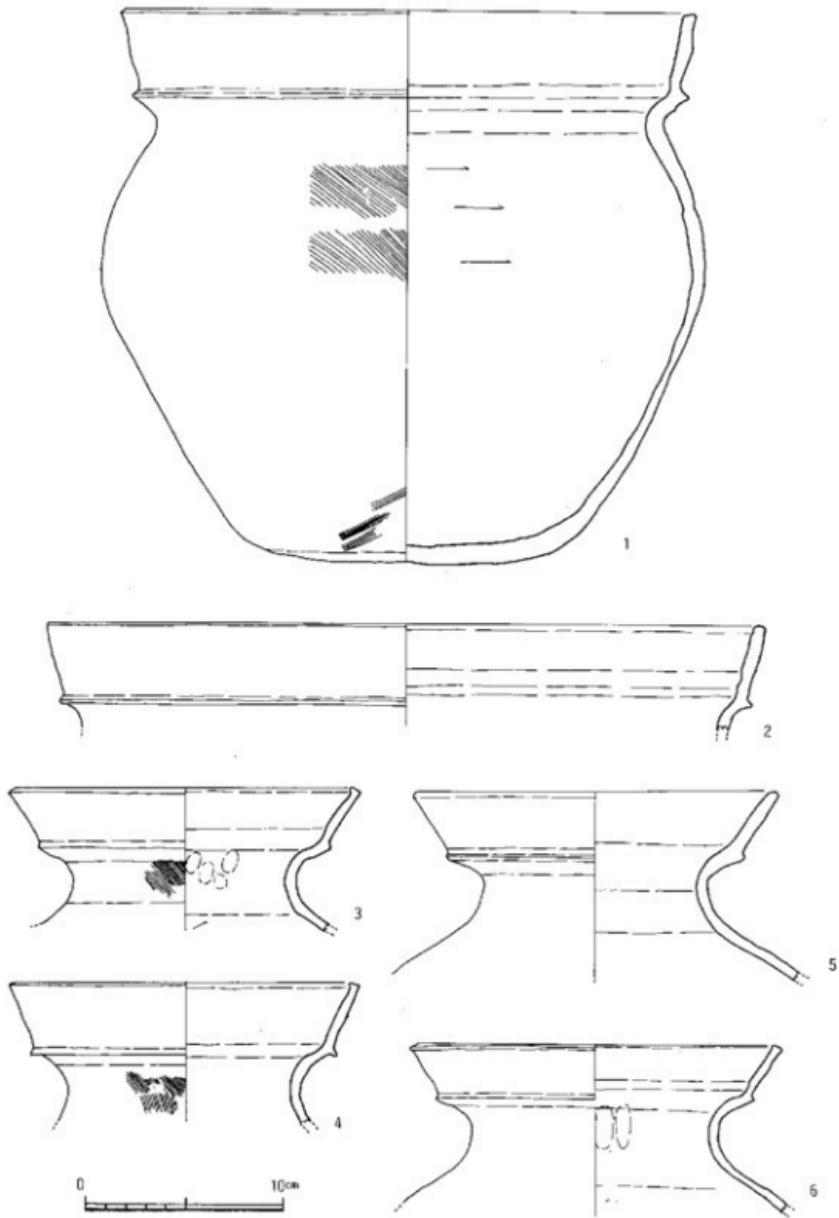


Fig.52 SD-44出土遺物実測図(1)

ある。14はヘラ描の羽状文で、15は米粒を押しつけたような文様で、16は櫛状工具による文様である。小破片のため文様が全周するものか、あるいは羽状文になるのか不明。20は肩部に四条の波状文、21は単線の沈線を描く。22は長い脚部でくの字に屈曲する口縁部となる。調整は内外面とも粗い刷毛目である。27は底部片で内面を粗い刷毛目、外面はナデにより底部との境に棱を形成する。

塊(31、32) 31は完形品である。口径12.4cm、器高3.7cmを測る。口縁部は丁寧なナデ、外面は横方向のヘラ研磨である。32は復元口径12.0cm、器高4.2cmを測る。外面は刷毛目、内面はナデ調整である。

高坏(33~35) 33、34は大型の高坏の口縁部である。内、外面とも刷毛目の後ヘラ研磨を施す。35は坏底部と体部の境に明瞭な段をもつ。

器台(36、37) 小型丸底壺とセットをなすものである。36は復元口径10.2cm、器高8.4cmを測る。器壁が荒れているが外面はナデ、脚内面は刷毛目が残る。脚部に2孔をもつ。37は脚部の一部を欠損するがほぼ完形品である。受部の屈曲は明瞭で、脚部は大きく開く。外面は受部が横位の研磨、脚部は刷毛目の上から研磨、脚内面は刷毛目で指跡が残る。2個の穿孔をもつ。

タコ壺(40~42) 砲弾形のタコ壺である。40は完形品で口径5.9cm、器高8.6cmを測る。胎上には砂粒を多く含む。外面はナデにより調整するが指跡が多く残る。内面はナデの後ヘラで下から上へ搔き上げる。口縁下に一孔を穿つ。41は少し大型品で口縁部を欠く。外面の調整は他と同じであるが、内面は底から口縁部にかけて指で搔き上げている。

石製品(43) 砂岩製の玉砾石である。4面を使用しているが、玉砾石として使用しているのは2面である。上面に三条の凹線を刻み、断面はU字状である。一侧面にも一条の凹線が縁と平行に延びる。使用的磨耗により中央部が薄く縁は厚くなる。

鉄製品(44) ノミ状鉄製品である。ノミと同様に使用されたらしく基部は叩打により頭がつぶれている。基部は中空で断面円形でその先は長方形となり、先端はバチ状になり両側より尖す。全体に錆が著しいが、内部までは浸透していないのか、かなりな重量がある。全長28.2cmを測り、基部は2.8~3.1cmの円形で中央部は1.0×1.6cmの長方形である。刃部幅は1.35cmで先端部が少し幅を広くする。

土壤の調査

SK-45 (Fig.56)

III区の北側にありSD-44と切り合う土壤である。西、南側は擾乱土壤に切られる。土壤が遺存するのは東辺だけで南北に延びる。全体の規模、形態は不明であるが現在長3.2m、幅0.9mの浅い狭長な土壤である。壁面はゆるやかに立ち上がり、壁高0.2mを測り、床面はほぼ平坦である。擾乱により遺構の大部分を削平されているので全体の形態が不明であるので土壤として扱ったがI区のSK-04、05と同様の様相であり竪穴住居址の可能性がある。遺物の出土は少な

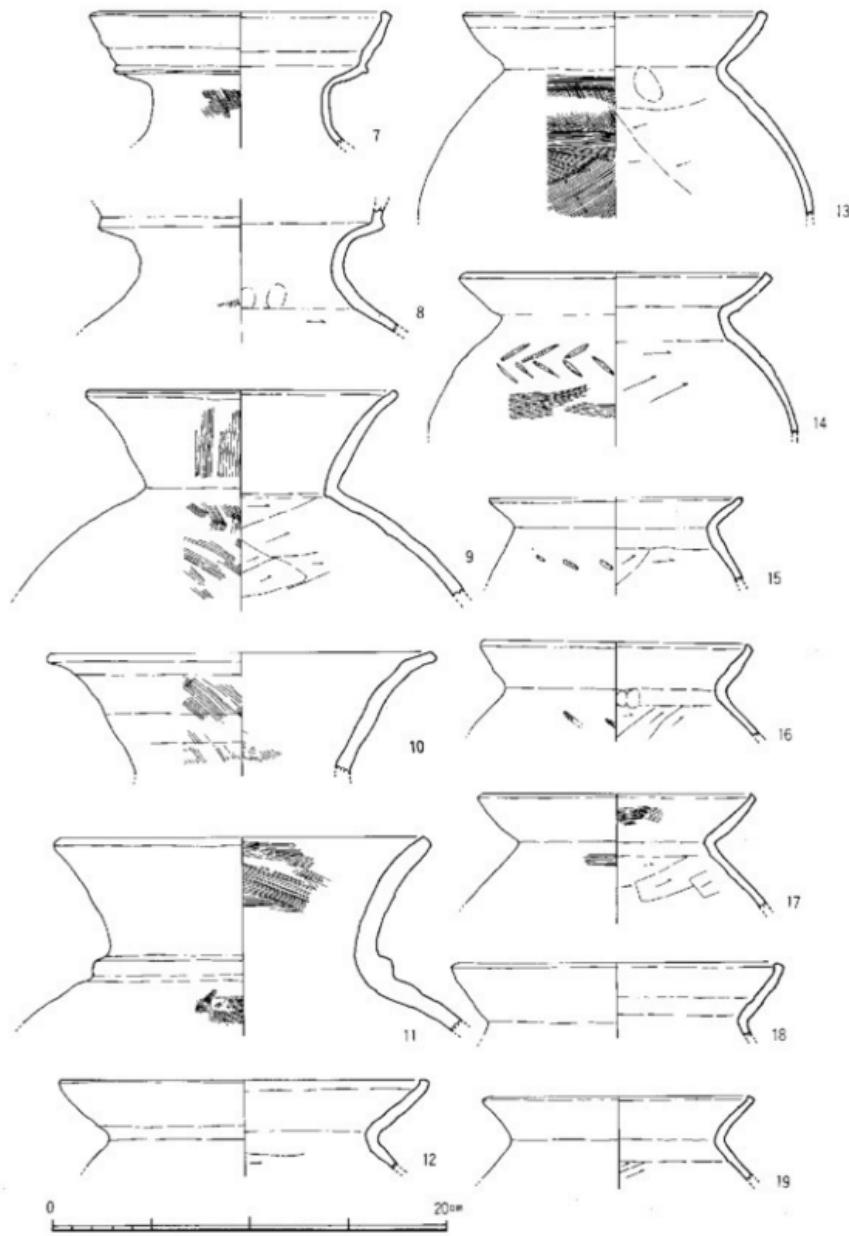


Fig.53 SD-44出土遺物実測図(2)

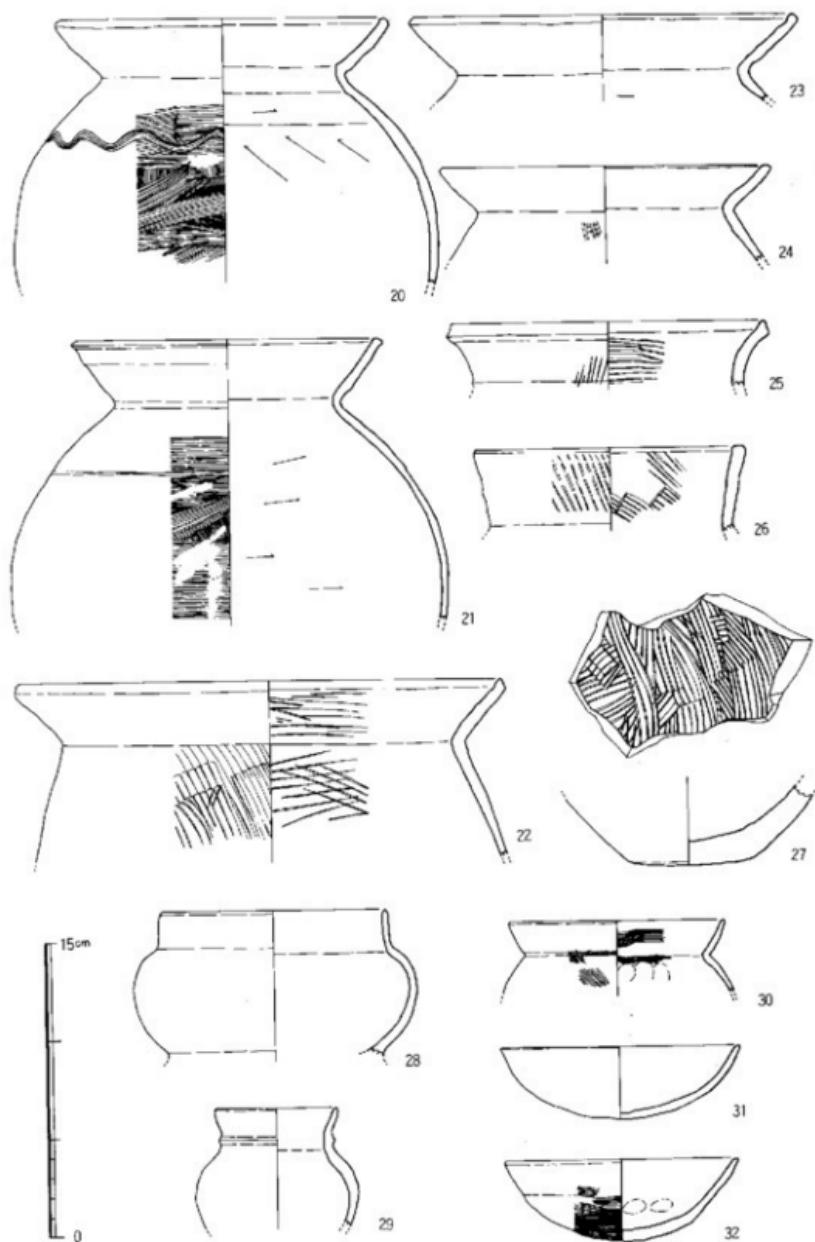


Fig.54 SD-44出土遺物実測図(3)

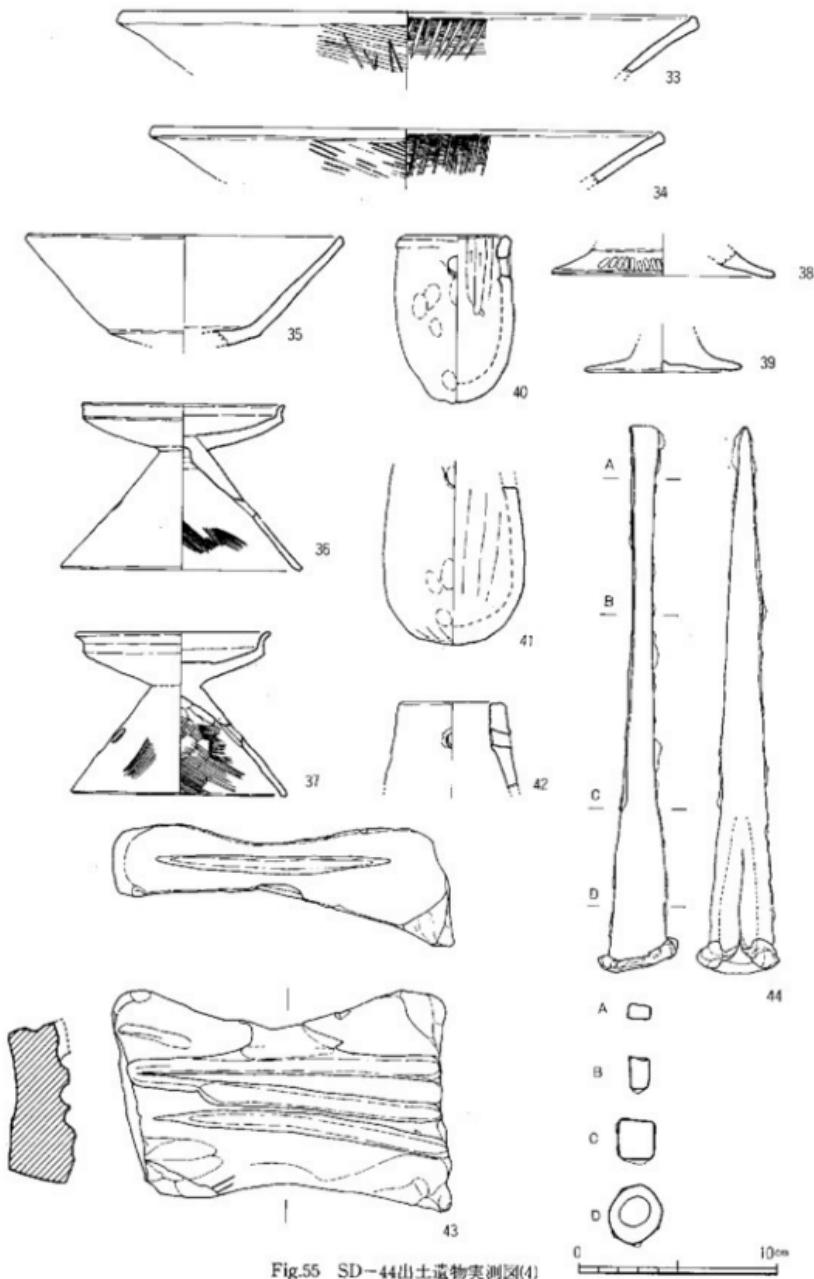


Fig.55 SD-44出土遺物実測図(4)

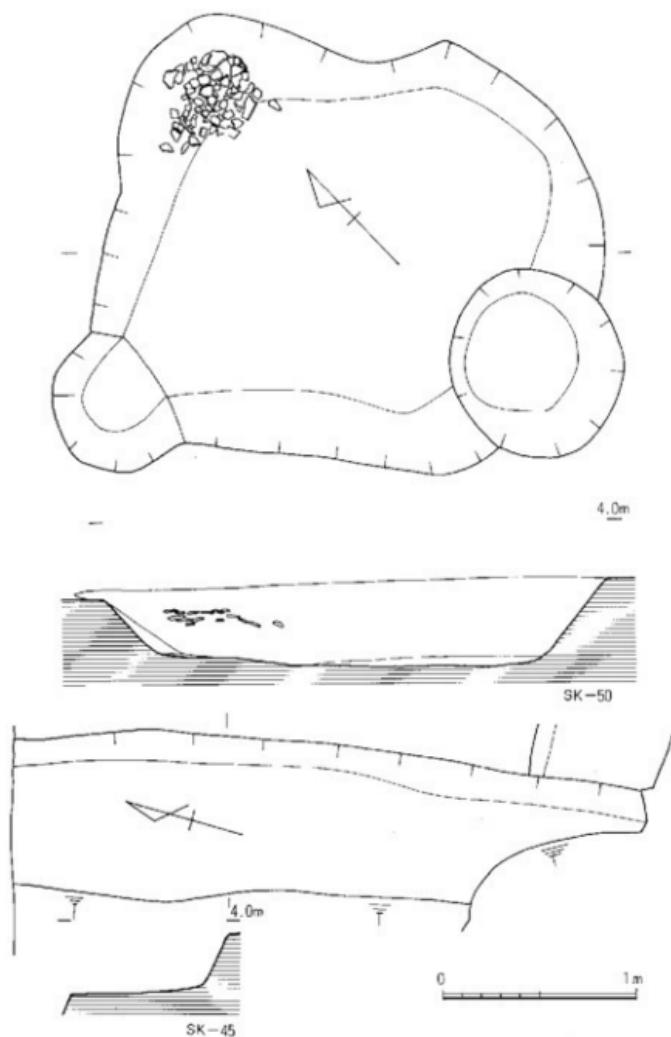


Fig.56 SK-45・50実測図（縮尺：1/30）

く上師器が数点である。

出土土器 (Fig.57)

土師器が2点出土している。1は脚台付壺で脚部を欠損する。外面は刷毛目その後、横位のヘラ研磨、内面は横ナデ調整である。2は高壺の脚部である。器面が荒れているので調整は明らかでないが、外面に刷毛目、内面にしばり痕が残る。

SK-50 (Fig.56, PL.16)

IV区の中央より少し西に寄った位置にある土壇である。平面形は不整形な角張った大型土壇で、覆土は上層が暗褐色砂質土、下層は灰白色～黄白色砂層となる。南側をピットに切られ、北西部を擾乱土壇に切られる。土器は上層からの出土であり、土壇の北西部に押し潰された状態で出土した。

出土土器 (Fig.57, PL.25)

3は小型の直口壺である。胎土に砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈する。外面はヘラ研磨、内面は横ナデである。4も直口壺である。ほぼ完形品で口径11.5cm、器高21.1cmを測る。球形の胴部から直立する口縁部となる。内外面とも刷毛目調整を行ない、その上から口縁部は横ナデ、胴部内面はナデ調整である。焼成は良好で胎土には小砂粒を含むが良好、色調は暗黄褐色である。外面には煤が付着する。5、6は長い胴部から外反する短い口縁部となる。内外面とも粗い刷毛目調整である。

SK-51 (Fig.58)

IV区の中央より北に寄った位置にある略円形の土壇である。径約1.8～1.9mで深さ0.4mの断面圓状を示す。覆土は灰白色砂層である。遺物は少なく土師器が数点出土する。

出土土器 (Fig.59)

実測可能な土器はタコ壺1点のみである。1は砲弾形のタコ壺で、外面には指の押圧痕が残り、内面にも指による搔き上げ痕が残る。破片が小さいので口縁下の孔は認められない。

SK-52 (Fig.58)

IV区の調査区の西壁に沿って検出した大型の土壇である。大部分は調査区外へ拡がり、全体の規模は不明である。現存長5.6m、幅1.7m、深さ0.7mを測る。床面は南北に一段の平坦面をもち、中央部がさらに深くなる。覆土は灰白色の粗い砂層である。遺物は上師器だけで、量は少ない。主に南側の平坦面及びその周辺からの出土である。

出土土器 (Fig.59)

2は直立する口縁の二重口縁壺である。外面に刷毛目が残るが他は横ナデである。3は壺の底部片で外面には刷毛目が明瞭に残る。底部は中央部が少し窪む。6は広口壺の口縁部であろう。外面は丁寧なヘラ研磨、内面はナデ調整である。8、9は高壺である。8は壺底部と体部の境に段をもち、口縁部は直線的に開き端部は尖り気味となる。内外面とも刷毛目のあとナデ

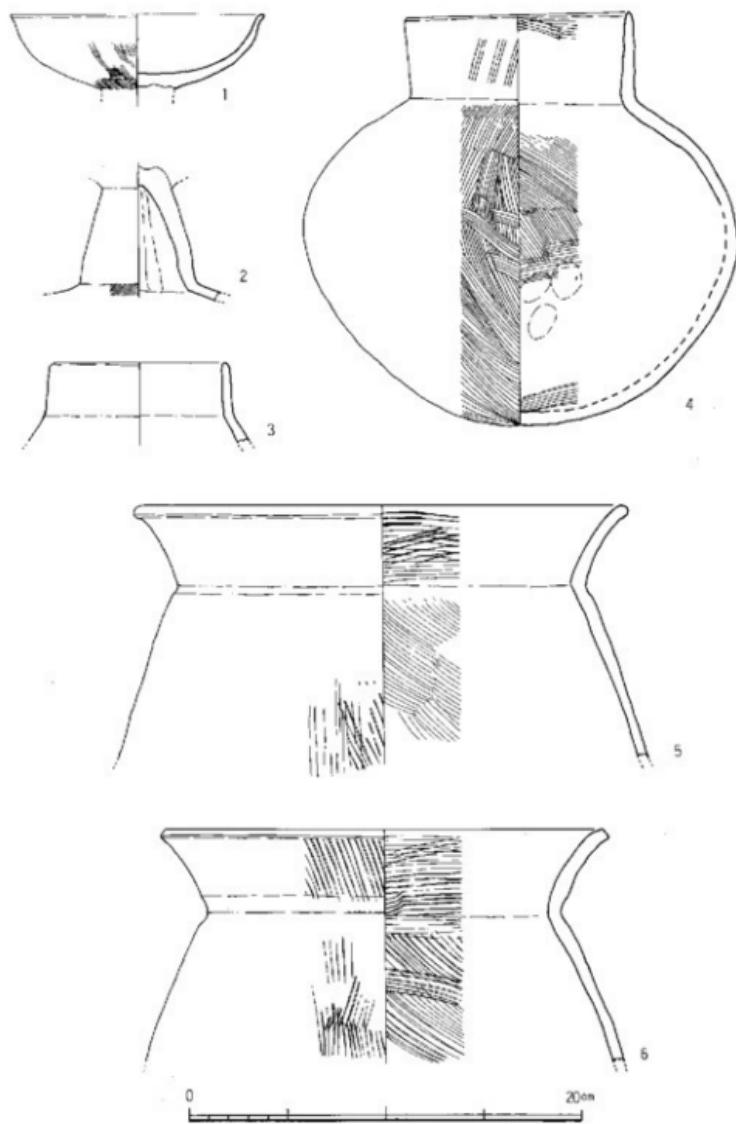


Fig.57 SK-45・50出土遺物実測図

調整である。7は壺の口縁部である。底部から内窵して口縁部となる。外底部近くがヘラケズリで他は横ナデである。10、11はタコ壺である。砲弾形で内外面とも指跡が残り粗雑な作りである。

ピット出土の土器 (Fig.60、PL.15・25)

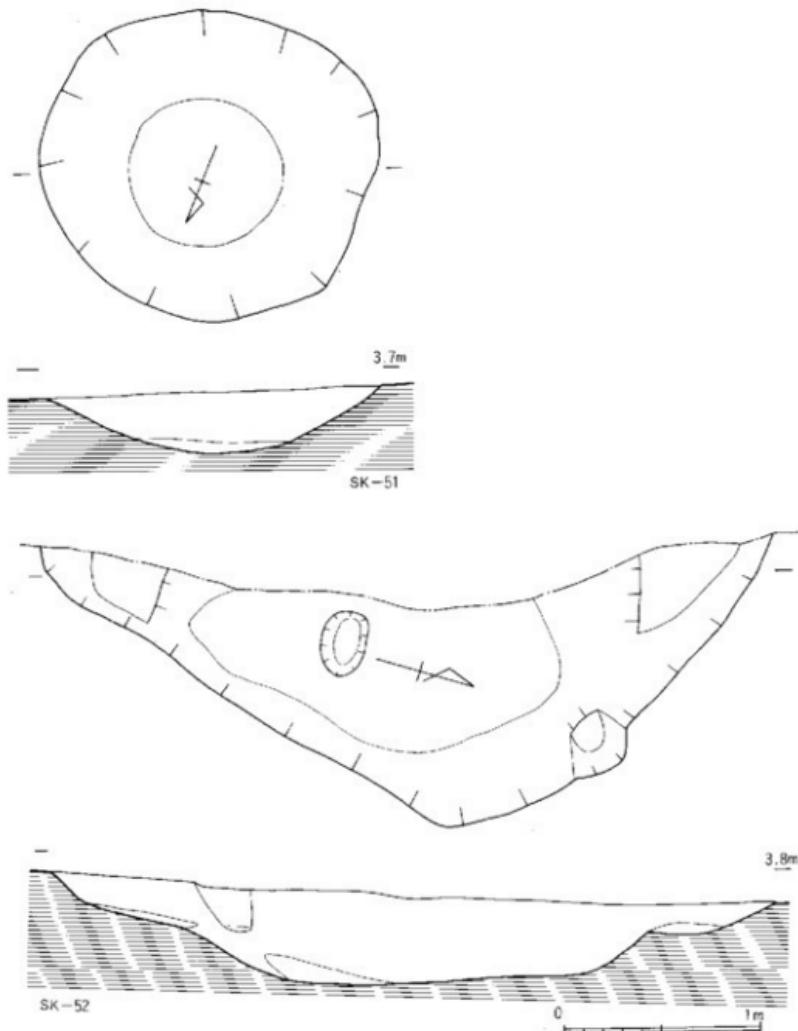


Fig.58 SK-51・52実測図 (縮尺: 1/30)

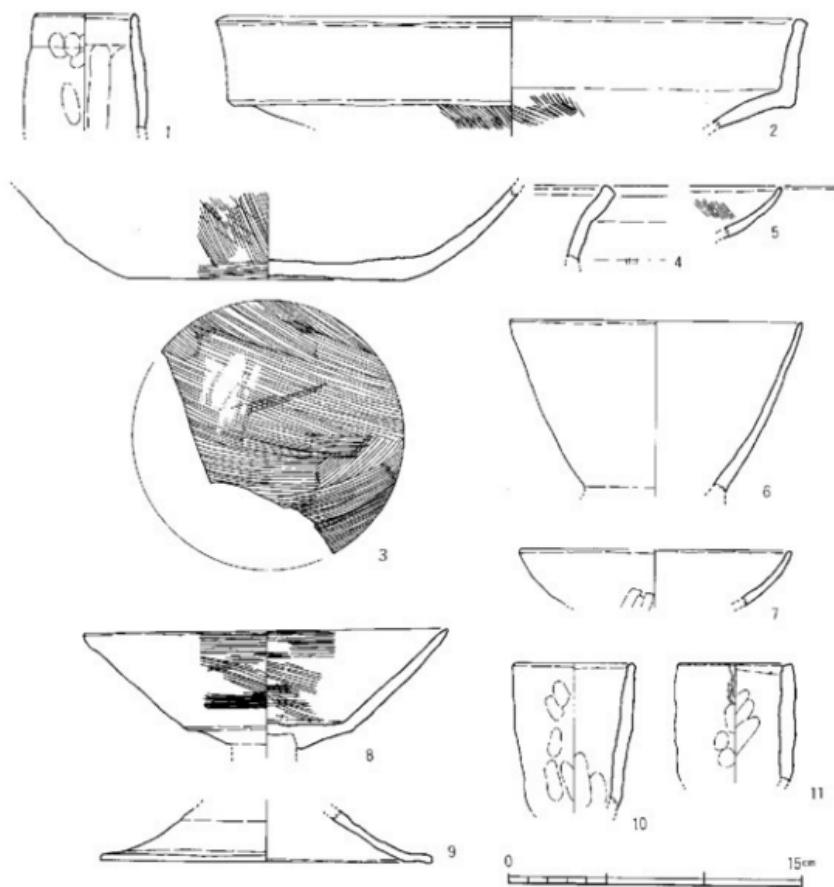


Fig.59 SK-51・52出土遺物実測図

1はSP-13から出土した弥生式土器の甕の口縁部片で前期末の土器である。胴部から外反する口縁部となり外端に刻目を入れる。外面は刷毛目の後ナデ、内面もナデ調整を行なう。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好で色調は黄茶褐色である。2はII区SP-21から出土した砲弾形の完形品のタコ壺である。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好で色調が灰黄褐色である。調整は粗雑で内外面に指跡が残る。3はIII区のSC-39に切られたSP-66から出土した高坏である。完形品で横転の状態で出土した。坏底部と体部の段を境に外反する口縁部となり、端部が厚くなる。坏外面は刷毛目の後ナデ、脚部は刷毛目の後ヘラ研磨、内面は坏部が刷毛目の後暗文風のヘラ研磨、脚部は刷毛目調整である。4はIV区SP-68出土の弥生時代中期前半の小型の

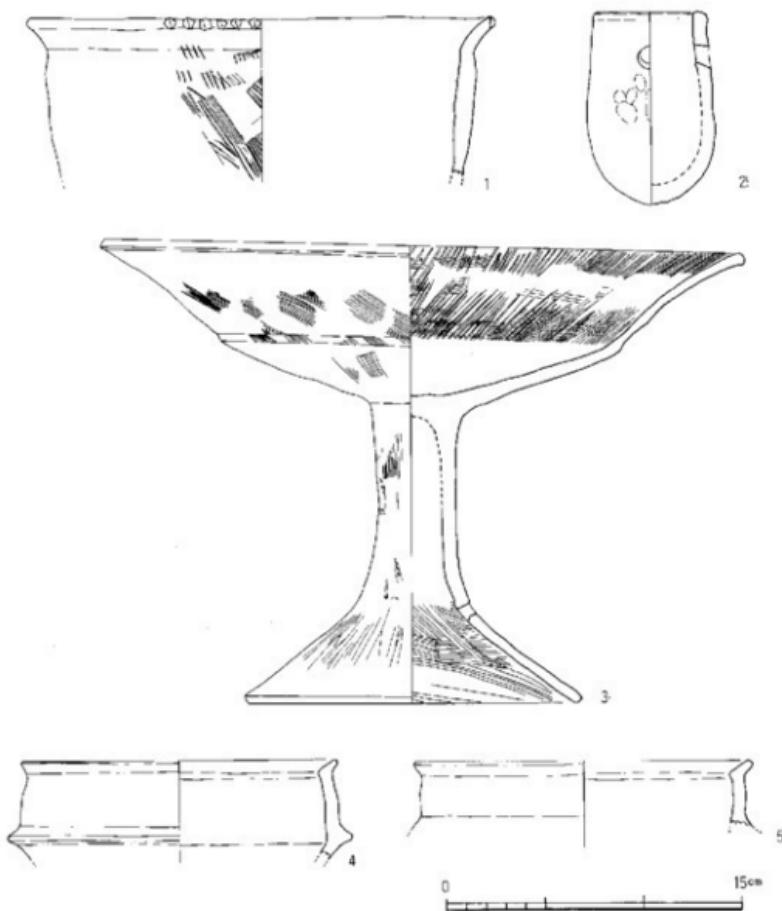


Fig.60 ピット出土遺物実測図

鉢であろう。胸部に突帯をもち口縁端部を外反させ、内側へ傾斜させる。器表面は磨耗して調整不明。5はIV区SP-73出土である。4と同じ形態のものであろう。

住居址、土壤、溝一覧表

(単位cm)

住居址

No	平面形	長さ	幅	深	方 向	Fig	備 考
SC 13	隅丸長方形	455	350	40	N-15°E	13	主柱穴4本、(古墳時代前期)
SC 16	隅丸長方形	470	310	43	N-20°E	17	主柱穴2本、(")
SC 18	長方形?	430	(400)	37	N 75°E	22	(")
SC 28	長方形?	295	西辺(280)	(240)	E-37°S	23	(")
SC 31	隅丸長方形	(440)	350	55	N 16°W	25	主柱穴2本、カマド基部、(古墳時代前期)
SC 39	長 方 形	北辺(380)	西辺(350)	33	N-70°W	44	(")
SC 40	長 方 形	330	(280)	45	N-74°E	49	(")

土壤

(単位cm)

No	平面形	長さ	幅	深	方 向	Fig	備 考
SK 01	長楕円形	130	(90)	35	N-45°W	3	(近世)
SK 02	長楕円形	80	76	37	N-45°W	3	(")
SK 03	隅丸長方形	275	(155)	40	N 88°E	5	(古墳時代前期)
SK 04	隅丸長方形?	北辺285	東辺(105)	25	N-79°E	8	(")
SK 05	不整長方形?	西辺(300)	東辺50	20	N-23°W	11	(")
SK 06	隅丸長方形	245	95	27	N-79°E	30	(")
SK 07	楕円形	186	113	15	N-33°E	30	(近世)
SK 08	楕円形	120	110	38		30	(古墳時代)
SK 10	不 定 形	南西辺(275)		22	E-19°S	(")	
SK 14	不整円形	150	(50)	45	E 25°S	32	(")
SK 15	不 明	東辺(130)	(65)	20		30	(")
SK 19	長楕円形	140	110	30	N-13°W	32	(")
SK 20	長楕円形	200	120	42	N-83°E	33	砂層、焼土層20cm、(古墳時代)
SK 21	楕円形?	90	80	50	N-10°E	33	(")
SK 23	不整円形?	(150)	(140)	35		33	(")
SK 24	楕円形	(170)	(140)	60	N-14°W	36	(古墳時代前期)
SK 25	長楕円形	(90)	(70)	70	N-20°E	40	(古墳時代)
SK 26	長楕円形	(130)	(60)	30	N-15°W	40	(")
SK 27	隅丸長方形	250	190	20	N-16°W	40	(")
SK 29	長楕円形	(200)	230	50	N-71°E	42	2基土壙南側
SK 29	不 明	南西辺(150)		50	E-38°S	42	2基土壙北側
SK 30	隅丸長方形	140	90	42	N-41°E		
SK 33	不 明	南東辺(160)	(95)	14	N-39°E		(古墳時代)
SK 34	長楕円形	145	55	35	N-16°W	43	焼土層
SK 35	楕円形	(125)	120	13	N-25°E		
SK 36	楕円形	155	110	12	N-10°E		
SK 37	不整楕円形	190	155	33	N 52°E		
SK 38	楕円形	265	(225)	48	N-22°W		(近世)
SK 41	隅丸長方形?	北辺(230)	75	17	N-74°E		(")
SK 45	不 明	320	90	20	N-13°W	56	
SK 46	楕円形	135	110	13	N-6°W		
SK 48	不整楕円形	130	110	19	N-67°W		
SK 49	長楕円形	235	140	43	N-47°E		
SK 50	不整隅丸長方形	260	220	46	N 43°W	56	
SK 51	楕円形	175	160	40	N-16°W	58	
SK 52	隅丸長方形?	北東辺(340)	南東辺(370)	88	N-18°E	58	
SK 54	長楕円形	185	115	25	N-74°W		
SK 55	楕円形	135	110	19	N 28°E		

溝

(単位cm)

No	平面形	長さ	幅	深	方 向	Fig	備 考
SD 09		(400)	80	20	N 7°E	32	(近世)
SD 42	L字形	315	35	14	N-16°W		(不明)
SD 44		(610)	250	82	N 73°E		(古墳時代前期)

※()内は時代

図 版

P L A T E S

1. I 区全景 (北より)



2. SK-01 (東より)

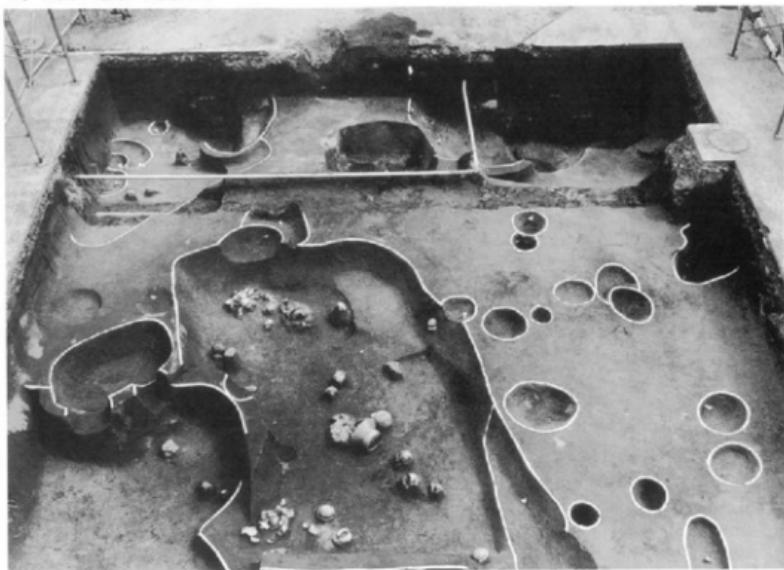


PL. 2

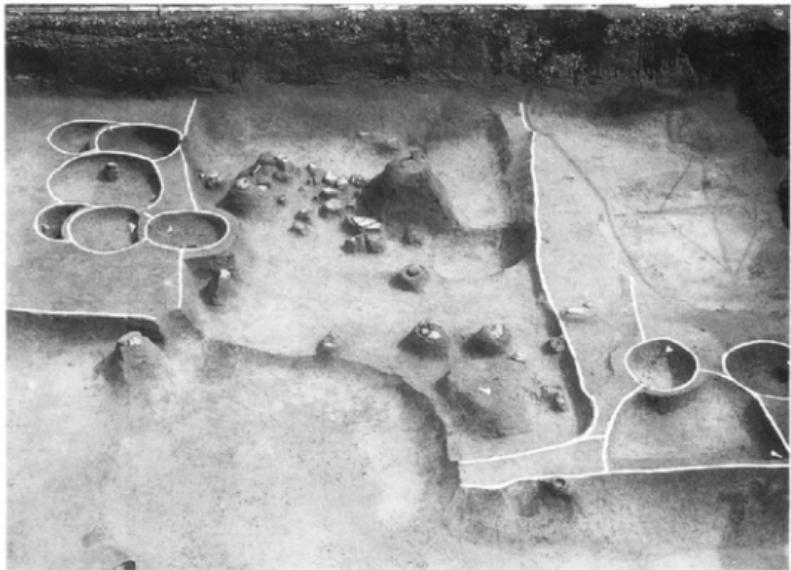
1. II区全貌（北より）



2. II区B全景（北より）



1. SC-16 (北より)



2. SC-16 遺物出土状況



PL. 4

1. SC-16 柱穴検出状況



2. SC-16 烧土土層



1. SC-16 燥土檢出狀況



2. SC-16 袋物出土狀況



PL. 6

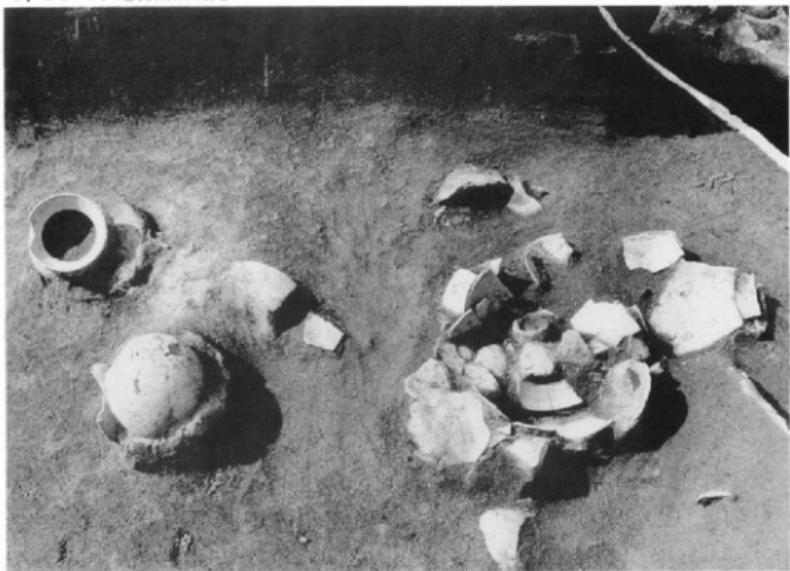
1. SC-18 遺物出土状況



2. SC-31 全景（東より）



1. SC-31 遺物出土狀況



2. SC-31 遺物出土狀況



PL. 8

1. SC-31 遺物出土状況



2. SC-31 カマド検出状況（北より）



1. SK-06 (西より)

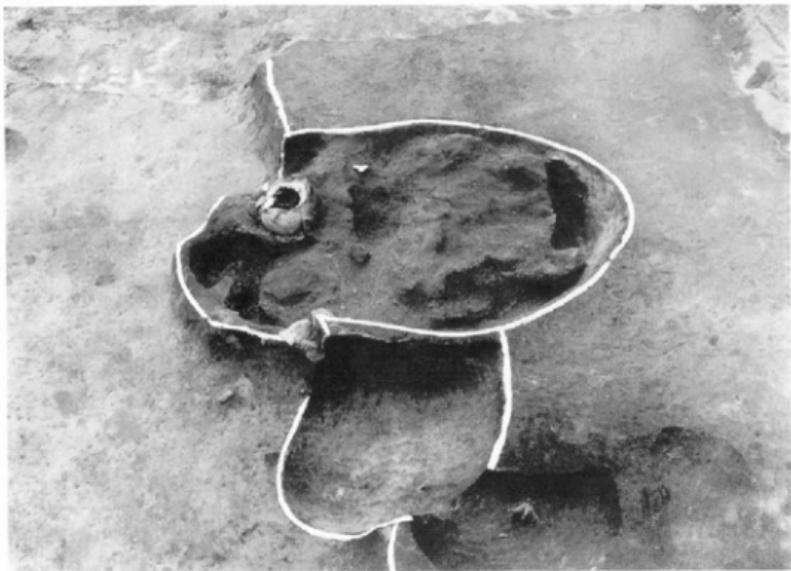


2. SD-09 (北より)



PL.10

1. SK-20 (南より)



2. SK-20 蔡出土状況



1. SK-24 遺物出土状況

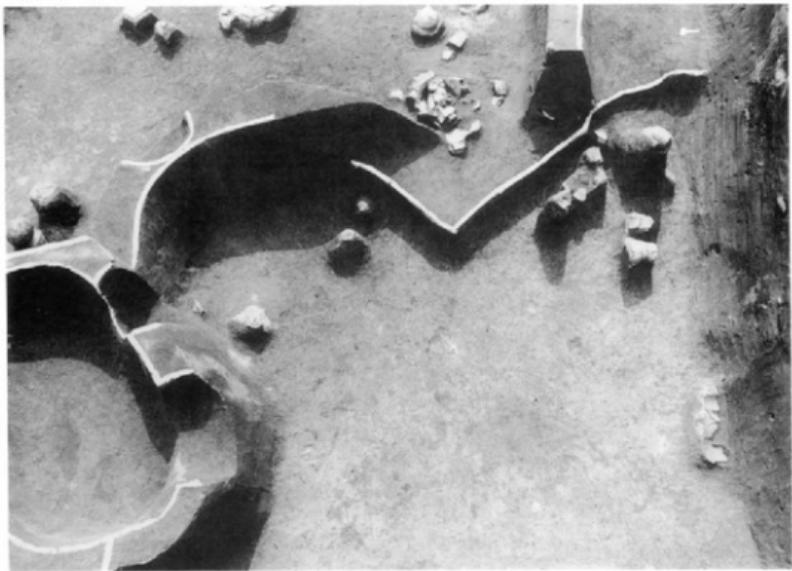


2. SK-34 (西より)



PL-12

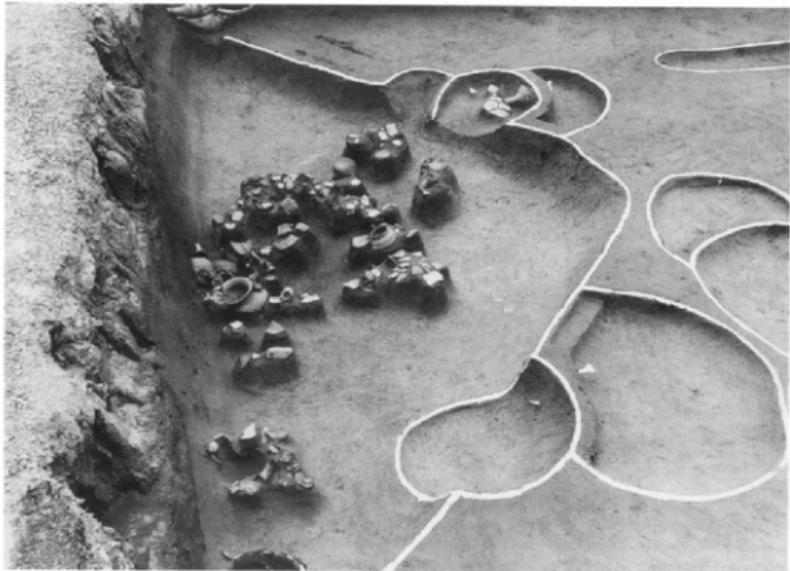
1. SK-29 (西より)



2. 田区全景 (北より)



1. SC-39 全景(東より)



2. SC-39 陶質土器出土状況



PL.14

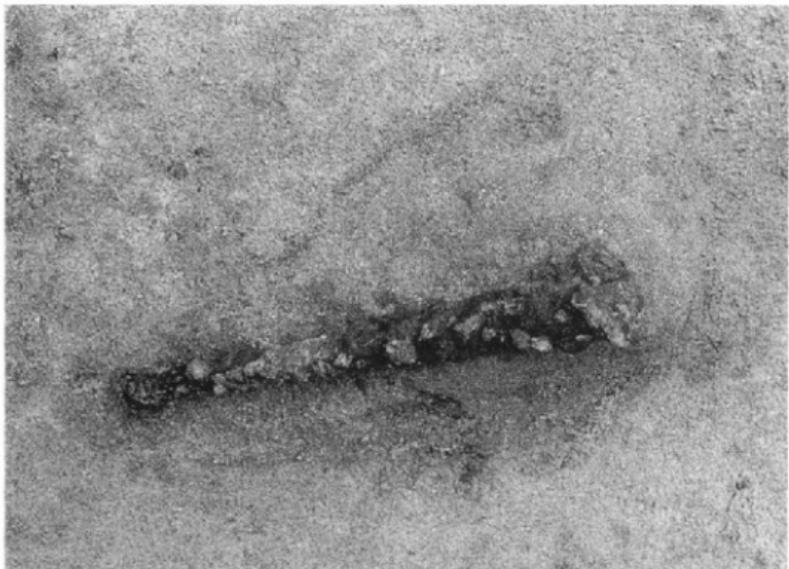
1. SC-40 全景（西より）



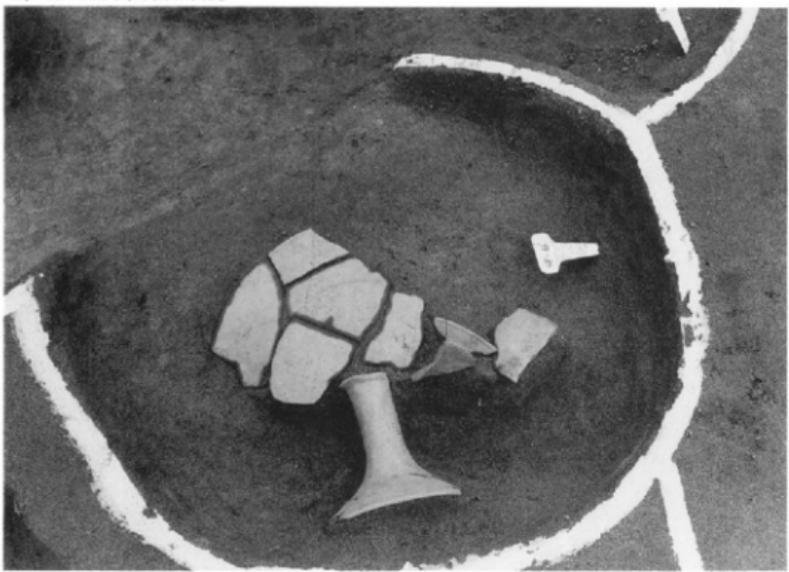
2. SD-44 (東より)



1. SD-44 ノミ状鉄器出土状況



2. SP-66 高环出土状況

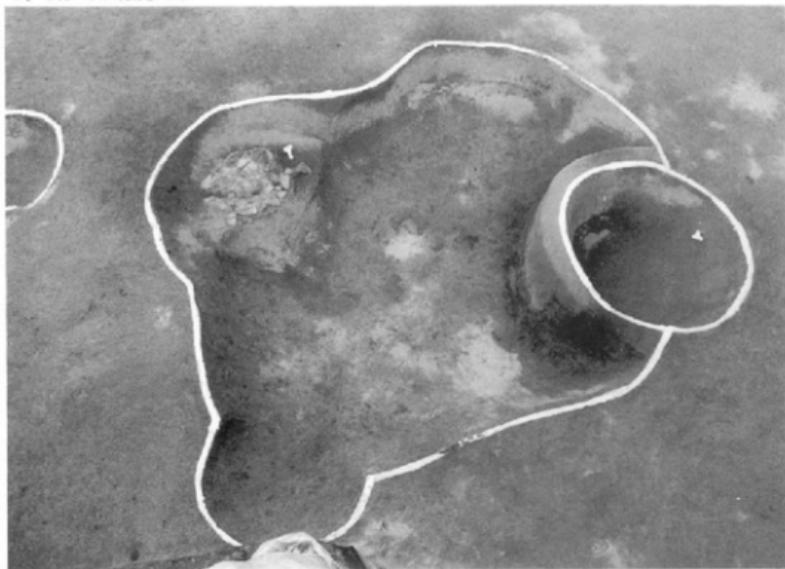


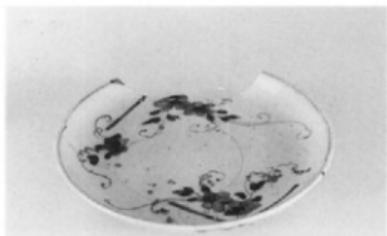
PL.16

1. IV区全景(北より)



2. SK-50(西より)





SK-01

1



2



SK-03

3



4



5



6



SK-04

7



8



9

SK-01・03・04出土遺物



SK-04

1



2



3



SC-13

4



5



6



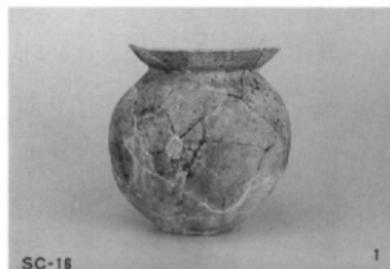
7



8



9



SC-18

5

SC-16・18・31出土遺物



1

2

3

4



5



6



7



8



9

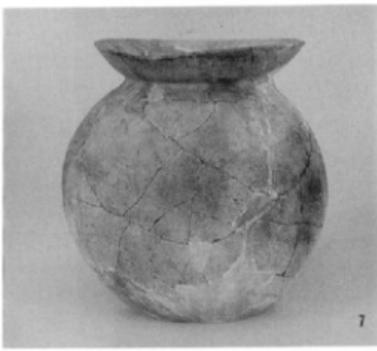
SC-31出土遺物



SK-15・20・24出土遺物



SK-24·25·29出土遺物



SC-39出土遺物



SC-39

1



2



3



SD-44

5



6



7



SC-40

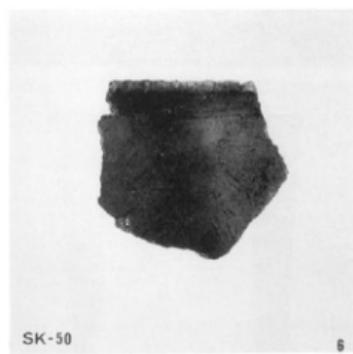
4



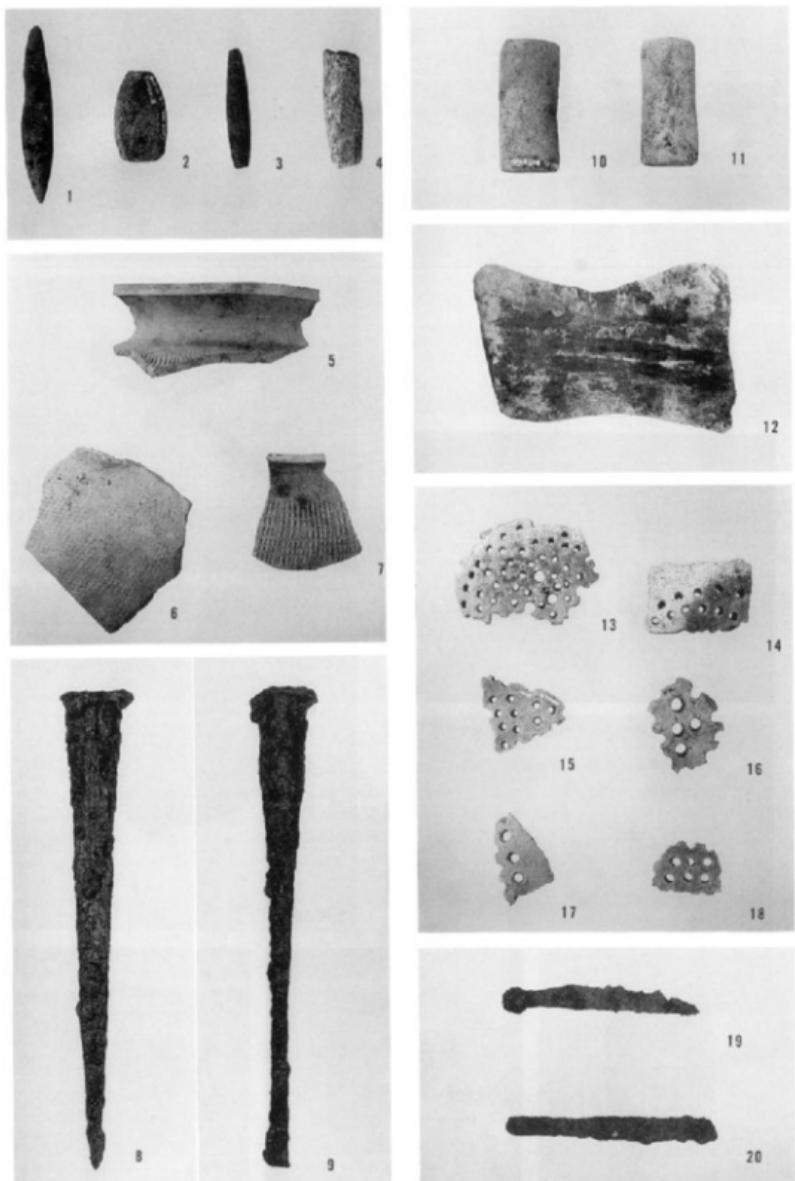
8



9



SD-44 · SP-13 · 21 · 66 · SK-50出土遺物



各構出土遺物

福岡市埋蔵文化財調査報告書第203集

西新町遺跡

1989年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 赤坂印刷株
福岡市中央区大手門1丁目8-34

